照井竜とアクセルの異世界巡り

紫炎-sien-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
照井竜とアクセルの異世界巡り

【Ｎコード】
Ｎ２３２８Ｓ

【作者名】
紫炎－ｓｉｅｎ－

【あらすじ】
仮面ライダーアクセルとして戦っていた照井竜が島本凪と出会い、ウェザーから護る途中に敗北死し異世界転生と言う設定のお話です。

《原作を壊されたくない人は閲覧をお控えください。》
※１０／１１、タイトル変更いたしました

不慮死なR／理不尽な神との遭遇

死んでしまった。
力が及ばなかった・・・
両親が殺された俺は、シュラウドという覆面の女に仮面ライダーアクセルとして戦うための力を貰ったというのに・・・

最初は風都の風なんて好きじゃなかった。
だが、アイツ・・・自称ハードボイルドな軟派私立探偵：左翔太郎と出会って俺は変わり始めていた。

なのに、井坂真紅朗に・・・ウェザー・ドーパントの操る天候に打ち負けてしまった・・・

仮面ライダーアクセルとしての俺の人生はあっけなくピリオドを打たれてしまったわけだ・・・

なのに・・・俺は未だに真暗な空間でフワフワとした感覚に包まれて先へと進めない。
それ所か、未だに死んだ感じがしない・・・
どういう事なんだ・・・？

『・・・えぇ～、コホン！そろそろ良いかの？』

何者だっ！！

『私はぁ～・・・神だぁ～・・・貴様を転生させるために来た。』

ほぉ、自分の運も捨てたもんじゃないな・・・

『貴様は、前世にやり残したことがあるな・・・？』

俺に質問するなぁっ！！

『・・・えぇ～・・・』

そこまで会話をすると、神様は滅茶苦茶渋い顔をしてしまった。
言い過ぎたのだろうか・・・？
つい昔の癖で、神様を怒鳴りつけてしまった。
しょうがない、下手に出て上手くその気にさせるか・・・

あのぉ、神・・・すまない、つい昔の癖で言い過ぎてしまった・・・
悪気はないんだ・・・

『・・・いい・・・』

ん？
なんだ、何が言いたいんだ・・・？

『もぉ、良いもん！分かったもん！！お前は手違いで死んだから上手く頑張れば《仮面ライダーWの世界：風都》に生き返らせようと思ったけど止めたもん！』

なに・・・手違い、だと？

『うん、手違い。ウェザー強くし過ぎたから、アクセル・トライアルに進化させる手前で不慮の事故。』

と、言うことはアレだな・・・？

俺が新しい力を手に入れる前に誤殺してしまったと言うんだな・・・？

それなのに、自分の都合で生き返らせないだと・・・？

『あ、あれ・・・？怒ってます？』

変・・・身っ！！

アクセルメモリのボタンを押し、電子音を鳴らす。
アクセルドライバーへアクセルメモリを装填。
アクセルドライバーへ設置されているバイクのハンドル状の物を軽くひねる。
まるで、バイクのエンジンを吹かすかのように・・・
すると、バイクの疑似音が轟く・・・
そして、一瞬の内に仮面ライダーアクセルへとチェンジした。

さぁ、振り切るぜ！？

『アレ、ワシ神様なのに・・・死亡フラグ立ってない・・・！？』

俺に質問するなぁ～っ！！！

《Ａｘｃｅｌ・・・・・Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！！！》

炎を纏いながら自称神へと後ろ跳び回し蹴りを叩き込む。
蹴りの軌道上にはタイヤ状の痕跡がエネルギー放出と共に残った・・・
・
アクセルグランツァーが神様を襲ったのだ・・・

『ふ、不幸だ・・・』

絶望がお前の・・・ゴールだ。
っと、言うより不幸じゃなくてお前が悪いんだろう？
公務執行妨害及び殺人未遂で貴様を逮捕する！

いつの間にか変身を解除し、神の手首へガチャッと手錠を掛けた。

『ん、良い調子のようじゃな・・・このまま別世界へ転生して英雄に成ってもらおう。』

何をフザケたことを言っている？
俺が戻る場所はただ一つ、風都署だけだ。
さぁ、ココがドコかは知らないが早く風都へ戻してもらおうか・・・？
それとも、今度はエンジンブレードで斬り裂くか・・・

『仮面ライダーが生身の人間に容赦ない攻撃とは・・・』

黙れ・・・

それ以上照井竜は一言も喋らなかった・・・

その沈黙に耐えかねた自称神は照井竜を別次元へと飛ばす事にした。
・・・結局か・・・

『頑張って別次元を救うんじゃな！貴様のベルトとメモリ・・・それと、貴様に必要な物は全部届けてやるわい！トライアルメモリもな！ワシ偉いじゃろ？感謝したいじゃろ？』

キサマァ～っ！！
次にあったときは容赦なくタタッ斬るっ！！！
～～～～ッ！！！！！

ムカついた様子の照井竜へほくそ笑み自称神は寝転がり菓子を食い始めた。
この神、ホントにヤル気があるのだか・・・

だが、飛ばされた照井の手元には確かに必要な物が一式揃っていた・・・
赤いカスタムバイク・・・愛機のディアブロッサが置いてあった。
もちろん、メモリとドライバー
それと、貯金通帳と財布もだ・・・
服装は、最後にアクセルに変身したときのままである。
気に入っている服なので非常にありがたい。
だが、あの自称神へ感謝すると考えると今でも腹立たしい・・・

それにしても、ココはドコなのだろうか・・・？

不慮死なR／理不尽な神との遭遇（後書き）

今回は仮面ライダーアクセル×様々な世界・物語りです！

照井竜さんがパラレルな世界を救うために大奮闘しちゃいます。

不慮死なR／照井の不幸の始まり・・・

照井竜が、この場所に来て一時間が過ぎたくらいだろう。
日が落ち始めていた。
じきに夕方になるのは分かりきっていた。
照井は、再度持ち物を確認しバイクへ跨ることにした。

『仮面ライダーアクセルとしての装備一式、財布、預金通帳、身分証明書（免許証）、手錠（予備二つ）、ペンダント、赤い革製の普段着、愛機：ディアブロッサ』

「はぁ・・・はやり何度確認しても警察手帳だけはないか・・・」

溜息を一つ漏らし、ディアブロッサへエンジンブレードを収納した。
メモリとドライバーもなおして、ゆっくりとバイクを発進させることにした。

街を走っていると、マイクロバスが目の前で急停車してしまった。
普段なら見過ごすのだが、乱暴な運転とも言える切り方だったので取りあえずは注意することにして、ゆっくりとバイクを道脇へ止めることにした。

ゆっくりとマイクロバスへ歩み寄る照井・・・
マイクロバスの扉が急に開き、高校生らしき女の子が血相を変えて飛び出す姿が見えた。
さらには、車内から飛び出してきた男と口論しているようにも見える。

照井はそのやり取りを遠目に見て馬鹿馬鹿しくなってしまった・・・
キビスを返し、バイクの所で一度立ち止まった・・・
照井の視線の先には大型バスが走っている。
かなり遠い。
だが、照井が見ているのはその車内だった・・・
人が人を襲っているように見えたのだ・・・
それも普通にではなく、食べているようにも見える。
次の瞬間には運転手まで襲われ、バスは蛇行運転し始めてしまう。
（・・・どうなっているんだ？人が人を喰らっているだと！？）
そこまで考えると、急に体が軽くなるのを感じた。
そして、立ち眩みに襲われた・・・

一瞬の内に真暗な空間へと引きずり込まれてしまった。
小一時間前と同じ空間だ・・・

『よう竜ちゃん、元気かい？』

キサマァ・・・何の用だ・・・！？

『嫌ね、その世界での君のお仕事を教えとくの忘れたなぁ～っておもって・・・呼んじゃった、テヘッ♪』

フザケてないでさっさと教えてもらおうか・・・？
それと、警察手帳も見当たらないが・・・必要なものは揃えてくれるんじゃなかったのか！？

『まぁ～まぁ～・・・まず君に救って欲しい世界には《奴ら》と称

されるゾンビがいる。ワシの手違いで増えてしまった《奴ら》の駆除・殲滅。それに伴って、警察って言う職業は邪魔だったから手帳は用意しなかったんだけど・・・要る？』

忘れたのか、俺に質問するなと言っただろう・・・？

『むぅ・・・せめて、2、3日後に御別東署に配属されると言っておけ。今は休みと言っておけ。ワシからの唯一のアドバイスじゃ』

そうか・・・

その助言には感謝をしよう。

だが、一つ気に掛かることがあるんだが・・・

お前の手違いでゾンビ共が繁殖したのか・・・？

『うむ、アメリカをバイオハザードにするべく計画していたのじゃが・・・間違って全世界がゾンビパンデミックじゃ』

噛まれれば俺も奴らの仲間に・・・？

『そぉ～なるのぉ～』

なんていい加減な神なんだ・・・

お前のせいで何人の人間が死んだと思っている！？

『放って置けば勝手に増殖するものじゃ・・・さぁ、早く収拾つけてきてくれ。』

瞬時に元の場所へと帰ってきてしまった。

ひとまず、アレがゾンビの詰まったバスなのかも知れない。

（生存者は０か・・・仕方ない。）

マイクロバスの後方へ隠れ人目をしのぎ、仮面ライダーアクセルへと変身した。
どう立ち回るか考えたが、それを実行するより早く大型バスは普通車へと衝突し・・・勢い良く若い男女へ突撃して行ってしまう・・・

「チィ・・・」

舌打ちと同時にバイク形態へ変わり、二人とバスの前に立ちはだかる。
エンジンブレードを斜め上へ斬り上げると、バスが真っ二つに分かれて飛び散っていく・・・
一つはトンネルの前へ、もう一つへ反対車線を塞ぐ。

（どうやら一方通行の道を作ってしまったようだな・・・だが、生存者を優先して助けるのが得策・・・んっ？）

二つに分かれたバスから這い出てくる人影が見えた。
ゾロゾロとホフク前進して這い出てくる《奴ら》だ・・・
火が引火しているが、動いている。

（倒すしかないか・・・）

ゆっくりと後方を向き、二人へ話しかけたアクセルを若い男女は恐怖心を抱きながら見つめていた・・・
当然である。
壊れ掛けた世界に・・・それも、生命の危機に・・・

目の前へ
全身真赤な装甲を施したナニカが、常人の遙か上を行った斬撃でバスの軌道を反らしてしまったのだ・・・・
正常に物事を考えられるはずがない。
その時、２人はボォ～ッとしていた・・・

ー小室ｓ　Ｓｉｄｅ

必死の思いで藤美学園からマイクロバスで脱出した小室孝、宮本麗、毒島冴子、高城沙耶、平野コータ、鞠川静香の六人は脱出の際に仕方なく助けた教師の紫藤、他数名の生徒と乗車していた。
運転は校医である、鞠川静香
バスの前方は小室たち、後方が紫藤たち・・・と、分かれた位置取りで座っていた。

一名を除いて・・・

「だからよぉっ、このまま進んだって危険なだけだってば！！だいたいよぉ！！」

「「「「・・・・・・・・」」」」

後から乗ってきた、紫藤の教え子の一人だろう・・・
髪の一部を染め、逆立てている不良の様な生徒だ・・・

「なんで俺らまで小室たちに付き合わなけりゃいけないんだ？お前ら勝手に街へ戻るって決めただけじゃんか。寮とか学校の中で安全な所を探せばよかったんじゃないのか！？」
「そうだよ・・・このまま進んでも危ないだけだよ・・・どこかに

立て籠もったほうが、さっきのコンビニとか・・・」
急にバッとハンドルを切り、道路脇へと車を止める。
「今からだって遅くない！だいたい俺は・・・」
「もう、いい加減にしてよ！こんなんじゃ運転なんか出来ない！」
「〜〜〜ッ」

さっきの会話を中断するように鞠川が言った一言。
それは、とても正論だった・・・
ろくに運転も出来ないほどマイクロバスの・・・主に後ろの連中はイラだっていた。
その意見で彼らの集中力も切れつつあった。

「んだよぉっ、何見てんだやろうってのか！」
小室は、席を立ち自分の好きなように主張する自己中心的な男子生徒を睨んでいた。
「ならば君はどうしたいのだ？」
毒島の、この一言は的を射ていた。
反論に困った男は小室へ八つ当たりした。
「気に入らねーんだよ、コイツが気にいらねーんだ！！」

「なにがだよ？俺がいつお前に何か言ったよ？」
「てめえっ！！」
男が先に手を出すよりも早く、席を立った麗が槍術で男の腹を殴り突けた。
水月へクリーンヒットしたのだろう・・・
ウズクマり、苦しんでいる。
「・・・最低。」
冷ややかな目で見下し、一別し小室へと向き直った。
「孝」
後ろからの突然の拍手。
麗はビクッと体を震わせた。
「実にお見事！素晴らしいチームワークですね、小室君　宮本さん！」
「ッチ！」
麗は舌打ちした。
「しかし・・・こうして争いが起こるのも私の意見の証明にもなっています。」
「で、候補者は一人きりってワケ？」
「私は教師ですよ、高城さん。そして皆さんは学生です。それだけでも資格の有無ははっきりしています。」

クルリと後ろを向き、紳士的動作で皆の賛同を求める。
「どうですか、みなさん？私なら・・・問題が起きないように手を打てますよ？」

後方からだけバァ～ッと拍手喝采が起こる。

「・・・と、いう訳で多数決で私がリーダーという事になりました。今後は・・・」

「先生、開けて・・・開けてください！私、降りる！降ります！」
「え？でもあの」
「～～～～～～～～ッッ」

がチャと助手席のドアを開け飛び降りた。

「麗！？・・・・・・麗！！」

「イヤよ！そんな奴と絶対一緒にいたくなんかない！！」

「行動を共に出来ないというのであれば、仕方ありませんね・・・」
「何言ってんだ、あんた・・・！」

後を追うように小室がマイクロバスから降りてしまった・・・

「ちょ、ちょっと・・・ウソッ！？後ろからバスがバスが突っ込んでくるわ！！」

それから誰もが諦めた次の瞬間、皆の目の前には全身が深紅で覆われた謎のナニカが彼らの前へと立ちはだかっていた・・・

「・・・何なんだ、コイツ・・・・!?」

小室の小さな一言は、誰にも拾われることなく消えていった・・・

ー照井　Ｓａｉｄ

「おいお前!その女を連れてバスに乗り込め、そしてココをさっさと離れろ!」

顔を少しだけ2人へ向け、残りの視界を全て《奴ら》へ集中する。
フェイスフラッシャーの奥が美しい青の光を灯らせている。
これは、アクセルの力が上がっている証拠なのだが、彼らはその光に見とれてしまっていた。
無論、バス内の鞠川も見とれていた・・・

「小室君、何をしている!速く乗りたまえ!!」

「あぁ・・・はい!麗、行くぞ!!」

手を握り、引っ張ろうとすると俯いて動かなくなってしまう・・・
それから、周りをキョロキョロ見回し始める。

「何をしている、さっさとバスに乗れっ!!!」

「小室君、早く彼女を連れて乗りたまえ！！」

「麗！何してんだよ！？」

「・・・嫌よ、紫藤となんて絶対嫌！行くよ、孝！！」

今度は逆に、宮本が小室の手を引っ張り連れ去ろうとする。

「チィ・・・何だってんだよチクショウ・・・毒島先輩は気にせず先に御別橋の方へ向かって行って下さい！それで、警察で・・・・・・東署で落ち合いましょう！！」

「時間は？」

「午後５時に！今日が無理なら明日の同じ時間で！」

「孝、アレ！！あのバイクを借りましょ！鍵も付いたままだし・・・」

「凄い・・・メーターが３００を越えてる・・・」

「運転できる・・・？」

「無免許運転は高校生の特権！！」

そのままそのバイクのエンジンを吹かし、切断されたバスの小さな隙間を潜り抜けトンネルへと入ってしまった・・・

（俺のディアブロッサがっ・・・！！チィ・・・アイツ等捕まえてしょっ引いてやる！！）

※照井の精神状態は一気に限界点まで来てしまった・・・

大切な、自分で改造した愛機を乗り逃げされたのだから・・・

それから、ホイールシールドを器用に使いクイックターンしながら次々と敵を切り倒していく・・・

（１０・・・１１、２、３・・・１４・・・コレで最後だ！！）

ギュンッ！と最後の一体を断ち切りエンジンブレードのロックハンマーを押すと、中から【ＥＮＧＩＮＥ】のメモリが排出される。
まるで、ショットガンの空薬莢を排出するようにバシュッと飛び出す。
それをキャッチして、即座にバイク形態へと変わり彼らを追うことにした。
大切な愛機：ディアブロッサを取り返すために・・・

（クソ、待っていろディアブロッサ・・・必ず俺が取り返してやるからな・・・）

「アイツを取り戻すためなら俺は悪魔でも何でも構わんッ！！」

最高速で暗黒の荒野を走り抜けた・・・
その先は、絶望に見えた。
照井の目に映ったのは、荒れた道路、フラフラ歩く《奴ら》、ボロボロに成った商店街・・・

照井はディアブロッサがかなり心配だった。
傷一つ付けずに、綺麗に磨きあげたフロントやタンクに、エンジンブレードのために設置したホルスター

改造した日の事を思い出すと、血の涙が溢れそうになった。
照井は、ディアブロッサ回収の思いを新たに強くした・・・

不慮死なR／照井の不幸の始まり・・・（後書き）

以上が2話です。

可哀想な照井さんでした。

今が夕暮れ。

ディアブロッサを盗まれてしまいキレちゃいましたｗｗ

次の話で捕まえて、少々話を交わして逆任意同行・・・完璧です。

乱心のＯ／照井の新たな決意（前書き）

照井竜のディアブロッサは盗まれてしまった。

男女二人の高校生に、たった数分前にである・・・

自分の手間暇掛けて大事に改造してきた愛機を盗まれた照井は我を忘れ走り続けていた。

外はもう真っ暗だった。

バイクのエンジン音も相当のもの。

音に反応する《奴ら》が厄介なのは分かっている。

だから照井は早く愛機を見つけ出したかった・・・

最高速度９２０ｋｍと言う有得ない速度を出せるアクセルのスピードを活かし最高速で

二人を探していた。

フェイスフラッシャーの超人離れした視覚、ガイアソナーの超人離れした聴覚を使えばそんなに苦でもない。

案の定、二人は簡単に見つけることが出来た・・・

乱心のO／照井の新たな決意

一度ライダーフォームへ戻り、ベルトからメモリを引き抜いた。
どこか頼りない音と共に生身へと戻った照井竜は、声のする方へとゆっくり歩み寄って行った。
路地を抜け周りをキョロキョロと見渡しコンビニの横に雑に停めてある愛機が目に入った。
コンビニの曲がり角の所にはパトカーが停まっているのか紅白灯が光っている。

（ようやく捕まったのか・・・？嫌、この世界で警察が普通に機能しているとは思えない・・・と言う事はっ！）

警察の感で走り出し、直ぐに確認した。
照井の予想は正しかった。
大型トラックに後ろから追突され乗っていた警察官2名は死亡していた。
そして、その警察官から使えそうな物を回収している高校生男女2名・・・
もはや確認する必要性は皆無だった。
後ろから忍び寄り・・・

「現行犯だ。」

まず、男の方へ手錠を掛けた。
ボーっとコチラを見ている女にも手錠を掛けた。

「8時13分窃盗の現行犯で逮捕する。」
「ちょっ、待ってください！彼等はもう死んでます！それに、この

終末を生き残るにはこうするしか・・・」
「そうか・・・だが、無免許だろ？それと、あのバイクは俺の物だ。無断借用も見逃すわけにはいかない。非行から正すのが俺の義務だ。お前達も高校生なら親に迷惑をかけない事だな。」
「しょうがないじゃない！！あの時はあぁ～する以外に無かったんだから！」
「なら何故マイクロバスに乗らなかった？俺のバイクを盗むよりマイクロバスへと乗り込む方が賢明な判断だったはずだ。」
「アンタ、警察か？」
「ああ。本当なら三日後にココへと転勤する予定だった・・・まぁ、この状況じゃ警察手帳も持ち合わせていないがな。」

嘘だった。
この世界は元々照井が居る世界ではない。

「一つだけ良いですか？」
「なんだ・・・？」
「俺達は、その親を探す為に逃げたんです。俺の親父は単身赴任で遠くだけど、お袋は小学校の先生なんです。子供が居る限り絶対に逃げ出さない人なんです。コイツの親父も警察官で・・・」
「そうなんです！床主東署の公安係長。階級は警部補・・・何か知りませんか？県警の銃槍術で有名だとは思うんですけど・・・！」
「知らんな。それが本当だと言う証拠も無いし、悪いが手錠は外さない。」

知るはずが無かった。
この世界で分かる事は少ない。
それは、照井竜の首を絞めるようなものだった・・・

そうにか照井はこの世界のことを知りたかったが、その前に客が現れてしまった。

「ねぇ孝・・・アレ！」

指を差した先には《奴ら》が迫ってきていた。
もちろん、反対からも近付いて来ている・・・

「アンタ警察だろ！？なんとかしてくれよ！！」
「・・・チィ！コイツを持ってこの場から離れろっ！！！」

手錠の鍵を投げ渡し、走らせた。
内側の胸ポケットからグロック17を抜き出し、《奴ら》へ撃ち続けた。
彼等の姿が見えなくなるまで乱射した。
超常犯罪捜査課はドーパント等の危険な敵と対峙を予想した彼が特別な許可を得て所持している銃で、普通の銃より段数は多い。
カートリッジ一本で時間稼ぎには成ると予想した彼は、なるべく影の方へと進みながら銃を降ろした。

「そろそろか・・・」

懐からアクセルメモリを出し、スタートアップスイッチを押した。
すると、瞬時にガイアウィスパーが鳴り響いた。

≪ＡＣＣＥＬ！！≫
「変・・・身っ！！」

メモリをモノスロットへ装填し、アクセルドライバーのパワースロットルを全開へと捻りあげる・・・

バイクのエンジン音と共に瞬時に仮面ライダーアクセルへと変わった。

素手で《奴ら》を倒していく・・・

だが、どんなに殴っても半分以上は起き上がり襲い掛かってくる・・・

「チィ！しつこい奴等が、もっとしがみ付いて来い！！」

ブワァ～っと覆い被さるように次から次へと集まってくる。

５０体を越えた頃からアクセルにも負担が掛かってきた・・・

なんとか力で押し上げ、パワースロットルへと手を掛ける。

「永眠がお前達のゴールだ・・・」

優しく言い放ち、全開まで上げるとラジエターラングから高熱が噴出した。

仮面ライダーWのヒートよりも熱い熱に群がって来た《奴ら》も近い奴からドンドン熔けていく・・・

きっとこの辺一帯は腐臭で酷いだろう・・・

遠巻きに居た猫達の姿も今では見当たらない。

それから、近くに居た全ての敵を倒したアクセルはホイールシールドを使い、クイックターンで体に付いた血液を吹き飛ばし変身を解除した。

「嫌なものだな、人を斬るのは・・・だが、《奴ら》を倒さなければ悲しむ人間が増えるだけか・・・」

家族を失った照井は悪を憎んでいた。

そんな思いをする人間が減る事を第一に考える様に成って来た最近

は、仮面ライダーになった事を少し誇りに思い始めていた。
家族を失い、『W』のメモリを持った男へ復讐をする為に仮面ライダーへ成ったあの頃・・・
鳴海探偵事務所の奴等に出会って変わり始めたあの頃・・・
そして、風都を守る為に戦おうと決意したあの時・・・

どれも少し懐かしく感じてしまう彼が居た。
井坂に負けて死んでしまった彼の唯一生き返る為の鍵。
この世界にはびこる《奴ら》と称される『悪』を倒す。

照井は新たに決意し、ディアブロッサへと跨った。
エンジンブレードを収納し、エンジンをかけた。
ハンドルへと引っ掛けられた自分のマスクを被る。
ゆっくりと彼等の後を追い始めた・・・

（これ以上なんの問題も起していなければ良いが・・・）

彼の言葉「自分の親を探す」と言う一言に強く興味を引かれていた・・・
本人も気付かない心のどこかで。
だが、そんな考えも長くは続かなかった。
ガソリンが切れ掛かっていた。

（どこかで給油するか・・・）

最寄りのガソリンスタンドで給油する事にした。
そこには、バイクが一台。
そのバイクへ寄り掛かった女が一人。
見覚えのある制服・・・

（さっきの女か・・・給油、また無断借用か・・・）

少し呆れながら、ガソリンスタンドへと入った。
彼女は、見覚えのあるバイクに少々嫌そうな顔をした・・・

「随分と嫌そうな顔をしたな。」
「い、いえ・・・」

いきなり連続して店内から、とんでもない音がした。
ガシャッ、ガシャッ、ガシャーン！！

「またアイツか・・・そこで待っていろ！何かあったら叫べ。」

走り、店内を目指す。
入って目にしたのは、予想通りの光景。
レジを金属バットで叩き壊した少年の姿だった。
手には無造作に掴れた数枚の札と小銭だった・・・

「コレで現行犯二度目だな。」
「うわっ！・・・刑事さん。」
「もう言い訳できないな。」
「・・・すいません。」

「きゃぁあああああああっ！！！」

「麗！！」

すぐさま外へと走り出してしまった。
照井もそのあとを追い、外へと走り出した。

「ひゃーっはっはっはっ！」

外に居たのは、帽子を被り、歯には矯正器具を付けた男だった。
少女を捕まえ、喉元にナイフを突きつけて脅している。

「兄ちゃん達、可愛い彼女連れてるじゃねーか。」

「麗を放せ！！」

「ばーか、誰が放すかよ！化け物だらけになっちまった世界で生き残るには女がいねーとなぁ・・・ひゃわはははは！！」

「・・・壊れてるのかおまえ」

「壊れてるかって？当たり前だ！！俺の家族は目の前であいつらと同じになったんだよ！俺は・・・俺は・・・家族の頭をブチわってきたんだ！！親父も、オフクロも、バァちゃんも・・・弟も妹もなぁ！！まともでいられるわけねーだろ！！」

「孝・・・！」

そこまで言うと、男は少女の胸を鷲掴みし下卑だ声でまた喋り出した。
照井は頭にきていた。
イライラではなく、怒っていた。
この男の行動と行為に対して怒っていた・・・
だが、人質を取られている以上は手が出せないのも腹立たしかった。

「あー声も胸も最高だぁぁぁ・・・それに、なかなかの巨乳ちゃんだぜぇっ。おまえ、この子とヤってんだろ？毎日ヤリまくってんだろ？ヤってねーのかよ？バカじゃねーの？ひゃはははは！！」

ジリッと照井が足を動かした瞬間、男は敏感に反応した。

「動くな！そっちの兄ちゃんもバット捨てな！でなけりゃ、この子を殺す！それから・・・バイクもいただくぜ！」

もう一歩足を動かした。

すると、ナイフを照井の方へ向けた。

その隙に、懐へと飛び込んでいった・・・

乱心のO／照井の新たな決意（後書き）

キツイので良い所で切ります。

どこがいいんだぁ～！？

まぁ、いいか・・・

乱心のO／彼等と彼等の仲間達

照井は相手の隙を突き行動を起こした。
ナイフを握った男の右手を、自分の左手で払いのけた。
男の右胸が無防備に成った所で少女を引き寄せた。
背中を後押しし、少年の元へと軽く飛ばし結果的に男と1対1となった。

彼は自他共に認める格闘術のプロだった。
それは、この世界でも変わることはない。
彼が照井竜：仮面ライダーアクセルである限りは・・・
どんな凶器を目の前にしても冷静。
どんな攻撃に対しても確実に見切り返す。
街のチンピラ程度がかなうはずが無かった。

乱心した男は地面へと伏せられ手錠をされてしまった。

「強制猥褻、および殺人未遂、銃刀法、公務執行妨害の容疑で一時的に貴様を逮捕する！！」
「放せ、クソッ！！フザケんな！！」

そのままスタスタとバイクの方へ歩み寄り金を払い給油を開始する。

「お前の様な人間が生きてて良いわけがないんだ！早く喰われちまえよバァーカ！！俺は諦めないぞ！絶対復讐してやる」

どんな罵倒にも耳を貸さず、バイクへと給油を続ける照井と少年達を呪うような目つきで睨む男。

「まだ名前を聞いていなかったな。俺は照井竜・・・警察だ」
「藤美学園2年B組、小室孝です。」
「同じく宮本麗・・・」
「そうか・・・災難だったな宮本。」
「全くです！あんな奴に・・・」
「・・・麗？」

ゆっくりと男の方へ歩み寄り、落ちているバットへと手を伸ばした。
そのまま頭上へ振りかざす・・・

「アンタなんかに・・・アンタなんかに！！」

「止めろ麗！！」

急いで駆け出し、宮本を止める。

「・・・やめとけよ麗。」
「くっ・・・でも・・・！」
「そんな奴を相手にしている暇はない、《奴ら》が迫ってきている。
これ以上《奴ら》を相手するのはゴメンだ」
「僕らは随分と音を響かせすぎたようだ・・・」

ゆっくりとバイクへ乗り、キーを回す。
エンジンを吹かし、脱出の準備をする。

「これからお前達の行動を観察するために付いていく。」
「いま、なんて・・・？」
「俺に質問をするな。」
「「・・・・・・」」

完璧に一蹴し、二人の疑問を無視した。

「ま、まってくれ！置いてかないでくれ！！」

「断る。貴様の体の痛みも和らいだはずだ、一人でドコへでも逃げろ。」

冷たく突き放し、ガソリンスタンドを後にした。
この世界で照井竜が生き残るには、これくらい非情でなければ成らないかもしれない。
でなければ、彼は自滅の道を辿るほか無い。

「刑事さん・・・照井さん、アレで良かったんですか？」
「ああ、少し型から外れる位が調度良いのかも知れない。今の俺には・・・」
「・・・ふぅ～ん。」

そのままあてもなく走り続けた三人。
無人のコンビニへ寄り、パンとジュースを回収した。
使えそうな物を探し、回収した。
そのまま三人は野宿した。
安全そうな無人のホテル・・・
人気は全く無かったので、バイクのまま進入してホテル内へ停めた。
自動ドアへ鍵を掛け他の誰も入れないようにした。
これは照井の案だった・・・
エレベーターを呼び、最高階を目指す。
スイートルームと言う奴だ。
そこなら見晴らしも良く、何かしらの情報は手にはいるはずだ。
チンッ！とエレベーターが到着し開くと《奴ら》がワラワラと出てきた。

「下がっていろ。」

手持ちのグロックで頭を撃ち、倒していく・・・
球が切れ、即リロード。

「凄い・・・ホントに警察かよ・・・」
「お父さんはあんな銃持ってなかった・・・違う、あんな銃は日本じゃ支給されてるかどうかも・・・」

「先行する、お前達は待っていろ！」

エレベータへ乗り、一番上のパネルを押した。
照井には銃声以外は聞こえていなかった。
それ以外は敵に集中していて気に掛ける暇がなかったのだ。
そして、最上階にも敵が居る可能性は捨てきれなかったので照井は銃を構えたまま壁に張り付き深呼吸した。
チン！と先程と同じ音と共にドアが開いた。
ホテルマンの格好をした《奴ら》が並んでこちらへ振り向き、寄ってきた。

照井は駆け出し、1メートルほど間隔を取り射撃した。
額を貫通した弾丸は脳内を通り過ぎ、飛び出して壁へ突き刺さり止まる。
４発の弾で《奴ら》は完全沈黙。
それでも疑心を捨てずにゆっくりと再奥の部屋を目指した。

鍵を挿し、回す。
カチャっと鍵が開き、ドアノブへ手を掛ける。
ゆっくりと、慎重にドアノブを回し一度止まる。

敵がいれば、押し開けてくるはず・・・
予期した衝撃は訪れなかった・・・
それからドアを開き中を確認。
安全を確認し終わり、エレベーターへ戻る。
下の階にも《奴ら》が居るかも知れないのは明白。

（ここの階段には強度のバリケードを張るべきだろうか・・・？）

エレベータへ乗り、１階を押しすぐさまエレベーターを降りた。
無人エレベーターは勝手に下へ向かう。
照井はそれをバックに、部屋へ戻り高級机やイスなど使える物を階段の前に積み重ねていく・・・
エレベーターが到着し、二人が警戒しながら照井の方へ進んでいく。
警戒するのも無理はなかった・・・
壁や床には血痕と脳の様なナニカがブチ撒けられている。
常人なら見ただけで気持ち悪くなること間違いなしだ・・・
案の定、二人は目を反らしながら照井のバリケード作りを手伝い始めた。
照井は一度も「手伝え」とも「キツい」とも口にはしていなかった。
二人が独断で行動したのだ。
それに照井は少し驚いた。
それからクスリと笑い、さっさと仕事を終わらせ部屋へと戻った。

時刻は１１：２３・・・
照井は二人へ眠るように言い、見張ることにした。
なにが起きてもオカシくはない世界、状況。
ドアの正面にソファーを置き、銃を手の届く範囲へ留めてビートルフォンを開いた。
メニューから電話帳を開き、は行へ・・・

『左翔太郎』と言う名前で決定。
『左翔太郎』へと電話を掛けることにした。

『Ｐｒｒ．．．ｐｒｒ．．．ｐｒｒ，，，お客様のお掛けに成った番号は現在使われていないか、電波の届かない所にあり～・・・』

数度のコールの後、業務的機械音が遮ってきた。
当然と言えば当然である。
『左翔太郎』も死人からの電話に出るかどうかも怪しい所である。
それから、彼の反応を想像し照井はフッと笑ってしまった・・・

＊

「ん、電話か・・・？って、照井からっ・・・！？」
「どうしたの、翔太郎君？」
「どうしたんだい、翔太郎？」
「ふぃ、フィリップ、亜紀子！！照井から電話が・・・あぁ～・・・・」
「死んだ照井竜からの電話・・・ゾクゾクするねぇ～」
「しょ、翔太郎君！フィリップ君もぉ～・・・！！」

バタンと驚愕し卒倒する左翔太郎と、『死者からの電話』に興味を示し検索を始めるフィリップ。
仕方がないので亜紀子が翔太郎の代わりに電話に出る。

「はい、鳴海探偵事務所所長：鳴海亜紀子です。竜君元気？」

＊

と、言ったところだろうか・・・？
まさに彼等らしい・・・

だが、それも叶わなかった。
だが照井は諦めず、左へメールを送信することにした。

『誰かの質が悪いイタズラと思うかも知れないが・・・
この俺、照井竜は別次元で生きているから心配するな。
だが、そっちへ帰れるか分からない。
だから、刃野刑事と真倉刑事には別件捜査へまわったと説明してくれ・・・
俺は俺の出来る限りを尽くしてみる。
お前達も風都を頼んだぞ。
親愛なる仮面ライダーへ送る。』

（・・・こんな物か？）

ポチっと送信ボタンを押し、送信を終える。
どうやら送信は出来たようだ・・・
軽い奇跡である。

ー翌日：お昼過ぎー
そのまま、起きては居たが二人は疲労で寝込んで中々起きなかったためお昼を廻っていた。
取り溜のパンをカジり、照井は一人でエレベーターへ乗った。
理由は昨日と同じで、階段で下の階へ降りてきた《奴ら》を倒すためだった。
だが、予想に反して《奴ら》は皆無だった。

それと、ケータイには新着メールが一通。

『どう言う訳か分かんねぇ～が、電話が通じねぇ～しお前のメモリ一式無くなってるし心配したぜ？
お前が本物の照井かは分かんないが、俺はお前を信じる。
相棒や亜紀子が悲しんでるから早く帰ってこい！！
この街の悪党共は俺達だけじゃ面倒見切れないぜ？
それに、井坂との決着も付いてないしな・・・』

ケータイを閉じ、エレベーターを無人で最上階まで上げる。
バイクの向きを反転させ、入り口へ直進できるように準備し、ドアの鍵を外す。
調度良いタイミングで二人を乗せたエレベーターが降りてきた。

「あの、刑事さん・・・アナタはこれからどうするんです？」
「・・・そうだな、この世界を救う。」
「ハハ・・・それは頼もしいですね。」
「そうか・・・行くぞ？」
「「はい。」」

コクリと頷き、バイクへ跨る。
ゆっくり発進し、ホテルを抜けた。
今日も快晴の空の下、面倒な一日になりそうだ・・・
と、照井は予期していた。

しばらく彼等の先導で進み、路地の曲がり角で一度止まり、町の様子を伺った。
人々が武器を持ち、《奴ら》を襲っている。
銃や刀、蕎麦切り包丁やゴルフ用のドライバー・・・
武器は様々だが確実に反撃に出ている。

町中から煙が立ち上っている。

「戦争より酷いかも・・・」
「待っていても仕方がない、行こう！」
「えぇ・・・？」

急発進し、その場から逃げようとすると発砲されてしまった・・・
たまたまショットガンの弾は当たらなかったが、ほぼ紙一重で交わせた状況だった・・・

「どうして！？私たちは《奴ら》じゃないのに！！」
「頭に血が上ってみんなおかしくなってる。僕らと同じさ」
「あたしたちと同じ・・・」
「違う！！お前達はこんな状況の中で家族の心配をしたんだ。少なくともコイツ等よりは価値がある・・・護るに値する！」
「刑事さん・・・」
「そうね・・・あたし達は少なくともアイツ等よりはマシよ。」

直進していたのに急に曲がり、桜並木道で停車した。

「どうした？」
「そうよ、大橋はまっすぐじゃない！」
「大橋の方見てみろよ」

そういわれ、竜と麗は床主大橋と表記された橋の方をみる。
一方的に遮断され、渡川出来なくされている。
無闇に突っ込めば消防車の高水圧で川まで弾き落とされてしまう。
アクセルの装甲は理論上では戦車の砲撃にも耐えられる。
だが、彼等の前で変身するべきだろうか悩み、照井は挫折した。

「あれじゃ、いつ渡れるか・・・」
「そう、分からない！！だからこのまま城の脇を抜けて御別橋に向かおう。静香先生達の進んだ道はあっちに繋がってるし、渋滞してるのは同じだ。橋を渡る前に合流出来るはずだ！！」
「紫藤が一緒だったら・・・？」
「これがあるんだぜ？」

そういい、小室は自分のベルトに突っ込んだ銃を見せる。

「そんな物騒なことは俺がさせない。だが・・・この世界は悲惨なことになっているな。日が落ち始めている、時間が惜しいな。」
「とりあえず、先へ進みましょう。」

そういい、別の道から渡川する方法を探すため彼等の仲間と合流することにした。
そして、その友人ともすぐに合流できた。

「無事なようでなによりだ、小室君。ところでコチラの方は？」
「はい、俺達を助けてくれた刑事さんです。こっちが自分の先輩の・・・」
「藤美学園３年Ａ組、毒島冴子です。彼等の援助に感謝します。」

礼儀正しく頭を下げ、感謝の意を示す。

「俺は照井竜。今はフリーの元警察官だ。」

合流した彼等は、どうやら校医の知人の家へ向かう途中だったらしい。
「是非一緒に！」と言う言葉に甘え照井は同行することにした。
不眠不休で動き続けた照井にも限界が来ていた・・・

乱心のO／彼等と彼等の仲間達（後書き）

次回から前書きをWの始まり風に書いてみます。

今回の依頼は～風に・・・

以上。

救出のA／照井竜の休息

鞠川校医の友人宅の目の前に来た一行。
中には数体の《奴ら》が確認できた。
彼はこの世界で何度目だろうか、《奴ら》を退治するのは・・・

スチャッとグロックを引き抜き、リアサイトを覗きトリガーを引く。
タタタンッ！と弾を射出する銃。
冷静に撃ち抜く照井。

それに続く小室、毒島、宮本、平野・・・
一人は叩き、一人は打ち込み、一人は突き、一人は撃つ。

見事な連携で入り口付近を確保する。
休む暇もなく第二波が押し寄せてくる。
室内から出てくる《奴ら》を倒し、室内の安全を確保しようと小室が屋内へと入っていった。
それを追う様に照井も室内へと上がった。

周りを確認し残党勢力の消滅を目指す。

「ココに《奴ら》はもう居ないみたいですね、俺は上を見てきます。」
「待て。」
「大丈夫ですよ、出て来たらコイツで頭を潰しますから。」

チラチラとデコボコの金属バットを見せ、リビングを出る。
チッと舌打ちし、照井も後を追った。

階段を上り、慎重に一歩一歩進む。
いまだに敵の気配が悟れない。
普通の人間やドーパント相手なら殺気や敵意を感じる照井も屍相手ではどうにも出来ない様だった・・・

カタンッと物音がした。
背後から、キィ～ッと嫌な音がした。
扉が開き、一気に大勢の《奴ら》が押し寄せてきた。

「照井さんコッチは安全です・・・なんて量の《奴ら》だっ！！」
「チィ・・・！」

大声を上げたせいで《奴ら》の注目を浴びた小室。
《奴ら》は一歩一歩小室の方へ近づいて行く。
だが、それを邪魔する様に照井は発砲した。
《奴ら》の額へと銃口を向け、次々と射殺。
全ての沈黙を確認し、小室へ近づく。
そして、無言のまま小室の頬を殴った。
一発だが、５０％以上の力で殴った。
結果、小室は床へと這い蹲る結果と成ってしまった。
そのまま照井は荒々しく怒鳴りつけた。

「待てと言っただろう！？貴様は死にたかったのか！！」
「・・・すいません、でした。」

ビックリした様な表情は一瞬で曇り、照井から目を逸らしずっと床を見つめている。
そんな小室へと照井は続ける。

「この世界で生き残りたいのなら、無闇に一人で前進しない事だ。

こんな世界で長生きしたいのなら、仲間と行動するべきだ。」
「・・・はい。」
「俺達は一人じゃない。さぁ、早く後片付けをしようか？」
スッと手を差し出す。
最初は驚きの表情だった小室だったが差し出された手を掴み、立ち上がった。

「はい、照井さん。」

どこと無くスッキリした表情でハニカむ。
照井は《奴ら》へと近づき手近にあったブルーシートを掛ける。
軽く合掌し、一回から探し出してきた雑巾で血痕の掃除を始めた。
その姿を見て小室も真似をした。

「あの、やっぱり《奴ら》も殺人事件の捜査みたいに扱うんですか？」
「ん、あぁ・・・一応《奴ら》も人の子であり、人の親だったのかも知れないからな。せめて、葬式は挙げられない分は出来る範囲で弔ってやりたいだけだ。」
「・・・そうです、よね・・・」

少し俯き、やがて顔を上げて小室もビニールシートへと合掌した。

なんとか後片付けを済ませたのは、もう日が沈んだ後のことだった・・・
女子陣は入浴、小室と平野は見張り番。
照井は不眠不休の疲れから限界が来ていた。

だから、ベットで寝ていた。
仰向けのまま、まったくピクリとも動かない。
本当に生きているのか不安に成るくらい不動・・・

「刑事さん、、まったく動かないね・・・」
「そうだな・・・」
「あの人は確か、グロックを持ってたね・・・折角だし少し見せてもらおうかな・・・」
「止めとけって平野。それよりも、あのロッカーの中を確認してみようぜ？」
「そうだね、もしかしたら使える物が有るかも・・・」
小室たちは壁に取付けられていたロッカーへと目を向けた。

「んっ・・・ココは・・・？」
ぼんやりとしたまま、その身を起こした。
まだ思考回路が追い付いていない・・・
ココはいったい・・・？
俺は確か、小室たちと一緒に居たはずだが・・・
「よう照井、探したぜ？」
「左・・・？」

「なんだその疑問系は？」

そう言いうとゆっくり照井の方へと歩み寄ってゆく。
いつも通りのＷＩＮＤ　ＳＣＡＬＥと表記されたソフト帽、シャツ、ネクタイ、ベスト、ズボン・・・
彼は服装からも解かる様に、ハードボイルドを気取っているようだ。
だが中身はどう頑張っても煮え切る事の無い、ハーフボイルドな私立探偵。
そして、ブランドからも解かる様に風都と言う街を心から愛している風都の番人『仮面ライダーＷ』の左側。
だがどうして俺は左と一緒に居るのだろうか・・・？

「どうしたんだ照井？まるで幽霊を見るような目だな。」
「なぜお前がココに・・・？」
「風都公園で刑事がサボってるって連絡が入ったからお前を連れに来たんだよ。」
「風都・・・公園？」
「どうしたんだ照井？お前らしくねぇ～な・・・」
「俺はどうしてココに居るんだ・・・？」
「あぁ～っ、もう！お前が覚えてないのかよ！！」
「あぁ、すまない。」

いつもと違う照井の様子に左もいつもの調子が崩されてしまう。
取り敢えず、鳴海探偵事務所へ向かうことにした。

「照井竜の記憶が混乱している？・・・実に興味深い、すぐ検索を始めよう。」
「キーワードは、“照井竜”“風都公園”“記憶”」
「駄目だ、まったく絞りきれないよ翔太郎。」

「やっぱり駄目か。」
「まぁ～まぁ～コーヒーでも飲めば竜君も何か思い出すよきっと、はい竜君」
そう言い、事務所の所長：鳴海亜樹子がコーヒーを手渡した。
「すまない、所長。」
コーヒーを受け取り一口すする。
いつもの味、いつもの匂い、そしていつもの場所。
だが何かが違う。
「あっ、翔太郎。」
「どうした、相棒？」
「もしかするとドーパントの仕業かも知れない」
「ドーパントッ！？」「ドーパントォ～？」
二人には同じ疑問符が浮かんでいた。
だが、照井は放心状態で別の事を考えていた。
小室達は無事だろうか・・・？
なぜ俺は、風都に帰って来れたのだろうか・・・？
「よし、検索できた。これは、メモリー・ドーパントの仕業だね。」
「メモリー・ドーパント？」
「あぁ、メモリー・ドーパント。文字通り、記憶を操るドーパントだ。照井はそのドーパントと戦ったんじゃないかな？」
「その能力のダメージで一時的に記憶を消されてるのか？」
「恐らくは・・・逃げる際に記憶を消して邪魔されるのを避けたのかも知れない。」
「じゃ、じゃぁそのドーパントを倒せば竜君は元に戻るの？」

「絶対とは言えないけどね。」
「っしゃ！そうと決まれば聞き込みだ！！」
張り切って事務所を出て行く翔太郎を見てフィリップはニヤリと笑った。

「どうしたんだ、フィリップ？」
「珍しく翔太郎が怒ってたからね、つい面白くて。」
「左が、怒っていた？」
「うん、あんなに怒ってる翔太郎は久々だ。まぁ、僕も怒ってない訳じゃない」
「だが、アイツに迷惑を掛けるのも心配されるのも面倒だな。自分で蹴りを付ける事にしよう。」
そう言い、照井も事務所を後にした。

愛機に跨り、エンジンを吹かす。
ゆっくり発進し、街中を回る事にした。
敵の手掛かりは皆無。
聞き込みは照井の不専売特許。
なら普通に探し回るのが無難だろう。
照井らしくないが、それ以外に方法は無い。

どれくらいをバイクで走り続けただろうか・・・？
一時間、二時間ではない。
確実に四時間を回り続けている。

そんな中何者かに襲撃された。
道路から火花が散った。
上から何かが降り注がれた。
何とかソレを交わし、空を見上げた。

高層ビルの上から此方を見下ろす影。
真っ白なドーパント。
彼には見覚えがある影だった。

「ウェザー・ドーパント・・・？井坂、深紅朗ッ！！」
≪ＡＣＥＬＬ！！≫

スイッチを押し、ガイアウィスパーを確認する。

「変・・・身っ！」
≪ＡＣＥＬＬ！！≫

ベルトへ装填すると再びメモリ名が呼ばれ、バイクのエンジン音が轟いた。
変身し、井坂が見下ろす高層ビルの屋上までバイク形態で駆け上った。

「ココで引導を渡してやる、井坂。」

エンジンブレードを右手に持ち、両膝を軽く落とす。
刃先を上に向け、峰を左手で持つ。
左足を前に出し何時もの構えで睨み付ける。

「行くぞ！」

救出のＡ／照井竜の休息（後書き）

です。

取り敢えず、ココまでで勘弁してください（＾＾；）

救出のＡ／この街を救うのは誰だ？

「ようやく姿を現したか、井坂。俺は二度も負けはしない」
「んっふっふ、確かに殺したと思ったのですが失敗でしたか。まあ良い、何度でも相手をしてあげましょう。」
「ふざけるな」
≪ＥＮＧＩＮＥ！！≫

瞬時にエンジンブレードへとメモリを装填し、ビートルフォンを飛ばした。
左翔太郎、仮面ライダーＷの力を借りる為に。
昔の照井なら一人で戦おうとしたが、変わったのだ。
人が傷付くのは嫌うのに、自分が傷付くのは御構い無しで突っ込む。
他人の心配を無視し、一人で振り切る照井の間違いを正してくれた左。
それを感謝していた。
照井は、もう一人ではない。
頼れる仲間達のお陰である。
だからこそ、ココで井坂を食止めライダーツインマキシマムで因縁に決着を付けてやろうと思っていた。

「ふんっ、ハァ～ッ！！」

エンジンブレードを振り、ウェザー・ドーパントへの攻撃を繰り出し続けるアクセル。
だが、全て紙一重で交わし当たらない。
それどころか、カウンターを的確な位置に打ち込んで来る。
仮面ライダーアクセルは押されている。
二度目の死を覚悟しなければ成らないほどの危機である。

≪ＣＹＣＬＯＮＥ！！≫
≪ＪＯＫＥＲ！！≫

「「変身！！」」

≪ＣＹＣＬＯＮＥ×ＪＯＫＥＲ　ＥＸＴＲＥＭＥ！！≫

「悪いな照井、一撃で蹴りを付けさせて貰うぜ？」
「天候攻撃は厄介だし、逃げられるのも面倒だからね。」

一心拍おいて、Ｗは二人同時に叫んだ。

「プリズムビッカー！！」
≪ＰＲＩＳＭ　ＣＹＣＬＯＮＥ　ＨＥＡＴ　ＬＵＮＡ　ＪＯＫＥＲ≫
≪ＥＮＧＩＮＥ！！≫

「「ビッカーファイナリュージョン！！」」
「はぁあああああああっ！！！！！」

プリズムビッカーに装填した４本のメモリ。
同時にマキシマムドライブが発動し七色の光線が放たれ・・・

ドガゥッ！！！

と言う強大な音がした・・・

ココは風都ではない。
ついでに言うならば、朝でも昼でもない闇。
夜である・・・
音の正体は銃声、狙撃銃のＡＲ－１０である。
そして、ソレを手にしていたのは小室孝の友人：平野コータだった。

「何があった！？」

寝起きで思考回路の追い付きが間に合っていない。
ただ、状況を確認する事が精一杯で平野が持っている実銃への対処
など後回しに成っていた。

「刑事さんナイスタイミング！小室が小さな女の子を助けに行った
んです、逃げる準備をして下さい。」
「・・・そうか。」

瞬時に何をすべきかを把握できた。
何の為のメモリで、何の為の力で、何の為の転生か。
照井竜は、迷う事無く一回へ降り玄関を飛び出した。
すぐさま懐（ふところ）からアクセルメモリを取り出し、スタートアップスイッ
チを押した。
≪ＡＣＣＥＬ！！≫
無言のままにパワースロットルを全快まで捻り上げた。
仮面ライダーアクセルへと変わった照井はバイクフォームへ、全速
力で家を飛び出し《奴ら》を蹴散らしながら小室の居る民家の前へ

と向かった。
家の前まで辿り着くと、体を横へ回転させながらライダーフォームへ戻った。
≪ＥＮＧＩＮＥ！！≫
「早くしろ、ココは俺が食止める。」
「あっ、アンタは一体何者なんだ！？」
「俺の事はどうでも良い、その子を連れて早く去れ！ふん、ハァ～ッ！！」
ホイールシールドでクイックターンしながらスパンッ、スパンッ、スパンっと《奴ら》の首を刎(は)ねて行く。
「何をしている、早く行け！」
「で、でもこの量の（奴ら》を避けて行くなんて無理ですよ！！」
「チィ・・・・ッ！不本意だが乗せてやるぅ！」
バイクフォームへ変わり、小室たちへ乗る様に言う。
最初は驚愕していた小室も、少女へ「周りを見るな」と言いまたがる。
「しっかり掴まって振り切られるなよ？」
それだけ言い残り、乱暴な発進をする。
極力《奴ら》に当たらない様に避(よ)けながら進む。

鞠川校医の友人宅で二人を下ろし、エンジンメモリをアクセルドライバーへ挿入し、マキシマムドライブを発動させた。
全身に炎を纏い、数百メートルに及ぶ《奴ら》へ突進した。
突撃された《奴ら》は五体が吹飛ぶか、炎に燃やされ消炭(けしずみ)と成って消えていった・・・

メモリを引き抜くと、頼り無い音と共に普段の革ジャン姿の照井へと戻ってしまった。
エンジンブレードを両手で引きずり、息を切らせながら愛機へと向かい合った。
エンジンブレードをディアブロッサへ収納し、鍵を取り付けた。

「ココが風都でなくても良い。今は・・・この街を泣かす奴は俺が倒す。」

強く拳を握り締め、独りでに呟いた。

―side girls―

≪ACCEL・・・≫

「・・・？」
「どうしたんです、毒島先輩？」
「あっ、あぁ～嫌、なんでもない。」
「何でも良いわ、さっさと準備してRPGの盗賊みたいに逃げるわよ！」

「たっ、高城さん！また出ましたよ、赤い仮面の男！！」

「なっ、また出たの！？」

「どうしたんだね？」

「気付いていたかしら、皆。私達と小室がマイクロバスで別れた時、大型バスが突っ込んで来た。その時、あたしはもう駄目だと思ったわ。でもね、赤い仮面に青く発光した目の男が助けてくれた。それも非常識な方法で」

「どんな風にだい？」

「バスを真っ二つに叩き斬って・・・お陰で小室達とは別れちゃったけど。ってか、宮本は目の前で見てたからあたしより詳しいんじゃないの！？」

「あぁ～なんて言うか、あたしあの時は興奮しててイマイチ覚えてないの。」

「そう、でもね。あたし達を助けてくれてるのは確かなの。どういう利益が有るかは知らないけど使える物は何でも使ってやろうじゃないの！！」

「そうだな。」

「で、デブチン。もう準備は出来てるの？」

「はい、小室たちは赤い男が助けてくれたみたいですね。」

「自衛隊か何かの特殊な訓練を受けた人間、と考えて一時保留と言う事で良いかね？」

「えぇ、それで良いわ」

「随分と適当な意見ね・・・」

「仕方ないじゃない、今はソレくらいしか出来ないんだから」

「それもそっか・・・」

なんとか意見をまとめ、車へと荷物を詰め込んでいく。

・
・　・
・

そして――――――

「みんな無事、居るみたいね。」
「んじゃ、行くとしようぜ！」
「橋の様子はどうだ？俺は人数的にもコイツに乗っていた方が良いと思うのだが」
「橋は・・・照井さんが寝てる合間に色々有りまして、渡れはします。」
「そうか。」
「でも、一人で行動するのは危険なんじゃ・・・」
「俺の事なら大丈夫だ。地図さえ有れば良いんだが・・・」
「それなら、家の中に有ったんで一応持ってきました。使ってください」
「あぁ、すまない。現在地と合流地点に印を付けてくれないか？」
「そうですね・・・ココを渡るつもりだから、一番近いのは・・・」
「あたしの家よ！」
「そうか、なら高城の家を最初に目指しましょう。」
「了解した。出来る限りは渡河した場所で会いたいな」
「上手く行けば大丈夫だと思います。」
「すまないな、色々と迷惑かけて」
「いや、それはコッチの台詞で・・・」
「時間が勿体無いわ、もう行きましょ！」

高城の一言で一斉にハンビーへ乗り込み始めた。
照井も愛機へ跨り、残党を蹴散らすハンビーを盾に進む。

そして、二手の分かれ道。
同時にバラバラの方向へと向かい走り出した・・・

救出のＡ／この街を救うのは誰だ？（後書き）

今回はここまでです。

なんか、目がショボショボすると思ったら眠たいだけでしたｗｗ

じゃ、次回までさようなら

奇襲のB／新たなる敵

照井は軽快な走りで御別橋を渡りきろうとしていた。無論、昨日の集団が残していった機材の残骸があった。それを難なく交わし、走り続けた。

（この辺はまだ安全そうだな・・・それにしても、まだ《奴ら》が現れないのは不自然だな・・・）

少し慎重にスピードを緩め走る。案の定、急に目の前へ見慣れぬ物体が飛び出してきた。いままでの《奴ら》とは違う・・・いや、違いすぎる。体の色は緑色、巨大な爪を持ち合わせている。そして何より見た目が、・・・爬虫類の様な肌をしている。サイズは人並みだが、異様だ・・・

照井はすぐさまハンドルを切り、停まった。そして、フルフェイス越しにソイツを睨みつけた。

ソイツは間髪入れずに照井へと飛びかかった。だが、照井は至って冷静にバイクから離れた。間一髪とまでは言わないがソイツの一撃を避けた。が、バイクのタンクには傷が付いてしまった。紅い塗装が剥げ、縦に一閃。素材の色が剥き出しとなってしまった・・・

「貴様が一体何者かは知らんが、俺に喧嘩を売ったのは間違いだったな。」

≪ＡＣＣＥＬ！！≫

「変・・・身！！」

≪ＡＣＣＥＬ！！≫

ブゥンッ！！とバイクのエンジン音の様なものが轟いた。

「さぁ、振り切るぜっ！？」

ソイツは先程同様に飛びかかってきた。動きは俊敏で、一撃はそれなりに強力なのだろう。だが、あくまでも今は仮面ライダーアクセルであり、照井竜ではない。例えどんな一撃であろうと負けることはないだろう。

「！？・・・ぐぅっ！」

予期した痛みを遥かに上回るダメージがアクセルのボディを切りつけた。まるで、強力なドーパントの一閃を受けたかのような痛みが胸に走った。エアロラングからは火花が散り、アクセルは一歩後退してしまった・・・

「まさか、この世界にもガイアメモリが・・・？」

すかさず追撃を試みるソイツを蹴り飛ばし、エンジンブレードを握った。

「例え動きが速かろうと、当たらなければ良いだけだ！！」

フンッ、ハァ～っと武器を振り切り、手足を切断する。それでも、ビクビクと動くソイツの頭部へエンジンブレードを突き立てた。

「絶望がお前のゴールだ。」

エンジンブレードを一振りし、血油を振り切りディアブロッサへと収納した。変身を解除しエンジンをかけた。

「一体何が起こったんだ、あんな化物が生まれるとは・・・メモリブレイク出来ない所か、《奴ら》同様に血肉で生成されていた。だが、小室達には黙っておくべきだろうか・・・」

（余計な心配を掛けないように黙っておくべきか、安全のために注意しておくべきか・・・何者かが意図的に作り出した生物兵器と捉えるべきなのだろうか・・・？どうなっているんだ、この世界はっ！！）

苛立ちを積もらせながら走り出した。目指すはハンビーが渡河する場所。ココからならすぐに着くであろう・・・決して油断をせず、安全運転で走り続けた。

「待たせたようだな。」

川原の上から声をかけた。すると、小室はすぐに振り返り笑みをこ

ぼした。

「照井さん！良かった、別れてから一時間以上経ったから心配しましたよ。」

「すまない。その様子だとソチラは皆無事のようだな。」

「はい！《奴ら》にはまだ遭遇してませんから」

「そうか、なら良いんだが・・・この先にはまだまだ民家が続くから気を引き締めた方が良さそうだな。」

照井は左手で右手首を掴み、手首を左右に振りゴキッと鳴らしグッと拳を握った。

「でも、上に《奴ら》は居なかったんですよね？」

「あっ、あぁ・・・今日はまだ一体も見てないと思う。」

「ならもう行きましょう。」

早速、一番近い高城の家を目指すことになった。

最初は見えなかった《奴ら》も徐々に数が増え始めていた。先へ進めば進むほど増えてくる。まるで、何かを取り囲むように・・・

「わっ！ここも！もういやっ、じゃあそこ左。左よ！」

急激に増えた《奴ら》から逃げる道を選び、左へ曲がったハンビーの後を追い照井。だが、先にはワイヤーが張られていた。そして・・・それに気付かず《奴ら》をお構いなしにハね除け直進する。そして、要約ワイヤーが張られた壁に気付き車体を横に向けたが血油に滑り停まらなかった。ハンドリングミスだろうか？直進し急ブレー

キ。車の上にいた宮本は振り落とされそうれてしまった。それから、すぐさま小室が飛び降り発砲を開始した。

「スライドを引いて、撃つ！」

イサカを構え発砲。反動で後ろへ下がり、弾道は上へそれてしまっていた・・・照井もすぐさまバイクを降りグロックを引き抜いた。

「大丈夫か、宮元、小室！！」

「俺は大丈夫ですなんですけど、麗が！」

「・・・そうか」

引金を絞(しぼ)り、弾をばら撒く。弾が切れ、高速リロード・・・毒島は木刀で《奴ら》を叩き、平野はＡＲ－１０を使いヘッドショットを決める。だが《奴ら》は音に反応し、益々増えてくる・・・圧倒的なまでな数に気圧(けお)される。遂には、弾が切れ武器を奪われ追い込まれてしまった。平野はハンヴィーの上にありすを誘導。ワイヤーの向こうへ飛ぶ様に言い聞かせる。

「ジークと一緒にワイヤーの向こうにジャンプだ！」

「でもみんなは？」

「みんな、すぐ行くから！」

「うそ」

「え？」

「パパも死んじゃう時にコータちゃんと同じ顔したもん！大丈夫っていったのに死んじゃったもん！！いやいやいやいや！ありす一人はいや！コータちゃんや孝お兄ちゃんやお姉ちゃんたちと一緒にいる！ずっとずっと一緒にいる！」

「チィ！こうなったら・・・」

懐からアクセルメモリをスタートアップスイッチを押した。

≪ＡＣＣＥＬ！！≫

一斉に視線を浴びながら、ベルトへメモリを装填しようとした。次の瞬間、背中への強烈な痛みが走り吹き飛ばされた。カラカラっとアクセルメモリは照井の手を離れ地面へ転がった。高い塀から飛び蹴りで照井を吹き飛ばしたソイツは、照井へ追撃をしようと歩み寄った所で平野が撃った一発の弾丸で視線をずらした。スキンヘッドの後頭部からは血が流れている。それでも怯む事無く、平野の方へゆっくり歩み寄り始めた。

「あっ、あぁ・・・」

驚愕し呆然とハンヴィーから顔を出したまま突っ立っていた。すると後ろから銃声と英語で喋る筋骨隆々とした男が駆けつけた、覆面部隊を連れて・・・

「Ｔｈｅ　ｈｅａｄ　ｔｕｒｎｓ　ｄｏｗｎ！！（頭を伏せるんだ！！）」

全員が不意な事で呆(ほう)けていると、今度は若い女性の声が響いた。

「みんなその場で伏せなさい！！」

瞬時に覆面部隊からも発砲が始まり、周囲を殲滅し始める。照井は、地面を這いながらメモリを掴んだ。

「グゥッ・・・一体、何が起きているんだ・・・」

痛みに耐えながら、ゆっくり地面に手を当て立ち上がった。謎の男が放ったグレネードランチャーを受けても怯むだけのソイツを倒すために。着ていたトレンチコートの上半身部分はグレネードの爆風で吹き飛び、腰のベルト一本で繋がった状態。だが、問題はそこではなかった。両手の手袋はバラバラに千切れ両手には8本の巨大な爪。鋭利な輝きを見せ、体の皮膚は装甲と言った方が正しいだろうか・・・？肌の色は鈍い銀色とも見える。

「変・・・身・・・グフッ！！」

痛みで咳き込みながらの変身と成ってしまった。だが、ちゃんと変身には成功しエンジンブレードを握った。勢い良く振りかぶり、ソイツへと縦一文字で振り切った。だが、火花は散ったがアクセルの右手には痺れだけが残され切り裂いた感触は無かった。それは、硬いドーパントへ生半可な力で振りかざした様な・・・押し負けた痛み。

「コイツは一体・・・」

そこで思い出した一つのメモリ。Tと表示された青いアレを・・・自称神がこの世界へ移した時に有ったアクセル専用の強化メモリ。

≪ＴＲＩＡＬ！！≫

トライアルメモリをマキシマムモードからメモリモードへ変え、アクセルメモリと交換した。そしてパワースロットルを廻すと、トランスシグナルからピッピッピッとレースが始まる様な3カウント。仮面ライダーアクセルは“仮面ライダーアクセルトライアル”へと

進化を遂げた。照井自身も自分の姿へ驚き、両手を見つめた。

「これが、新しいアクセル・・・よしっ！全て振り切るぜ！」

ダッと一歩を踏み出した。本人も予想出来なかった程の超加速。体を吹き飛ばされそうな衝撃、生まれ変わったかの様な体の軽さ。アクセルが重装だった分攻撃と防御に優れていた。白兵戦に適した姿だと言えただろう。だが、トライアルは軽装。これは攻撃を喰らう隙を省く為の姿だろう。照井は瞬時に能力を把握し、トライアルメモリをマキシマムモードへ変形させ、マキシマムスイッチを押しポンと上へ放り投げた。加速スピードが上がっていく。初弾の蹴りから徐々にスピードは上がり続けていく・・・９７発目の蹴りが巨漢を襲い、最後の一発は回し蹴りでしめた。振り返り様にトライアルメモリを掴んだ。瞬間、マキシマムスイッチを押し、マキシマムカウンターを止めた。

≪ＴＲＩＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！！≫

「９，８秒、それがお前の絶望までのタイムだ！」

巨漢の体表面には蒼文字でＴと表示されていた。そのままドンッと小爆発し、体はバラバラに四散した。そして、照井は変身を解除し地面へ両手を着きゼェゼェと荒い息を吐き出した。

「コレが、トライアルメモリ・・・挑戦の記憶。」

額には汗が滲ませながら周りを見渡した。既に≪奴ら≫も一掃され周囲の安全は確保されていた。謎の外人は、照井へ手を差し伸べた。

「Ｉｓ　ｉｔ　ｓａｆｅ　ｏｒ，　ａｎｄ　ａ　ｓｕｐｅｒｍａｎ？（大丈夫かい、スーパーマン？）」

「Ｄｏ　ｎｏｔ　ｑｕｅｓｔｉｏｎ　ｍｅ！（俺に質問するな！）」

質問を英語で一蹴し、手を掴んだ。グッと引っ張り上げられてしまった。なんと言う強力（ごうりき）だろうか・・・照井の読みだと１８０ｃｍ以上はあるようだ。

「Ｍｙ　ｎａｍｅ　ｉｓ　Ｃｈｒｉｓ　ｒｅｄｆｉｅｌｄ，Ｉｔ　ｉｓ　ｇｏｏｄ．（俺の名前はクリス・レッドフィールド、宜しく。）」

クリスと名乗った男は照井へ握手を求めた。照井はそれを掴み返した。

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｆｏｒ．．．Ｍｙ　ｎａｍｅ　ｉｓ　Ｒｙｕ　Ｔｅｒｕｉ，ａｎｄ　ｉｔ　ａｓｋｓ　ｗｅｌｌ．（あぁ、ありがとう。俺の名前は照井竜だ、こちらこそ宜しく頼む）」

それから高城の家へと案内された・・・

奇襲のB／新たなる敵（後書き）

書き終わりました。

なんとか終わった。

ってかコレ、なんて公開処刑？

もう下書きとか丸見えになっちゃって・・・

終わったと言うよりオワタに近いな・・・

雑な小説に始まり、文才の無さが丸見えになった挙句に、下書きまで丸見え。

〆は誤字脱字・・・

それでも読んでくれる人には感謝です

奇襲のB／次のレベルへ

あれから二日が経とうとしていた・・・

男の名はクリス・レッドフィールド。アメリカのラクーン市警察の元警察官。世界規模で起きているパンデミックの中心に因縁の敵が滞在しているという噂と、３年前に同じ事件を担当した”失ったはずのパートナー”の目撃情報、そして旧友である高城の母に増援として呼ばれたのだという。元Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．と呼ばれる特殊班の一人だという。現在はＢｉｏｔｅｒｒｏｒｉｓｍ－Ｓｅｃｕｒｉｔｙ－Ａｓｓｅｓｓｍｅｎｔ－Ａｌｌｉａｎｃｅ（通称：ＢＳＡＡ）と言う組織に所属しているという。

そして、今回の任務のパートナーだというシェバ・アローマ。歳は２６と比較的に照井とは歳が近く、だが数々の修羅場を越えてきただけあり、その目には普通の女性とは思えない強い意志が宿っていた。

照井は立ち上がり、テラスから外を眺めた。《奴ら》が徘徊している、そして、《奴ら》と少々容姿が違う奴らが歩き回っている。クリスが言っていたアンブレラ社が開発したｔ－ウィルス投与で生まれた《ゾンビ》だろう。コレには視覚や嗅覚なども存在し、出血したりすると優先的に的にされるらしい。ワクチンなども存在するらしいが日本にはないらしい。そして、クリス達が乗ってきた船に感染者が既乗していたことが原因だという。

不意に家の裏側が騒がしい事に気付いた照井は見回りを兼ねて様子を見に行くことにした。二階から軽々と飛び降り、着地。床に手を

着き、ゆっくりと立ち上がり小走りで裏庭へと急いだ。

「ざけんじゃねぇ！」
「さっさと渡せよ！」
「イヤだ！」

人の話し声から察すると敵の侵入を許したわけではないようだ。だが、荒げた声を聞くと穏やかな様子でもないことを明らかだと照井は現場を目の当たりにした。

「なぁ君、こういうご時世だ。それだけの武器を独り占めにしちゃいけない。我々に渡して・・・」
「ダメです！これは借り物なんだから。それに・・・ここで俺以上にうまく使える奴なんていません」
「貴様ぁ、吉岡さんが優しくいってくださると思って勝手なことを！」
「何をしている！？」

平野の胸倉を掴み、恐喝している男へとゆっくり歩み寄った。

「なんだお前！」
「俺に質問するなぁ！！」

一人の男が顔を近づけて威嚇してくるのを敵対行為と見なし、すぐに腕を掴み捻り挙げ床へと組伏せた。痛みに悶絶する男を蹴り飛ばし平野の胸倉を掴んでいた男へ近づく。

「こんな未成年へ恐喝とは良い度胸をしているな？その根性を叩き治してやる。」

「図に乗るなぁ！！」

一斉に周りを囲まれてしまった。敵は7人と言ったところだろう。一気に二人に腕を捕まれ一人が突進してくる。腕に力を入れ体を持ち上げ難無く交わし、落ちる勢いを利用し二人を振りきった。まずは右の男の腹部を肘で強打。前かがみに怯んだところをアッパーで吹き飛ばした。後ろから掴み掛かってくる敵へ目もくれずに踵で牽制。止まった隙に脚払いで転倒させる。倒れた敵の胸倉を持ち上げ左手を掴んだ敵へと投げつける。三人は撃破した。そして体格が良い男が前へ出てきた。空手でもしているのだろうか？スッと拳を前に構えた。素人ではないだろう・・・正拳突きを連続で放ってくる。風を切るギュッと言う音が当たると痛そうだと告げている。何発目かの突きが来た所で手首を掴み引き寄せた。そして、タイミング良く膝で腹部を蹴り喉へ抜き手を決めた。男は喉を押さえてウズクマった。

「よ、吉岡さん！！」

「チィっ！！」

吉岡と呼ばれる男は腰に携えた日本刀を引き抜き照井の正面へ構えた。次の瞬間には踏み込み、刀を大きく振り上げ切りかかってきた。ギリギリにタイミングでそれを交わすと追撃が来た。横なぎの一閃。後ろへ大きく跳躍し交わしたが、お気に入りの紅い革ジャンが少し切れてしまった。さらに一撃、突きを放ってきた。だが、今度は交わさずに剣先を手の甲で難無く反らし腹部を蹴り飛ばした。だが後ろへ少し後退し怯んだだけで倒れる事無く正面へ斬り掛かってきた。頭上で両手を交差させ相手の手首から一閃を受け止め、すぐさま腹部へ肘を入れ落とした刀を蹴り飛ばした。そして追撃、高速で腹へ突きを放った。ババババッと八発程打ち込むと、要約倒れた。

残りの男達は竦み上がり、ボーッと突っ立っていた。すると不意に怒声が響きわたった。

「なにを騒いでいる！」

「か、会長！」

「こ、このガキが銃をオモチャと間違えてやがるんで注意しようとしたらこの男が・・・」

「勝手に事実を改変するな、先に手を出したのはおまえ等だろう！？」

「うぅ・・・」

「君達、名を聞こう！私は高城壮一郎、憂国一心会会長だ。」

「ひ、ひ、ひ、平野コータ。藤美学園２年Ｂ組、出席番号３２番です！！」

「照井竜、元警視だ。」

「声に覇気があるな平野君！ここまでたどりつくまでにさぞ苦労したことだろう」

「あなた、この子は・・・」

「所属するクラスで知れた。どうあっても銃は渡さぬつもりか」

「ダメです！イヤです！銃が無くなったら、俺は・・・俺はまた元通りになる！元通りにされてしまう！自分に出来ることがようやく見つかったと思ったのに！！」

「出来ることとは何だ？」

「あなたのお嬢さんを守ることです！」

「むぅ？」

後ろから小室が歩み寄ってきていた。いや、共に生き延びたメンバー全員が集まってきていた。

「こ、小室ぉ・・・」
「小室・・・なるほど君の名前には覚えがある。沙耶とは長いつきあいだな。」
「はい、ですが・・・この地獄の始まりから沙耶・・・お嬢さんを守り続けて来たのは平野です。」
「彼の勇気は自分も目にしております、高城会長。」
「アタシもよ、パパ！！」

全員の登場で何とか場は収まった。そして、吉岡達は一斉に照井と平野へ謝罪した・・・

同日ー夕方ー

紫藤と言う男と宮本が一悶着有ったようだが何とか収まったあとの事だ。急に電子機器が一斉ショートし使い物にならなくなってしまった。ケータイも車もパソコンも銃のドットサイトさえも・・・だが、照井の愛機ディアブロッサだけはちゃんとエンジンが掛かった。こう言う時の為に改造をしておいたのが吉と出たのだろう。そして、アクセルメモリも起動した。だが、エンジンメモリはギジメモリだったからか起動しなかった。万が一に為に胸ポケットへなおした。

高城の読みではＥＭＰ攻撃のせいだという。そして、一斉に《奴ら》と《ゾンビ》が門前まで迫ってきた。人型だけではない。犬や爬虫類に巨人型・・・見た目のグロテスクな奴もいる・・・こう言う時こそ本職の出番だろう。

「Ｒｅｄｆｉｅｌｄ！！」

照井が呼ぶと、ハンドガン、ベレッタＭ９３Ｒを片手に持ち、背中にはショットガン：イサカＭ３７とスナイパーライフル：ドラグノフを担ぎ現れた。

「Ｔｈｅ　ｍａｔｅ　ｇｏｉｎｇ？（行くぜ、相棒？）」
「Ｔｈｅ　ｂａｃｋ　ｉｓ　ｌｅｆｔ．（後ろは任せて）」

門を閉じようと遠隔リモコンを押したがＥＭＰのせいで動かず、手動で閉じたが一体だけ入ってきてしまった。それを撃とうとクリスが構えた瞬間に銃声が響いた。

「ポケットの中には・・・・・・がひ・と・つ♪」

「済まねぇ、兄ちゃん！俺が間違ってた！」

一人の男が再度謝罪すると、平野は邪悪な笑みと共にサムズアップで答えた。

一体は処理した物の敵の数は多すぎる。と、なにやら後方から赤いマスクを被った大男が近づいてきていた。巨大な斧を両手で引きずり、寄ってくる《奴ら》を押し倒し進んでくる。そして、門前まで来たら男達ごと抑えていた門を吹き飛ばした。

ゾロゾロと入ってくる敵。クリスとシェバは果敢にも赤頭巾へと挑んでいった。高速で走り回るゾンビ犬や鋭利な爪で人を刺す爬虫類モドキ、長い舌で人の脚を捕らえ食らう四足生物に人の頭を鷲掴みにして頭部破壊で殺すスキンヘッドの巨漢。

既に憂国一心会は壊滅寸前である。だが、会長の壮一郎とその妻の百合子は怯むことなく首を討ち斬り、そして撃ち倒していく・・・

「Ｃｈｒｉｓ　ａｎｄ　ｙｏｕ　ｍｕｓｔ　ｇｏ　ｗｉｔｈ　ｔｈｏｓｅ　ｃｈｉｌｄｒｅｎ．（クリスさん、貴方達はあの子達と共に行ってください）」

百合子は優しく未来を託すように告げた。それに頷きながらクリスは赤頭巾に悪戦苦闘を続けていた。

「俺も加勢するとしよう・・・」

照井はアクセルメモリを取り出した。そして、スタートアップスイッチを押しベルトへ装填。パワーグリップを全快へ・・・

「さぁ、振り切るぜっ！！小室、ここは俺が道を開く！その隙に正面突破するぞ！！」

「えっ、あっ・・・はいっ！！」

一度全員の顔を見て力強く返事を返し敵へと銃口を向ける。手元にエンジンブレードがないアクセルは白兵戦、近接格闘とホイールシールドを利用した敵の戦滅を始める。

「Ｒｅｄｆｉｅｌｄ！！」

クリスへ声をかけた瞬間に赤頭巾へと飛びかかり、アクセルの持つ全力で右腕を蹴り飛ばした。赤頭巾の腕は有り得ない方向へくの字に曲がり痛々しく見えるが、本人は全く痛みを感じていないのか平

気で殴り掛かってきた。その腕をサバき、腹部へ強烈な乱打を見舞う。

「はぁあああっ！！！」

赤頭巾は怯み、後ずさった。そして、アクセルは左手から落とした大きな斧を持ち上げパワースロットルを捻り挙げた。

≪ＡＣＣＥＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＤＲＩＶＥ！！≫

ホイールシールドの回転で最大まで加速したアクセルは遠心力を利用して大斧を投げ飛ばした。すると、赤頭巾の腹部を貫通した斧は勢いのまま赤頭巾を遠くへさらって行った。何体もの敵を巻き込みながら・・・

「正面は開けたぞ小室！！」

バギーで突撃する小室達。クリスは照井のディアブロッサに跨り、アクセルの元で止まった。変身を解除した照井はすぐにバイクの後ろへと乗った。

「済まないが照井君、家の娘や子供達を守ってやってくれ！」

「任せておけ、俺は仮面ライダー・・・仮面ライダーアクセルだ、覚えておけ！！」

「ふっ、実に素晴らしい青年だ。そうは思わんか、百合子？」

「えぇ、私たちの娘が・・・愛すべき若者達と共に！」

「もはや、後顧の憂い無し！！」

様々な障害物を避けながらクリスは前進する。その運転テクニックは照井も息を飲む程の物である。近づく敵を難無く交わす姿はプロその物と言っても過言ではない。それと、ディアブロッサのタンクに付いていた傷が消えていた。元通りの色艶。凝視しなければ解らないほどの修復である。そして、バギーと並び走る。

「小室、コレからどうするつもりだ？」

「そうですね・・・とりあえず音が響きますからある程度走ったら降りて分かれましょう。」

「そうか・・・」

「それで、この先の大型モールで合流しましょう。」

「仲間の振り分けは・・・？」

「俺がコイツで囮になります。」

「だが一人では危険だろう？俺も付いて行こう」

「いえ、照井さんはみんなを守ってください。俺は俺で何とかしてみます！」

「子供にそんな重役を任せきれるわけ・・・」

「でも、クリスさんやシェバさんと話せるのは照井さんだけですから。それに、そのバイクはお気に入りなんですよね？」

「あぁ・・・」

「コレは敵をおびき寄せる為の使い捨てにするつもりです。」

「だが、あの違うタイプの《奴ら》に襲われたらどうする？」

「それは・・・」

「アレの名称も特徴も解っていないだろう。そんな状況での戦闘は厳しいぞ」

「大丈夫です、なんとかしま・・・っ！！」

急ブレーキで止まった。その先には黒いロングコートに漆黒のサン

グラス。金髪をオールバックにした男が立っていた。その後ろにフードを被った奴と何体かの異形の姿。

「Ｗｅｓｋｅｒ！！」

クリスはそれだけを叫ぶとバイクを降り、ウェスカーと言う男の方へ銃口を向けた。ウェスカーは不適に笑いゆっくり力強く前へ出た。

「Ｉｔ　ｐｌａｙｓ　ｏｎｌｙ　ｆｏｒ　ｓｅｖｅｎ　ｍｉｎｕｔｅｓ．（７分間だけ遊んでやる。）」

少し前かがみのような感じがした。次の瞬間には残像が残るほどのスピードで猛接近し構えていたクリスの銃口を真下へと払い、掌底で胸部分を強打するとハリウッド映画さながらに吹き飛んでしまった。それでもすぐに体勢を立て直し発砲すると、ウェスカーは弾丸を交わしてしまった。まるでスローボールでも交わすかのように・・・小室達はそれに見とれていた。シェバはすぐさまナイフを持ちウェスカーへ斬り掛かったが手首を捻られ落としてしまった。それを蹴り上げ手に掴んだ。そして、拾い上げたナイフでシャバに止めを刺そうとした瞬間、クリスはハンドガンを連発させナイフを打ち落とし、さらにウェスカーへとヘッドショットしてしまった・・・

奇襲のB／次のレベルへ（後書き）

いやぁ～ウェスカーさん怖いわ

次回は更に頑張って貰います。

そして次章はＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉が良いなと思ってます。

それで飛行できるようにしたい。

照井さんに飛んで欲しい・・・

で、なのはＳｔＳへと転移で終わり予定。

だいぶネタバレしたな・・・

すいません、コレが紫炎の精一杯でしたごめんなさい。

これから何が悪かったのかゆっくり反省した後友人にアドバイスを貰ってきます。

それではみなさんさようなら

驚異のW／敗北のトライアル

ウェスカーの眉間へ的中したはずの弾丸・・・それは地面へカラカラッと転がった。ウェスカーの眉間には焦げ痕が一つ残っているだけだった。その傷跡も徐々に癒えていくのが一目で解った。銃弾のせいで後ろへ仰け反っていたウェスカーは苛立った様にクリスを睨み付けた。そして、シェバを投げ捨ててからクリスへ猛接近する。

「Ｄｏ　ｎｏｔ　ｄｏ　ｃｒａｆｔｙ　ｍｉｍｉｃｒｙ.（こざかしい真似をするな）」

ウェスカーが近付いて来る時に乱射したクリスの弾は全て避けられ当たらなかった。目視で弾丸を交わし、肉眼で捉えるのが困難なほどのスピードで走り抜ける男：アルバート・ウェスカー。そんな敵を目の前に照井が下した判断は簡単なものだった。

「小室、一度逃げろ。分が悪すぎる・・・」
「でも、どうするんです！？」
「そんな事は決まってるだろ、俺に質問をするな。」
≪ＡＣＣＥＬ！！≫
「変・・・身！！」
≪ＴＲＩＡＬ！！≫

アクセルメモリで変身した瞬間にトライアルメモリへと抜き変えスリーカウント。熱風が吹き荒れそうな赤いボディは、スピード感溢れる爽快な青へと変わった。

「たしか、この先には大型ショッピングモールがあると言っていたな？そこで落ち合おう。どれだけの時間が掛かっても構わん、俺は待ち続ける。」
「解りました！」
「本当は・・・こんな世界でお前達だけにするのは少々気が引けるが、コイツ等と対峙させるよりはマシだからな・・・行けっ！！」

バギーは急速旋回し、脇道を駆け登り姿が見えなくなり、これで問題１が解決した。だが、一番の問題点を目の前に余談は許されなかった。小室達が走り去った後を見守っていたアクセルの頭に衝撃が走った。ウェスカーのマグナムが当たったのだ。ツマラナそうに漆黒のサングラスをクイッと押し上げる。

「Ｃａｎ　ａｍｕｓｅ　ｍｅ．　（私を楽しませろ）」
「Ｔｈｅ　ｇａｍｅ　ｃｏｕｎｔ　ｕｎｔｉｌ　ｙｏｕｒ　ｄｅｓｐａｉｒｉｎｇ　ａｎｄ　Ｉ　ｃｏｕｎｔ！！（お前の絶望までのゲームカウント、俺が数えてやる！！）」
≪ＴＲＩＡＬ！！≫

マキシマムスイッチを押し、放り投げる。放たれるマグナムの弾をジグザグに走り抜け交わす。さらに加速を続けるトライアル。そして、マシンガンスパイクの初弾を蹴りだした。右足での回し蹴り。それを掴み、投げ飛ばされてしまった・・・再度走り始めたアクセル。バラバラに駆け回りウェスカーを撹乱しようとした次の瞬間。

「Ｈｅｒｅ　ｙｏｕ　ａｒｅ！（ソコかっ！）」

先程までとは比べ物にならないほどの速さでアクセルを捉えての掌底。重い一撃がトライアルの薄い装甲を強打した。軽々と７ｍ程飛ばされ地面を滑走したアクセルの目の前に放り投げたトライアル

メモリが落ちてきて、変身の強制解除をされてしまった。苦痛と屈辱の混じった熱い息を吐き出し痛みに喘いだ。

「くぅ、ぐあっ・・・ゲホッ！」

立ち上がろうと地面に手を着けた瞬間、全身へと鋭い電気信号のような物が走り抜けた。力を込めた瞬間に激痛が走る。筋肉痛にも似た感覚が照井を襲った。

「Ｄｏｅｓ　ｔｈｉｓ　ｄｅｔｅｒｉｏｒａｔｅｄ　ｚｏｍｂｉｉｔ　ｉｓ　ｗｈａｔ？　Ｂｏｔｈ　ｏｆ　ｍｉｓｓｉｎｇ　ｉｔ　ｉｓ　ｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｄｏｉｎｇ！（なんだ、この劣化したゾンビは？　この出来損ない共が！！）」

マグナムの銃声で《奴ら》の格好の餌食となったウェスカーは裏拳で《奴ら》の頭を砕いていく。

「Ｉ　ｗｉｌｌ　ｒｕｎ　ａｗａｙ！（逃げるぞ！）」

「Ｉｔ　ｏｖｅｒｌｏｏｋｓ　ｉｔ　ｔｈｉｓ　ｔｉｍｅ．（今回は見逃してやる）」

ウェスカーが右手を軽く挙げると、控えていた後ろの異形が動き出し《奴ら》を襲い始めた。それは仲間割れのような異様な光景な様にも思えた。だが、そんな雑念を許される状況では無いようだ。すでに周りには大量の《奴ら》で覆われている。そして照井はクリスの肩を借りてようやく動ける重傷。それに二人のダメージも楽なものではないはずだ・・・だが一つ、照井の頭には何かが引っかか

っていた。

「・・・・・・」

「Ｉｔ　ｓａｆｅ　ｏｒ　Ｒｙｕ？（大丈夫か、竜？）」

「Ｉｔ　ｉｓ　ｓｏ　ｏｒ　ａ　ｓｔｕｎ　ｇｒｅｎａｄｅ！！（そうか、スタングレネードだ！！）」

一時的ではあるが、凄まじい閃光での目潰しと轟音で聴力を潰す非殺傷爆弾：スタングレネード。これなら《奴ら》やゾンビ共にも有効かもしれない。そう思い至った照井はすぐにクリスへと説明した。瞬時に目を堅く瞑り、耳を強くふさぎ込んだ。指を放し目を開けるとキィ～ンっと小さな耳鳴りに襲われた。だが作戦は成功。《奴ら》は手当たり次第に共食いを始め潰れ合っていた。

「Ａｐｐａｒｅｎｔｌｙ，　ｄｏ　ｎｏｔ　ｓｅｅｍ　ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｍｅ　ａｎ　ｏｐｐｏｓｉｔｉｏｎ　ｐｌａｎ．（どうやら対抗策に成りそうだな）」

「Ｒａｐｉｄ　ｔｒｅｎｃｈ（急ごう）」

互いに潰し合う《奴ら》を無視し直進し続ける。なんとか、無事とは言い難いがウェスカー達はヘリでドコカへ去っていった様子だったので暫くは安全なのかも知れない。一度対峙した場所へ戻りバイクを回収したが、それには乗らず押して進むことになった。痛みに耐えながらディアブロッサを押す照井。トライアルメモリのマキシマムドライブは不安定でミスをすれば致命傷のいわば”諸刃の剣”なのだ。さらには防御力も大幅に下がってしまう。アクセル時でもモンスターにはダメージを喰らったのだ、トライアル時には強制変身解除は間違いないだろう。トライアルメモリ、使い方次第では戦闘を有利に進める事も出来、自ら劣性に陥る敗因にも成りかねな

い不良品のようなガイアメモリ・・・

日は既に傾き始めていた。目の前には民家。その先に微かに見えるのはショッピングモールの頭だろうか？日が沈む前に辿り着けた安堵と小室達は無事だろうかと言う不安感が照井の胸を苦しめた。

驚異のW／敗北のトライアル（後書き）

ん～難しい。

先ばかりを考えてしまって学園黙示録編の内容がイマイチな気がします。

はやく終わらせて可愛いラウラたんとハァハァさせたい・・・

照井さんは女性への免疫が中途半端なはずだ！

驚異のW／新たなる戦いに備えて・・・

「お兄ちゃん・・・？」

不意に声を掛けられた照井は無意識に振り返った。
死んだはずの妹：春子に似た声。
そして照井竜を『兄』と呼べる世界で唯一の人物。

振り返れば、ソコには照井竜の妹が立っていた。手を伸ばせば届く距離。死んだはずの妹との再会に動揺と歓喜の二種類の感情が照井を揺さぶる。

春子なのか・・・？

「そうだよ。お兄ちゃんも来たんだ、来ちゃったんだね・・・？」

どういう意味だ？

「お兄ちゃん・・・死んじゃったんだよね？」

・・・俺は・・・俺には・・・解らない。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん。お兄ちゃんにはチャンスがある。」

チャンス・・・だと？

「アタシはダメだったけど・・・お兄ちゃんは強いから！」

俺が、強いだと？違う、それは違うんだ春子！俺はおまえが思って

るほど・・・

「なら強くなって。罪の無いみんなが笑っていられる世界を守って。」

あ、あぁ・・・

「なんたって、お兄ちゃんは仮面ライダーなんだから」

!?

「仮面ライダーアクセル、照井竜。」

春子、何でそれを・・・!?

「内緒ですぅ〜・・・でも、お兄ちゃんならみんなを守れるハズだよ。」

・・・・・・

「じゃあねっ。」

待ってくれ春子!

グッと手を伸ばそうとしたが届かなかった。否、手を伸ばすがドンドン離れていき、もう手が届かなかったのだ。必死に妹の名前を叫ぶが彼女は後ろを向き振り返らなかった。まるで聞こえていない

かの様に・・・

気が付くと両目尻が濡れていた。仰向けのまま寝具売場で寝てしまっていたようだ。体を起こし、昨日の出来事を思い返した。そしてさっきの出来事も思い返した。アルバート・ウェスカーとの一戦。完璧な敗北を喫してしまった。もしアイツを人として見てなければ勝てたのだろうか・・・？そうして、ボロボロの状態のまま何とか大型ショッピングモールへとたどり着くことができた。だが、小室・毒島の二人には合流する事が出来なかった。他の仲間を逃がす為に囮をかって出たのだという。それを迎えに行くため照井が店を出ようとするとクリスに止められ結果的に羽交い締めにされ手錠で拘束されてしまったのだ。そして家具展示コーナーのソファーに横になった・・・

そして、照井春子の出現。どう考えても夢というにはリアリティーが尋常ではなかった。言うなら、幻覚の様な・・・それでも言い表すことの出来ない何か。手を伸ばせば掴めていたかも知れない距離間。昔のように頭を撫でる位なら出来たはずの距離。そして再確認させられたのは”照井竜が死んだ”という現実。

「一体どうなってるんだ・・・」

ハァと溜息を一つ吐き、天井を眺めながら額へと手の甲をあてた。

今日の天気は晴れ。窓から射す光は明るく、雲もバラバラにしか見えない。左手とソファーに付けられた手錠を銃で打ち抜き外すと落ちていた針金を拾い上げ鍵穴へと突っ込みガチャガチャとイジるとカチャッと鍵が外れた。一晩中手首を締め付けていただけありクッキリと痕が付き赤くなっていて痒みがあった。軽く手首を揉み、お気に入りの革ジャンを脱いだ。吉岡が振り回した日本刀のせいで胸元が横に切れている。もう変え時なのかも知れない・・・後で衣服売場をのぞいてみよう。取りあえずはモール内に残っていた生存者の確認やこの町内の地図を丸暗記。それと・・・小室たちも心配ではあるが・・・

そんな事を考えていると下が騒がしい事に気が付き、覗いてみると小室と毒島が帰ってきていた。そう解ると無意識に「フッ」と笑みがこぼれ安心していた。黒く無地のTシャツに赤い革のズボンのまま下へ降りていった。

「小室、どうやら無事なようだな」

んっ？と振り返り照井を確認しサムズアップで答えた。

「なんとか無事に生存できました。」
「そのようだな。俺は着替えるが、お前はどうする？」
「まだコレで良いです。動きやすいですし」
「そうか。」

スッと振り返り階段を上り始める。それから振り向かずに一言告げた。

「問題が起きれば呼べ。正直なところ、今は俺はアクセルに成れないが戦力くらいにはなるはずだ」
「・・・何かあったんですか？」
「俺に質問をするな、と言っただろ？」
「・・・はい」

衣服売場を転々とし、ひたすら服を探し続ける。出来れば同じ服がいいのだが、流石に別の世界にそんな物を期待は出来ないだろうと諦め半分で服を探っていると青の革ジャンを発見した。柄は今まで着ていた赤い革ジャンの色違いで後ろには炎のマークが付いている。もちろん上下揃っている。早速袖を通すとサイズも合い申し分のない出来である。着替え終わり、今まで着ていた革ジャンを見つめて考える。捨てるほどの物ではないだろうか・・・？修復できる程度かも知れない。保存しておこう・・・

不意に家具売場が騒がしい事に気が付いた照井。距離としては直進して１５ｍ程度だろうか？生存者たちが騒いでるのだろう。照井の記憶が確かなら婦警が居たと思い、足を動かした。

「何をしている、仲間割れか？」

あぁっ！？と荒げた声を返されたが無視し照井は続けた。

「日本の法律、刑法第２編第５章を知っているか？」
「何の話じゃ、ワシ等は今大事な話をしとるんだ！新入りが顔を突っ込むな」

「そうだ、俺達は警察官のねーちゃんと話してんだよ！」
「そうだな、警察官が市民を守るのは至極当然だ。だが、お前達のしている事は仕事をしている警官の邪魔じゃないのか？」
「何を・・・？」
「彼女は警察官で、危険だからとお前達をココへ引き留めている。だがお前達はそんな彼女を一方的に脅し私情に走ろうとしている。」
「そ、それがどうしたと・・・」
「だから俺は日本法の規定の刑法2編第5章：公務執行妨害が適用されると言っている。」
「なっ・・・」
「そうだったよな、婦警さん？」
「はひっ・・・そうですっ・・・うぅ・・・」
「そんなの詭弁じゃろうが！？」
「俺に質問をするなぁ～っ！！」

泣いている婦警を庇い、市民を一蹴する。それから婦警を呼び家具売場を後した。

「あ、ありがとうございました。その・・・法律に詳しいんですね。」

ハンカチで涙を拭きながら話しかけてくる婦警と肩を並べて歩く照井。身長差が有り、婦警は照井を見上げている。

「あぁ、俺も元警官だからな。」
「そ、そうなんですか！？」
「だが、こんな世界で法律が通じない敵が現れたんだ。別に肩肘張って無理に仕事する必要はないだろう。だから俺は目の前にモノだけを守ると決めた。」
「なるほど・・・あぁ、そうだ・・・中岡あさみ巡査であります」

ピシッと敬礼され、照井も条件反射で返してしまった。

「巡査か・・・今年配属された新任警察官と言ったところか？」

「はい、そうであります。」

「別に肩肘張らなくても良いだろう・・・」

照井が呆れながら告げると頬を赤らめながら照れる。

「つい癖で・・・所でお名前を伺ってもよろしいですか？」

「あぁ、そうだな・・・照井竜元警視だ。照井で良い」

「えっと、巡査、巡査長、巡査部長、警部補、警部、警視だから・・・大先輩じゃないですか！？」

「まぁ、そうなるな。」

「うぅ・・・すいません。」

「きゃぁあああああああっ！！！！！」

先程まで照井が寝ていた寝具売場の方からの悲鳴。どうやら鞠川静香の声のようだ・・・照井は《奴ら》や《ゾンビ》の襲撃に備えグロックを引き抜いた。銃口を下に向け小走りで進む。

「や、やめるのであります島田さん！」

「なんだよホンカンのねーちゃんか。悪いがアンタは好みじゃない」

「武器を捨ててその人から離れなさい！これは警告であります！！」

銃口を男へ向け警告する。ベッドの上には鞠川と島田と言う男。どうやら寝込みを襲うという卑劣な行為に走ったようだ。だが、片手には鉈を持っている・・・

「お、おい・・・・・・」
「いますぐ、その人から離れ武器を捨てるであります！さもなければ・・・」
「撃つってのか？ブルってるのに本当に撃てるのか！？撃てるもんなら・・・撃ってみろぉッ！！」

確かに中岡の銃を持つ手は震えていた。だが、スッと後ろから出てきた照井の腕に緊張は無かった。グロックの連射で鉈を撃つ。ドーパント用に強化された弾丸は、島田の持つ鉈を撃ち弾(はじ)き宙に浮く。さらに空中で回転する鉈の刃先を撃ち砕く。砕けて空中分解した鉈を更に撃つ。何でもソツナくこなす照井にとって、修羅場を潜り続けた照井にとってソレはとても簡単なことの様だった。

「動くな、動けばお前を撃つ。」

銃口をしっかり見定め鋭く告げる。

「大丈夫か、鞠川校医？」
「えっ、えぇ～なんとか・・・」

相変わらずボォ～ッとしているが状況は把握できたようでタッタッと照井の方へ走りよる。その後、紐で拘束し自由を奪う。

「所で、レッドフィールド達は何処にいるんだ？」
「あの人たちなら屋上じゃないかしら？」
「そうか、すまない。それじゃ気をつけろ」

仕事をサクサクと片づけ、屋上へと向かう。

驚異のW／新たなる戦いに備えて・・・（後書き）

今回の話は割と短めな気がしますね。

次から割と長めかつ展開を進めていきたいとか思ってますが・・・

どうなるこっちゃ・・・

以上です。

楽しんでいただければいいな

Ｊの復帰／制御不能なクリスの想い（前書き）

３０日ぶりです

７月最終日に更新できて満足です。

Ｊの復帰／制御不能なクリスの想い

ショッピングモール屋上。風が和いでいた・・・

スナイパーライフルを構え、Ｂ．Ｏ．Ｗ．の進入だけは防ぐ為に丸一日警備を続けていたクリスとシェバ。クリスの表情はどこか曇り悩んでいる様にも伺えたので照井は話しかけた・・・

「Ｈｏｗ　ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｄｏ，Ｒｅｄｆｉｅｌｄ？（どうしたんだ、レッドフィールド？）」

「Ｔｈｅ　ｃｌｕｅ　ｃａｎ　ｂｅ　ｃｏｍｐｌｅｔｅｌｙ　ｇｒｉｐｐｅｄ　ｔｈｏｕｇｈ　ｉｔ　ｗａｓ　ｈｅａｒｄ　ｔｈａｔ　ｔｈｅｒｅ　ｗａｓ　Ｊｉｌｌ　ｉｎ　Ｊａｐａｎ　・・・（日本にジルが居ると聞いていたんだがまったく手掛かりが掴めなくてな・・・）」

「Ｔｈｅ　ｒｅｓｉｇｎａｔｉｏｎ　ｓｈａｌｌ　ｎｏｔ　ｂｅ　ｅａｒｌｙ．（諦めが早いんだな）」

「・・・Ｉｔ　ｄｏｅｓｎ'ｔ　ｇｉｖｅ　ｉｔ　ｕｐ！Ｓｕｒｅｌｙ，　Ｉ　ｗｉｌｌ　ｆｉｎｄ　ｔｈｅ　ｍａｔｅ．（諦めていない！必ず相棒を見つけてみせる）」

「Ｉ　ａｍ　ｓｏ　ｏｒ　ｗｉｌｌ　ｓｕｒｖｉｖｅ．　Ｔｈｉｓ　ｈｅｌｌ（そうか、生き残るぞ。この地獄を）」

「Ｗｈｅｒｅ　Ｊｉｌｌ・・・（ドコにいるんだジル・・・）」

恨めしそうに一体のゾンビへヘッドショットを決めた。照井はそれを見てクルッと方向転換しモール内へと戻った。それから、小室達と合流し店内の喫茶店でコレから先の計画を立てていた。不意に宮

本が煎れたコーヒーをテーブルの前に出した。

「氷とかないけど、水出しで入れてみたから。前からいる人たち、まだこの店の中は探してなかったから。ペットボトルの水もあったし」

「よく入れられたな」

「中学の夏休みに喫茶店でバイトしてたから・・・パパにバレて一週間で辞めたけど」

コトンと目の前に置かれたコップに口を付け照井は味を確かめた。

「・・・不味い。このコーヒーは所長の煎れたコーヒー以下だ。」

「なっ！」

「せ、先生はおいしーと思うわ・・・」

「コーヒー苦くてのめない・・・」

「缶ジュースもあるから・・・ココに入ってるペットショップからジークのおやつも持ってきたわよ」

？「甘いな宮本。せめて火を・・・マッチやライターを使うべきだったな。コーヒーの最適な割合は、生豆７０％、焙煎２０％、抽出１０％。湯の温度は８５℃～９０℃。そして時間も大切だ。」

「照井さんて・・・珈琲馬鹿・・・？」

「違う。あくまでも本当に美味しい珈琲の淹れ方を・・・」

と照井が珈琲に対して熱弁しようとした所で一人の男が邪魔に入った。

「お、おい兄ちゃん！！婆ちゃんが・・・モール内の婆ちゃんが調子悪くなってる！看てやってくれ」

「医務は俺の専門外だ、鞠川校医？」
「ほえっ？」

ーーー�ー�ーーーーーーーーーーー�ーーー�ー�ーーーーーーー�ーーーーーーーー�ーーー�ーーーーーーーー�ーーー�ーーーーーーーー�ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー�ーーーー�ーーーーー�ーーー�ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー�ーーー�ーーーーーーー�ーー��ーーーーーーー�ーー�ーーーーーーーーーー�ーーーーー�ーーー�ーーーーーーーーーーーーーー��ーーーーーーーー�ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー�ーーーーー�ーーーーーーー�ーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

不応性貧血・・・
骨髄異形成症候群の老婆を救うために輸血用の新鮮凍結血漿を最寄りの病院まで回収しに行くこととなった。
メンバーは、警察官が適任だろうと中岡、照井、クリスの三人が選ばれた。
そして道案内は小室と、老婆の異常を知らせに来た田丸の二人だ。

「あそこ、小坊の頃診てもらったことがある」
「おまえもかよ？」
「あなたもですか？」
「あそこの先代マンガ好きでさ、待合室にはマンガ喫茶なみに揃ってた。」
「おまえ達、少々緊張感に欠けてるんじゃないのか・・・？」
「すいません照井さん。」
「にしてもズルイよな、銃を隠してたなんて」
「使ってみますか？っても銃声に寄ってきますけど・・・」
「冗談はよしこちゃん！！俺はハンドガンのマニアだぜ？認めるのはオートならグロック１９、リボルバーならハンマーシュラウド付けたコルト・ディティクティブだけさ・・・実銃はさわったことないけどネ」
「マグナム、デザートイーグルが抜けているな。アタッチメントにスコープ、ドットサイト、レーザー照準機等が付けられるし世界最

高の威力がある自動拳銃だ。前に使ったが悪くなかった。」
「あぁ、でも反動とかで肩とか壊すって・・・」
「それは間違った情報だ。銃は正しく取り扱うことが出来ればどんなに高火力であろうと扱える。それが子供でもだ・・・」
「そうか・・・」
「・４４マグナムも進めるがな。まぁ良い、お前にはコイツを貸してやる。」

そう言い照井は、懐からグロック１７を抜き出した。

「１９じゃなくて残念だったな。」
「おぉ～コレ本物・・・！？」
「弾丸は強化されているが、絶対に引き金を引くな。いざと言う時まではな・・・」
「あ、あぁ・・・」
「照井さん、そこを右に曲がればすぐソコです。」

隣接する家の塀から覗き、《奴ら》が居ないことを確認して病院内へと急ぐ。入り口を開き、病院の中へ入ると割れた窓から風が入りヒュ～ッと嫌な音を立てる。少しずつ前進すると、診察室の扉がキィ～ッと不気味な音を立て開く・・・
何事もなく扉は勝手に開き《奴ら》の奇襲に身構えた五人はホッと一息ついた。

次の瞬間、扉や受付の窓を突き破りゾロゾロと現れたのは《奴ら》ではなくゾンビだった・・・
迫ってくるゾンビの隙間を縫うようにスリ抜け、クリスはゾンビの

後ろに立った。それからゾンビの膝裏を蹴り、人工的に膝立ちの状態にする。なんとか立ち上がろうとモガくゾンビの首をヘシ曲げる。ネックツイストと言う奴だろう・・・
後ろから迫るゾンビへコンビネーションパンチで応戦する。

「Ｏｎｅ　ｔｗｏ！！（１、２っ！！）」

頭部へ２発の大ダメージで動けなくなるゾンビ。さらにもう一体の腹部へ一撃、顔面へのフックとアッパー・・・
周りを巻き添えに倒れたゾンビ達の顔面を踏み潰していく。まるで、怒りを晴らすかのように・・・

「バケモノかよ・・・あの兄ちゃんヤバすぎ・・・」

一人で最奥まで進んでいくクリスの背中を追いながら後ろにも気を配る。入ってきた正面玄関からもゾンビが群がってきていた・・・

「コレじゃキリがない・・・」
「喋る前に戦え、小室。」
「照井さんはどうして変身しないんですか！？あんだけの力があるなら・・・」
「俺に質問をするな！！」

そう言い、クリスの様にゾンビを転がし頭を踏み潰す。

（変身したくとも、前の戦いでドライバーに負担を掛けすぎた。少なくともあと３時間はメモリも使えない。これ以上負担を掛けすぎると二度と仮面ライダーには・・・）

「Ｔｈｉｓ　ｒｏｏｍ　ｉｓ　ｓａｆｅ．（この部屋は大丈夫だ）」

「Ｉｔ　ｃｏｎｓｅｎｔｅｄ．（了解した）　早く診察室に駆け込め！」
「「はいっ！！」」
小室達が診察室へ入っていったのを確認し入口の敵と対峙する照井。が、その遙か後ろからゆっくりとＢ．Ｏ．Ｗ．が迫ってきていた・・・
「Ｔｙｒａｎｔ．．．（タイラント・・・）」
「タイラント・・・？暴君・・・そう言う名前か、厄介だな。小室、イサカを持ってこい」
「どうしたんです？」
「デカいのが来た・・・」
「Ｉｔ　ｗｏｕｌｄ　ｂｅ　ｎｏｔ　ｂｅｔｔｅｒ　ｔｏ　ｇｉｖｅ　ｕｐ　ａｎｄ　ｔｏ　ｍｏｖｅ　ｂａｃｋｗａｒｄ　ｔｈｉｓ　ｐｌａｃｅ　ｂｙ　ｙｏｕ．　Ｅｑｕｉｐｍｅｎｔ　ｉｓ　ｉｎｓｕｆｆｉｃｉｅｎｔ．（この場は諦めて退いた方が良いな。装備が足りない）」
「輸血道具あったじゃん！！」
「照井さん回収は終わりました。逃げましょう！！」
「そうか、窓から逃げろ！」
その瞬間、診察室にパリーンっとガラスの弾ける音がした。ズチャ、ズチャと耳障りな濡れたような音が部屋に響く。
「Ｌｉｃｋｅｒ！？（リッカー！？）」

クリスが慌てて診察室に入った時には既に田丸がリッカーと呼ばれるB．O．W．の舌に腹部を貫かれていた・・・
クリスは素早くサバイバルナイフを引き抜くとリッカーの舌をスパンと斬り裂き、瞬時に持ち変えたショットガンを片手にリッカーを吹き飛ばした。それに続き天井へ銃口を向け、天井を打ち抜く。開けた穴から、中岡をグッと押し上げ、次に小室を屋上へと飛ばした。それから先に上がった二人に援助されながら田丸が引き上げられる。

「Ｇｏ　ｐｒｅｖｉｏｕｓｌｙ，Ｒｙｕ！！　（先に行け、竜）」
「Ｉｔ　ｈａｓ　ｕｎｄｅｒｓｔｏｏｄ．　（解った）」

トンッと跳躍し、照井は下へと手を伸ばした。

「Ｒｅｄｆｉｅｌｄ（レッドフィールド）」

その手をグッと握り、クリスは屋上へと上がった。だが同時に田丸は口から大量の血を吹き出し苦しみだした・・・

「Ｗｏｒｋｉｎｇ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｐｏｉｓｏｎ　ｉｓ　ｅａｒｌｙ，Ｔｈｅｒｅ　ｉｓ　ｎｏｔ　ａ　ｖａｃｃｉｎｅ　ｅｉｔｈｅｒ．（毒の効き目が早い！ワクチンもない・・・）」
「何て言ったんです！？」
「毒の勢いが強すぎる。ワクチンも無いと・・・」
「あぁ・・・俺、死ぬのか・・・やっぱり俺には向いてなかったんだ・・・」
「そ、そんな事無いです！あさ、本官は立派な行いをしたと思います！」
「あぁ、兄ちゃんにコレ返さないと・・・」

そう言い、ポケットからグロックを取り出す。それから自分の額に当てて照井へと語り掛ける。

「引き金を引いてくれ。”コイツ”で死ねるんだったら俺も本望だ・・・」

「解った。」

ゆっくりと銃を握り、田丸を見定める。

「本名は・・・？」

「田丸・・・ヒロシ・・・」

「そうか、田丸ヒロシ。良くココまで頑張ったな。先に逝って待っててくれ・・・」

そして乾いた銃声が民家へと響きわたった・・・

屋上から民家の屋根へと渡っていく。その日、一人を救う為に一人が犠牲になった。それでも照井達は前に進んだ、無惨な現状を噛みしめて・・・

スタッと瓦で出来た屋根を降り、地面に飛び降りた。わりと開けた

大通り、商店街の一角だろう。そこに一体のタイラントが居た。正確には、少しづつ力強く迫ってきている。クルッと方向転換し後ろを向くともう一体のタイラント・・・
前後から塞がれてしまった。照井はゆっくりと懐から銃を抜き、コソコソと喋り掛ける。

「小室、合図したら奴らの居ない方へ走れ。君もだ中岡巡査」
「で、でも本官は・・・」
「ココは俺たちで何とかする。発砲した瞬間にモールの方へ走れ。Ｉ ｗｉｌｌ ｈｏｌｄ ｉｔ ｏｆｆ．（食い止めるぞ。）」
「Ｉｔ ｉｓ ｓｏ．．．（そりゃそうだ・・・）」

互いに背中合わせになり、正面に銃を構える。

「「今だ！！（Ｇｏ ！！）」」

バンバンッと銃声が響いた瞬間に小室と中岡は走り出した。そして５０ｍ程横へ直進し、ピタリと止まってしまった・・・
その二人の前にはアルバート・ウェスカーと共に居た謎の仮面を付けた人物が一人。両手にはサブマシンガン・Ｖｚ．６１（スコーピオン）を持っている・・・

「Ｄｕａｌ．．．？（デュアル・・・？）」
「伏せろ！！」

照井が叫んだ瞬間、二人の目の前に居たソイツは銃を横に一斉掃射した。小室と中岡は何とか交わし照井とクリスも無傷だったが、照井はすぐさま反撃した。正面を向いているソイツの仮面を撃ち抜いたのだ・・・

カァ～ンと甲高い金属同士のブツカる音。それに続き、カツーンと地面に落ち、バウンドする仮面。

その顔を見た瞬間にクリスは理解出来ずにいた。

「Ｊｉｌｌ！？」

「何っ！？」

目の前にいたのは金髪の女性、三年前に失踪したはずのジル・バレンタインだった・・・

Ｊの復帰／制御不能なクリスの想い（後書き）

何とか書き終わりましたよぉ～

ジル登場ですよぉ～

３０日ぶりですが、あんまりツマラナいかも・・・

ごめんなさい。

ってこう言うのは前書きするものだな・・・

ごめんなさい。

はやくラウラちゃん出したいなぁ～

ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長とチンク姉様似すぎ・・・

奴隷と収録って字も似すぎ・・・

Ｊの復帰／やがて怪物という名の雨（前書き）

照井竜、今回の事件は・・・

「日本にジルが居ると聞いていたんだがまったく手掛かりが掴めなくてな・・・」
「諦めが早いんだな」
「諦めていない！必ず相棒を見つけてみせる」
「生き残るぞ。この地獄を」

「婆ちゃんが・・・モール内の婆ちゃんが調子悪くなってる！看てやってくれ」

「タイラント・・・この場は諦めて退いた方が良いな。装備が足りない」
「照井さん回収は終わりました。逃げましょう！！」
「そうか、窓から逃げろ！」
「リッカー！？」
クリスが慌てて診察室に入った時には既に田丸がリッカーと呼ばれるＢ．Ｏ．Ｗ．の舌に腹部を貫かれていた・・・
クリスは素早くサバイバルナイフを引き抜くとリッカーの舌をスパンと斬り裂き、瞬時に持ち変えたショットガンを片手にリッカーを吹き飛ばした。
それに続き天井へ銃口を向け、天井を打ち抜く。開けた穴から、中岡をグッと押し上げ、次に小室を屋上へと飛ばした。
それから先に上がった二人に援助されながら田丸が引き上げられる。
田丸は口から大量の血を吹き出し苦しみだした・・・

ゆっくりと銃を握り、田丸を見定める。
そして乾いた銃声が民家へと響きわたった・・・

Ｊの復帰／やがて怪物という名の雨

目の前にはクリスの元相棒、ジル・バレンタインがいた。それは、照井竜にも予測不可能な出来事で数瞬思考が止まり緊迫した時間が流れた。その隙にタイラントは猛ダッシュで迫ってきていた。ようやく状況の整理が追い付いた照井はビートルフォンをライブモードへ変形させ、二体のタイラントへ向けた。ビートルフォンは高速でタイラントの周りを飛び回りパワーホーンを駆使した攻撃でタイラントの敵意を照井からそらしていた。そして、クリスはジルの前に立ちはだかる。

「Ｊｉｌｌ　ｗａｓ　ａｌｉｖｅ．．．？（生きていたんだな、ジル・・・？）」

安心しかけていたクリスへ銃口を向けたジル。低い声で威嚇する様に小さく唸り声をあげ、睨み付ける。それから商店街のスピーカーにノイズ混じりの放送が流れる。

『Ｉｓ　Ｃｈｒｉｓ　ｅｎｊｏｙｉｎｇ　ｉｔ？Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ａ　ｐｒｅｓｅｎｔ　ｆｒｏｍ　ｍｅ．　Ｂｅｇｉｎ　ｔｈｅ　ｆｉｎａｌ　ｐｈａｓｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　ａｄｊｕｓｔｍｅｎｔ　ｅｘａｍｉｎａｔｉｏｎ．（クリス楽しんでいるか？これは私からのプレゼントだ。調整試験の最終段階を開始しろ。）』

それからキーボードを叩く様な音がする、カタカタっと・・・すると、銃を持った両手で頭を押さえ苦しむジル。見かねたクリスが近付こうとすると、即掃射で近付くことを阻む。瞬時に前方へローリングし交わしたクリスは、ジルが身に纏っていたローブの様な物を引き剥いだ。すると、ブルーのバトルスーツを着たジルが後

方へ大きく後退する。それと同時に開かれた胸部の赤いクウォーツの様な物が露わになる。光に反射し嫌でも目に付くソレを指さしクリスは問う。

「Ｄｏｅｓ　ｉｔ　ｍａｎｉｐｕｌａｔｅ　Ｊｉｌｌ？（それがジルを操っているのか？）」

だが返答は無かった。次の瞬間、ビートルフォンに大ダメージを負わされた一体のタイラントの安全装置が外れ、近くにある物を破壊し始める。ソレにダメージを受けたもう一体も連鎖反応の様に暴走する。安全装置が外れ暴走状態に陥った二体の腕には鋭利に伸びた爪が目立つ。そして、ジル・バレンタインを放って置くわけにもいかない・・・

照井は意を決した様にタイラント達の前に出た。

「小室、イサカを貸せ。」

今にも襲い掛からんとするタイラントから目を離す事無く、片手を小室の方へ伸ばす。そして、すぐに銃を受け取った照井はビートルフォンとの連携で、近い方のタイラントから倒すことにした。ビートルフォンがタイラントの背中へ突進し倒れた所へ上部から頭だけを狙い、引き金を引く。さらにポンプを引きリロード、さらに射撃。もう一度リロードし、再度射撃。次の瞬間倒れたまま照井の足首を掴み、握り潰そうと力を込める・・・

「！？・・・グゥ痛ぁ・・・・・」

タァーーーーンッ！！

と、遠くから銃声が響いた。痛みのあまり声を漏らした照井の足

に強い衝撃が走り、痛みから解放された。音の方向を見ると屋根の上でしゃがみ、ＡＲ－１０を構えた平野と地上にはＳＶＤを背中に背負ったシェバがクリスの援護に駆けつけていた。

「ひ、平野・・・」

「もう一体も頼んだ！！」

それを言い残し、照井はクリス達の隣に立ち再度臨戦態勢に入った。

「Ｉ　ｗｉｌｌ　ｄｉｓｊｏｉｎｔｅｄｌｙ　ａｓｓａｕｌｔ　ｉｔ．（バラバラに強襲するぞ。）」

照井が案を出すと、同時に三方向へ散会し走る。クリスが左へ、照井が右へ、そしてシェバが真ん中を攻める。それに危機を感じたジルは動作が追い付かないほどのスピードを駆使して照井とクリスへ反撃した。

左手で照井を牽制しつつ右手の銃でクリスを威嚇射撃する。怯んだ隙に照井と一対一の肉弾戦へと持ち込む。照井の首元を蹴り飛ばすサマーソルト。着地の瞬間に後ろから迫ったクリスへ足払いをかける。だがクリスはなんとか踏みとどまった。それを読んでいたのか体勢を崩したクリスへエルボーを入れる。グフッと咳込む瞬間にアッパーを決める。完全にジルのペースへ入りかけた瞬間。

タァーーーンッ！！

と銃声が響くと、ジルの胸部に付けられたクウォーツからチカチカと電気が走りジルが苦しみ始める。それを見た照井が体を背後から羽交い締めにする。それに続き、クリスが力任せにクウォーツを

引き抜こうと引っ張る。胸部から細長い触手にも似た管が無数に垣間見える。だが、引き抜く前にジルがクリスを蹴り飛ばし背後の照井を体の柔軟さを活かしすり抜け反撃する。背後から捕まえていたはずのジルが、照井の背中に立ち頸椎を強打する。照井の視界は一度グラッと歪んだものの何とか立て直しジルの手首を掴んだ。そして、胸ぐらを”無理矢理”掴み、背負い投げの要領で地面へとねじ伏せた。そして起き上がる前に再度赤いクウォーツを射撃。またチカチカと電気を発した胸のクウォーツを握り潰すように掴み引っ張る。力任せなだけあり、地面からジルの体が浮き上がるが一向に取れる気配がない。すると、クリスがジルの肩を掴み照井と逆方向に引っ張りだした。胸部から伸びた管をシェバがサバイバルナイフで斬り裂きようやくジルは大人しくなった。それからシェバはピンセットの様な物で胸に残った管を抜き始めた。

「At last, it ended. （ようやく終わったか・・・）」

フゥ～ッと一息吐くクリス。それを見て照井は一言だけ告げた。

「It is different. Until that elderly couple is saved（違う。あの老夫婦を救うまでは）」

「Yes.（そうだな）」

治療が終わったジルを背中に背負い、クリス達は音を響かせすぎた商店街から早足で抜け出す。目指す先はショッピングモールである・・・ゆっくりと慎重に歩を進めていく。そして、目の前まで来た時に気が付いた。屋外の・・・目の前の駐車場に《奴ら》、ゾンビ、B.O.W.の死体が大量に積み重なっていた・・・

それを調べようとクリスが一歩前に踏み出したとき巨大なサソリがクリスの前に現れ巨大な鋏を振りかざした・・・まさに間一髪と言うものだろう。ギリギリの所でサソリの鋭利な鋏はクリスの胴体を空振ったのである。

「Ｉｓ　ｉｔ　ｔｈｉｓ　ｔｉｍｅ　ａ　ｓｔｉｎｇｅｒ　・・・？（今度はスティンガーか・・・？）」

銃を引き抜き、照井・クリス・シェバは構えた。そして、意識が回復しないジルを小室、中岡、平野に任せてモール内へ行けるように試行錯誤する。なんとか無事にモール内へ送り届けた三人は安堵の表情と浮かべると共に真剣な目つきへと変わった。

と、不意に上空から軍事ヘリの様な物が通り過ぎざまに何かを落とした。ソレは死体の山へダイブし、暫くしてからピクリと動いた・・・まだ生きているのであろうか？それともまたＢ．Ｏ．Ｗ．が現れたのか？と疑問符を浮かべつつ警戒していると死体の頂上から悲鳴にも似た絶叫のような女の甲高い声が響きわたった。

「Ａｌｂｅｒｔ！！！！（アルバァーーートッ！！）」

それから声はプッツリと途切れ聞こえない。次の瞬間、どこからか現れた黒いミミズの様な物が互いを求め合うように混ざり始めた。どこからともなく発生したソレは無数に繋がり、巨大なミミズへ変わる。さらにその巨大なミミズの様な物は無限に増殖し、混ざり、増殖を繰り返していく・・・強いて言うなら、死体の山を飲み込むように大きくなっていく。そして、最終的にはスティンガーと呼ばれるＢ．Ｏ．Ｗ．をも取り込み大型ショッピングモールへモタレ掛かる様に付近一帯が真っ黒くなる。増殖の際に照井達はただならぬ気配を感じモールへ逃げ込みミミズに呑まると言う難は逃れた。も

のの、八方塞がりとなってしまった・・・

そして晴天だった空はいつの間にかドス黒く濁り、ザァ～ッと打ち付けるような雨天へと変貌していた。

Ｊの復帰／やがて怪物という名の雨（後書き）

とりあえず、前書きをＷアバン風にしてみました。
ちなみの台詞とかは前回のをコピペしただけです。
もう少し前書きを長くしても良かった気もしますが気にしないで・・・
・

そして、ジルさん復活させました。

この辺は殆どバイオ５ストーリーを脳内で再構築させてます。
Ｂ．Ｏ．Ｗ．とか特別出演的なｗｗｗ
そして次回の見所はやっぱりアレです。
ウロボロス戦ですね、タイトルとか通り・・・

それで、コメントと総合評価を下さい。
それだけでヤル気がアップします！
ＰＶ累計『３６，９４８』アクセス！！

読んで下さった方ありがとうございます。

Dの乱入／中途半端な終わりを告げて・・・

一度モール内へ入り、安全の確保をしようと試み戻った直後のことだった。巨大なソレはモールを上から包み込むように覆い被さり、八方塞がりになってしまう。

「Ｄａｍｍｉｔ！！（クソッ！！）」

クリスが声を荒げ、強く地面を踏みつけた。彼らが日本に来る際に船に乗っていたのと同じタイプのＢ．Ｏ．Ｗ．らしく、名はウロボロス。火炎に弱いが、銃弾を殆ど受け付けないらしく、今の装備では相性が悪いらしい・・・

まだ窓ガラスは無事だが、時間の問題だろうとクリスは告げ、モール内は一斉に騒がしくなった。我先に逃げようと食料を集めに行こうとする生存者達。それを見つめ、照井は頭上に一発の弾丸を発砲した。

パンッ！！

乾いた銃声に、一同が振り返った先には拳を強く握った照井が居たのは言うまでもない・・・

それから、一度深呼吸をして大声で叫んだ。

「落ち着け、この現状で誰か一人だけ生き残るのは不可能だ！！今は自分だけ助かろうなんて考えるな、力を合わせてこの窮地から抜

け出すんだ！！」

シーンとした空気。その静寂を破ったのは数時間前に鞠川へ猥褻行為を働いた大男だった。

「じゃぁ、何かアレを倒す秘策でもあんのかよ！！あんな化け物に立ち向かうほどの武器は有んのかよっ！？」
「残念だが、人数分の武器はない。だが、一人一人が力を合わせれば勝てない敵ではない。」

周りにも聞こえるように聞き取りやすい様な声で続ける。

「奴の弱点は炎だ。もし、ガソリンや灯油、油でも良いから集めてくれ。まず俺が地上で囮に成りながら奴に可燃物を浴びせる。俺に気を取られている合間に、お前達は屋上からかけてくれ。そして、発火させ直ぐにこの場から離脱する。コレ以外に何か得策はあるか・・・？」

周りを見渡すと、数人の生存者は反対だと訴えてきた。なぜ自分達まで危険な目に遭わなければならないのかと・・・
だが、照井は落ち着いて声で答えた。

「まだ生き残りたいなら、俺に質問をするな。」

それからバラバラに散ってモール内に有る可燃物を探す。この戦いが終われば、少しでも楽な未来があると信じて誰もが照井に従った。それは、難病を患った老夫婦も同じように周りを手伝っていた。今出来る唯一の恩返しだと・・・

ー９０分後ー

大量とまでは言いがたいが、店の隅々まで探した結果なのだから仕方がなかった。その内の１／３を地上でバラ撒くことになった。周りにある使い物にならない車をエンジンブレードで斬り裂きガソリンを奪取して使えるからと言う安易な答えを理由に照井は用意されたポリタンク二つを両手にモールの外へと出た。

≪ＡＣＣＥＬ！！≫

メモリを装填し、パワーグリップを捻るとアクセルドライバーのメーターが一気に限界値まで上昇する。腰を中心に熱風が吹き荒れ、近付こうとしたウロボロスの触手を気圧し、次の瞬間には六針が体を覆う。

「さぁ、振り切るぜっ！！」

片手にエンジンブレードを持ち、もう片方でポリタンクを持つ。そして、一気に駆け出して高い位置まで跳躍し空中でポリタンクを破壊し中身を撒く。
一瞬も休む事無く駆け出し、もう一つのポリタンクを手に取る。そして、一度目と同じように中身をウロボロスへバラ撒く・・・

二つをかけた時点では全く濡れているかが怪しい所では有ったが、アクセルは疑うことなく自分の仕事を続ける。次に、駐車場に止まった車のガソリンタンクを力一杯に切る。コボれ出したガソリンを先導するようにエンジンブレードでアスファルトに線を描く。

小さな火花がパチパチと見え隠れさせながら不規則な前進を続ける。数台を斬り、ガソリンをウロボロスを囲うように周囲に撒き終えた照井はモール内の仲間へと合図を送った。

「今だ、屋上からブチ撒けろ！！」
≪ＴＲＩＡＬ！！≫

スリーカウントが始まり、赤・黄・そして青へ・・・未だに未完成な、アクセルのトライアルフォームへ変わりエンジンブレードで触手を斬り裂く。

（たとえマキシマムが使いこなせなくとも、このフォームでも戦えるはずだっ！）

迫り来る触手を見た後に交わし、斬る、斬る、斬る。
何度も何度も身体を切り、蠢く触手を踏みつけ、巨大な中核的な玉を砕き・・・身体の負担を無視し、走り続ける。

「照井さん、終わりました!!」

そして不意に気付く、火がないと・・・着火物が何もない・・・
火花では威力が足らず、アクセルでは熱風しか発する事が出来ない・・・

完全な照井竜の落ち度だったのだ・・・

「小室、火はないか!?」

「えっ?」

「ライターでもマッチでも良い!火を付ける物を来れっ!」

「誰か、ライターは持ってないんですか?」

「ま、マッチならあるぞ!」

そう言い、生存者が出したマッチを照井の方へ投げ渡される。
それを掴み、一本を抜き取り擦ったが火が起きない。
雨に濡れて湿気てしまい火がつかないのだ・・・

火を付けようとした瞬間の隙に照井は触手に殴り飛ばされ切り刻まれた廃車にブツカり、フロントガラスに埋まる。

（何か・・・何か方法はないのか？折角ココまで来たのに・・・）

≪Ｋａｍｅｎ　Ｒｉｄｅ．．．　ＧＡＲＲＥＮ！！≫

照井の後ろから聞き慣れない不思議な電子音が流れた。それに続き、また聞き慣れない電子音。それも、先程の物とは違う物が短くひとつ。

≪Ｆｉｒｅ！≫

次の瞬間、照井の背後からウロボロスめがけ火炎弾が飛び、発火。見る見る内に巨大なウロボロスは黒コゲになり、蒸発していく。大型モールを巻き添えに大きな火の手が上がる。

「小室！逃げるぞ！！」

何者かの援助で窮地を脱した照井は全速力でモールの中へ走りバイクを奪取する。
それに跨り、自分の背後にいた人物を追いかける。
すると、目の前に不思議なオーロラがパァッと出現した。

「!?」

ブレーキも効かず、そのまま怪しげなオーロラの中へ突っ込んでしまう照井・・・

「うぉっ!?」

目の前が一瞬にして真っ白になり、不思議な空間に引きずり込まれてしまった。

Dの乱入／中途半端な終わりを告げて・・・（後書き）

あぁ～あ・・・

終わったな（・ω・、）

終わらせちまったな・・・

総合評価：１００を越えましたぁ～（パチパチ

なんか特別企画とかやるべきなのか・・・？

呼んで下さってる皆さんに感謝です！

コレでおｋ？ｗｗ

次回の駄作話に期待しててて下さい

以上。

Dの乱入／強制転移とドーパント

光の中へ突っ込むと、しばらく目が眩みバイクを急停止させる。

「ぐっ・・・！ココは・・・？」

ようやく目が慣れ、見開くと急ぐように照井の横を走り去っていく人々。大慌てで通り過ぎていく人を一人捕まえ、話しかける照井。

「何があったんだ？」

「何言ってんだ、ドーパントが出たんだよ！アンタも早く逃げないと巻き込まれるぞ！？」

まっすぐ街の中心部の方を指し、すぐさま逃げ始める人を目の端で追いながらバイクを走らせ始める。

（ココにはアレはいないのか・・・？それに、ドーパントだと？）

不信感を抱きつつも倒すべき目標の元へ急ぎ、捕捉する。民間人1人に的を絞り氷の矢を飛ばそうとするアイスエイジ・ドーパント。黒いスーツを着た女性が目を瞑り、諦めた瞬間にディアブロッサと共に跳躍しバイクから離脱する照井。無人バイクがドーパントに向けて接近し放たれた氷の矢を弾き、アイスエイジへ直撃するディアブロッサ。そして、ようやく目を開けた女性は絶句する。目の前には弟と変わらない身長の”高校生”らしき男が目の前に居たからだった。

「大丈夫か？」
「・・・あ、あぁ・・・お前は？」
「俺に質問をするな。」

そこまで言うと、懐からアクセルメモリを取りし、戦闘態勢に入る。

≪ＡＣＣＥＬ！！≫
「変・・・身！！」

スロットへとメモリを装填し、パワーグリップを捻ると再度ガイアウィスパーが吼え、、ベルトにＡのマークが浮かび上がる。

≪ＡＣＣＥＬ！！≫

仮面ライダーアクセルは、右手を下ろしエンジンブレードを掴むとゆっくり腰を軽く落とし、いつもの様に敵へ宣戦布告する。

「さぁ、振り切るぜっ！？」

前進し、振り下ろすエンジンブレード。ヒットし怯んだアイスエイジを蹴り飛ばし、横なぎに振り抜き連続で切りつける。ようやくヨロヨロと後ろへ後退し、身の危険を感じたアイスエイジは自分の作り出した氷で地面を滑り逃走を図るも、バイク形態のアクセルに回り込まれ慌てる。バイク形態のままマキシマムを発動させ、炎を地面に焼き付けながらアイスエイジへ猛突進する。ライダー形態へと戻ったアクセルはアイスエイジへ背を向け、サムズダウンを見せつけるように立つ。

「絶望がお前のゴールだ！」

数瞬遅れ、激しい爆風の中から1人の男が地面に倒れ伏せた。地面に手をつくように倒れた男の手の甲からはメモリブレイクされたガイアメモリが排出され、空中で空中分解しパリンッと砕けて地面へと飛び散る。

「貴様は・・・何者だ？」

「言っただろう、俺に質問はするなと。」

エンジンブレードを引きずり、ディアブロッサへと向かう照井の後頭部を堅いナニカが襲った。

「痛っ！？」

「貴様は目上の人間への言葉使いも分からんのか！？」

「目上だと！？」

同い年か、それくらい近い年だと思い込んでいた照井には疑問符以外浮かばない。

「貴様は鳴海博士の研究の成果か？」

「鳴海博士？・・・所長と同じ名字？」

「第一に、未成年がバイクを運転するなど・・・」

「待てっ、俺は大人だっ。」

「自分の顔をよく見て言え、馬鹿者が。」

置き去りにされた車の窓を覗き込むと、若返った照井竜がそこには居た。中高校生時代の良く見知った自分の顔。照井は目を見開き絶句した。

「・・・なっ・・・・」
「まぁ、良い。」
「良くないっ！」
「貴様の力は便利だ、買ってやろう。」
「俺の話を聞け！」
「お前の名前は？」
「照井竜！」
「そうか、照井。お前、行く高校は決まってるのか？」
「俺は高校などには行かない！」
「そうか、鳴海博士に雇われたんだったな。喜べ、明日から貴様はＩＳ学園に入学が決まったぞ。」
「人の話を聞けぇえええええ！！！」
「私の名前は織斑千冬。今日の貴様は私の所有物だ。そして、明日からはＩＳ学園の所有物と成ってもらう。」
「俺は物じゃない！」
「貴様に拒否権はない。私の言葉には『はい』か『Ｙｅｓ』で答えろ。」
「断る。」

今度は照井の頭頂部を堅いナニカが襲った。出席簿の様な物だった・・・

「『はい』か『Ｙｅｓ』のどちらかを選べ、同じ事を二度も言わせるな、馬鹿者。」
「ぐぬぅ・・・はい・・・」
「貴様の家族か保護責任者は？」
「死別した。」
「そうか。家は？」
「・・・・・・無いな。」

「そうか、今日は私の家に来い。明日からはＩＳ学園の寮になるがな」
「待ってくれ、ＩＳ学園って何だ？」
「貴様、本気で言っているのか？ＩＳと言えば世界的パワードスーツ〈インフィニット・ストラトス〉だろう。」
「インフィニット・ストラトス？」
「そうだ、略して『ＩＳ』だ。そして、ＩＳは女性にしか反応しない。もし女が男と戦争すれば三日と持たない。それを危険視した何者かがガイアメモリを作り出した。ココまでは分かるな？」
「・・・凄い大変なんだな。」
「話しの感想など求めていない。それをこの街で流通させ、所持している者が無差別に街の人間、特に女性を狙うことが多い現代だ。ＩＳではドーパントの対抗にならないからな。貴様と出会えて幸運だったな、私は・・・改めて礼を言う、助かった。」
「つまり、女性にしか反応しない『ＩＳ』専門の学校に入学しろと・・・？」
「そう言うことだ。」
「だが、女だけの学校じゃないのか？」
「本当に何も知らないんだな。織斑一夏と言う男が男性初のＩＳ操縦者に成っただろう。」
「・・・織斑？」
「そうだ、私の弟だ。そして私はそこで教師をしている。」
「『ＩＳ』の為にガイアメモリが作られた世界か・・・」
「女尊男卑な世の中だ、ガイアメモリは非公認の危険物でもある。貴様の様な存在は人の希望になるし、ＩＳ学園はどの国にも所属していないし、手出しもされない安全な学校だ。」
「ある程度は理解した。だが、考える時間をくれないか？」
「半日で考えろ。コレから私はＩＳ学園に弟の制服を取りに行かねば成らん。貴様も付いてこい、任意同行だがな。」
「『はい』か『Ｙｅｓ』なのだろう？」

「覚えが早いな、お前のようなタイプは嫌いじゃないぞ。」

フッと笑いディアブロッサの方へ向かって歩き出す。

「私が運転する、後ろに乗れ。」

「待て、俺が・・・・・・はい。」

また出席簿で叩かれる可能性を考えた照井は瞬時に答えを変えた。

「良い判断だ。」

ゆっくりとバイクが走り出す。その日は長くなりそうだ、そして前の世界には戻れそうにないと理解し心が虚しくなった照井であった。

Dの乱入／強制転移とドーパント（後書き）

今回のＩＳは軽い照井竜の息抜きにしようと思います

Sとのタイマン／クラスに男は2人だけ！？

ＩＳ学園入学式当日。照井は前日に知り合った織斑千冬と言う女性の提案で殆ど無理矢理に彼女の弟、織斑一夏と同じ学園の同じクラスへと入れられてしまった。

そして今は無事に入学式も終わり、最初のショートホームルームが始まっていた・・・

「はいっ、副担任の山田真耶です。みなさん、一年間よろしくお願いしますね。」

担任の女性：山田真耶はカッカッと黒板に自分の名前は書いて見せ、自分の自己紹介を終えると次に生徒に自己紹介をするように指示する。

「えっと、じゃあ最初のＳＨＲは皆さんに自己紹介をしてもらいましょう。」

照井は緊張していた。それは”自己紹介に”ではなく、クラスメートが見渡す限り、”目の前の奴”を除き全員が女子だからであった。あらかじめ予想はしていたものの、実際に囲まれると予想を遙かに超える緊張が心を襲う。そして目の前の男子：織斑一夏が取り乱しつつも副担任の山田に声をかけられ挙動不審なまま立ち上がり自己紹介を始めるのを眉間に皺を寄せたまま観察していた。

「ーーくん・・・ーくん？　織斑一夏君」

「はっ、はいっ！」

「ひゃっ！？　あ、あの・・・お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！」

織斑と副担のやり取りを見ていた照井の感想は一言。『こんな教師で本当に大丈夫なのか？』であったが、その幻想は一分も経たないうちに壊されるのであった・・・

「でもね、あのね、自己紹介って「あ」から始まって、今「お」の織斑君なんだよね」

「いや、あの、そんなに謝らなくても・・・しますから、自己紹介しますから」

「ほ・・・本当ですか？」

「新学期早々騒々しいぞ、織斑」

「へ？」

颯爽と教室に入ってきたのは、ＩＳ学園へ照井を入れた元凶：織斑千冬であった。

「聞いているのか、織斑」

「なっ・・・んで・・・？」

「あ、織斑先生もう会議は終わられたんですか？」

「えっ！？」

「あぁ、山田君。クラスの挨拶を押しつけてすまなかったな」

自分の姉がＩＳ学園で教師をしている事を知らなかった一夏と、教えていなかった千冬の両者を見て呆れてしまった照井は頬杖をつき、窓の方を見ようとすると一つ斜め後ろの女生徒と目が合う。少し制服が大きいのか手が袖に隠れてしまっている。その状態で照井に軽く手を振る彼女を照井は第一印象で何となくノホホンとしていると感じた・・・

軽くヒキツった笑みで返して窓の方を眺める。快晴、晴天、澄み切った空には雲一つ見あたらない。青天白日とは、この事を指すのだろうと照井は無意識にそんな事を考えていた・・・

ようやく照井へと巡ってきた自己紹介。照井は無難に済ませてそのまま次の授業まで寝たふりで過ごそうと考えていた。

「照井、竜。以上・・・」

スッと席に着き、顔を伏せると背後は横で密やかに声が聞こえる。

「照井竜？聞いたこと無いわ」
「男でＩＳが使えるのって織斑君だけじゃないの？」
「テレビでは織斑君だけが世界で唯一のＩＳ操縦者って言ってたはず」
「それに千冬様の弟・・・」
「しかも織斑君って超イケメンじゃない？」
「うんうん。」
「いやぁ～でも照井君もそこそこ良くない？」
「う～ん、でも本命は織斑君だよねぇ～」
「もっとお近づきに成りたいなぁ～」
「あんた次の休み時間話しかけなよ」
「えぇ～あたし？嫌だぁ～マジ無理」

と、今時の女性らしい会話がヒソヒソと聞こえる中、照井は反論した。「五月蠅い、大きなお世話だ！ほっとけ！！第一、俺に質問をするな！！」と、心の中で・・・

クラス全員の自己紹介が終わり、ようやく休み時間に入り織斑と少々会話を交わした照井は織斑が教室を出たのを確認すると黙って机に顔を伏せジッと大人しく寝たふりで時間をやり過ごす。そして、ようやく授業開始のチャイムが鳴り響き教師が教室へ戻ってくる。

「それでは、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明を・・・あぁ、その前に再来週のクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな。」

「はぁーい！！織斑くんがいいと思います！」

「おっ、俺！？」

「ナイスアイデア！」

「でも照井君も強そうだよねぇ～」

「そっちも有りだねぇ～」

「せっかく男子が二人居るんだし！！」

「そ～ね、せっかくだもんね」

「ちょっと待った、俺はそｎ・・・」

「自薦他薦は問わない。他に候補者はいないか？このままだと二人にクジを引かせるぞ？ちなみに他薦されたものに”拒否権などない”。選ばれた以上は覚悟しろ」

「（織）い、いやでもっ」「（照）はぁ・・・」

「納得できませんわ！！」

大声を張り上げた隣人に目を向けると何とも気の強そうな女性だと、照井は正直な感想を心の中に沈めながら織斑と視線を合わせた。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？実力から行けばわたくし

がクラス代表になるのは必然です！」

正直に照井はこの手の相手はあまり得意では無かった。特にこの世界ではＩＳが復旧し女性が優遇される世の中に変わったと聞いてはいたが、ココまでとは思っていなかった。彼女の態度だと女＝偉いでも間違えでは無いように思えてくる・・・

つまり、そんな世界なのだろうと照井は改めて理解した。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、それはわたくしですわ！何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「？」

「イギリス代表候補生でもある、わたくし以上に相応しい人間はいないはずですわ。」

「入試ってあれか？ＩＳ動かして戦うやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「俺も倒したぞ、教官。」

「なっ！！あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

「えーと、落ち着けよ・・・な？」

授業中だぞぉ～っと軽く頭を冷やすようにセシリアへ呼びかけた織斑であったが、完全に熱が入ったイギリス代表候補生にはまったく通じない。

「これが落ち着いていられますか！！わざわざこんな島国にまで来たうえに極東の猿と比べられるなんて・・・このような屈辱、耐えられませんわ！！」

「イギリスだって島国だし、大してお国自慢ないだろ」

「まて織斑。『ゆりかごから墓場まで』と言う言葉くらい聞いた事があるだろう？コレは第二次世界大戦後のイギリスがどの国より早

く社会福祉政策に向けたスローガンだ。社会保障制度の充実を形容する言葉で、第二次世界大戦後にイギリス労働党の掲げたスローガンで、これが日本を含めた各国の社会福祉政策の指針となったんだ。それなりにバカには出来んと思うぞ？」

「そうなのか・・・」

「ちょっとお待ちなさいな、貴方！確か照井さんと言いましたか？何なんですの、いきなり話しに入ってきて我が祖国を褒めるかと思えば遠回しにバカにしてますの？少し歴史に詳しい程度で！？第一に貴方はＩＳが動かせるんですの！？」

「俺に質問をするなっ！！」

「～～～～っ！！！！！なんなんですの貴方達はっ！！」

ドンッと机を叩き血相を変えて声を張り上げる。

「抑えてましたが我慢の限界です、決闘ですわ。」

「良いぜ、四の五の言うよりわかりやすい。」

「抑えていたのか？・・・待て！！俺は戦うなｎ・・・」

照井が言うより早くスパンッ、スパンッ、スパンッと三つの音がテンポ良く響き、照井の頭を激痛が襲った。

「おち、つけ、馬鹿者ども。」

「いたっ」「った」「ぐぅ」

「とにかく、話はまとまったな。勝負は一週間後の月曜、放課後の第三アリーナで行う。各人用意をしておくように」

「「「はい（あぁ）！！」」」

と、ＩＳでの戦闘が決まった日の放課後、教室に織斑一夏と２人っきりで残った照井は不意にある事に気が付いた。

（俺は、ＩＳが操縦できるのだろうか？話しに寄れば女性にしかＩ

Ｓは反応しないはずでは・・・？）

「どうしたんだよ竜？」

「ん、あぁ・・・何でもない。」

「それにしても、ＩＳって良く分かんない用語が多すぎるよなぁ～とりあえず同じ男の竜を誘って勉強しようと思ったけどコレじゃ誰かに教えてもらわないと・・・」

「そうだな・・・この授業ばかりは真面目に受けるしかないな」

「何だそれ？それじゃ～まるで勉強しなくても分かるみたいじゃん？」

「あっ・・・まぁ、一応一般常識程度の勉強はな。」

「って言うか、昨日千冬姉がいきなり連れてきたけど、竜って本当にＩＳ動かせるのか？」

「正直俺にも分からない。ただ織斑千冬に強制的に入れられただけだからな・・・」

「おいおい、そんな調子でセシリアとのクラス代表決定戦大丈夫なのか？」

「あんまり質問するな、質問を答えるのは好きじゃない。」

「あぁ、ごめん。」

「だが、あのオルコットとか言う女子がどんな戦い方をするのか・・・作戦くらいは立てておかないとな。」

「そうだよなぁ～あの後ハンデ付けてやるって言ったら大笑いだったもんな。」

「それくらい下に見られているんだろ、俺たちは。」

「今時、男女平等な社会なんて辞書でしか拝めないのかもな・・・」

「そうだな、だが・・・オルコットが男を下に見ているのには何か原因があるんじゃないのか？」

「原因って？」

「さぁ～な・・・」

そこまで会話を終えると日の落ち始めた教室のドアが急に開き、2人の視線はそっちへと飛ぶ。

「よかった、2人ともまだ教室にいたんですね」
「あっ、山田先生。」
「えっとですね、寮の部屋が決まりました。」
「え？」
「織斑君は１０２５室で、照井君はそのお隣です。」

部屋の鍵をもらい、１０２５室を目指す織斑と１０２６室を目指す照井。並んで寮の廊下を歩く2人に奇異の眼差しが向けられる。

「なぁ、竜・・・」
「なんだ？」
「俺たち浮いてないか？」
「ＩＳ学園は今まで女子寮だったから男が珍しいんだろ。」
「なるほど・・・」
「本当にこの結論まで行き着かなかったのか！？」
「えっ、あぁ・・・うん。」

「どんだけ間抜けだ」と内心で突っ込みながら部屋の前まで行き着き、ドアノブに鍵を差し込み回す。先客が居るらしく既に鍵は開いていた。そして織斑と別れ、部屋へと入っていく・・・

「わぁ！！もしかして相部屋ってテルテルとなの！？」
「んっ？」

部屋着でベッドの上に転がる少女のあげた歓声の様な物に疑問符が浮かび上がり、そして大声へと変換され音になる。

「なぜ女と相部屋なんだっ！？」

そして隣の部屋でもドタバタと大きな物音、そして織斑一夏の悲鳴が響いていた・・・

ようやく照井が落ち着いた所で同室の少女から自己紹介があった。

「あたしの名前は布仏本音（のほとけほんね）。って自己紹介したの覚えてないの～？」
「すまない、覚えてない。あっ！目があったか・・・」
「あぁ～そうそう、合ったよぉ～」
「で、その着ぐるみは暖かいのか？」
「う～ん、気持ちいいよぉ～」
「答えになってないような・・・」
「えへ～テルテルは着替えないの？」
「テルテ・・・ん？」
「照井竜でしょ～？だから名字の照井からあだ名でテルテルだよ～」
「あぁ・・・なるほど・・・」

ハァと曖昧な返事を交わし、脱衣場へ向かい前日に買っておいた部屋着へと着替えハンガーへと制服を掛ける。それから、衣類の荷物をクローゼットへ収納し終えると素直な感想を述べた。

「一流ホテル顔負けだな・・・」
「ＩＳ学園は公立だからよぉ～それにＩＳ運用協定『ＩＳ操縦者育成機関について』の項を呼んでないの？」

「あぁ、まだ未読だな。昨日もある程度は”この世界”について調べたが・・・今日中にやるべき事も多いな」
「それじゃ～テルテルが別の・・・異世界？から来たみたいだね。」
「・・・そうか。」

ビートルフォンを開き、メールフォルダを確認すると左からメールの返信が来ていた。

Ｒｅ：ＩＳ
今度はどこに居るんだ、照井？
別にお前の事だから大した心配はしてないがな。
それより、ＩＳについて相棒が一晩中調べてたが手掛かり無しだったぜ？
第一に何だインフィニット・ストラトスって？
インフィニティとストライクってメモリなら検索にヒットしたらしいけど・・・
それと、少し前に大道克己って不死身のテロリストがＴ２ってメモリブレイク出来ない次世代ガイアメモリのマキシマムドライブで旧世代ガイアメモリ全部を機能停止させたんだが、そっちは問題ないか？
なんとか”この俺の活躍”で事件は解決したが風都タワーが壊されて被害の爪痕も大変なんだぜ？
まぁ、死人のお前には関係ないか・・・
っと、それはまぁ～冗談だから、早く帰ってこい。
それと、おやっさんを見かけたら連れて帰って来てくれ
風都のハードボイルド探偵、左翔太郎。

フッと笑い返信を打ち始め、すぐに送信を終わらせると布仏がビ

ートルフォンを強奪する。

「わぁ～変わったケータイだね。なんかカブトムシみたい・・・」

「あぁっ！おい、壊すなよ？」

「大丈夫、大丈夫。」

そう言いつつ形を変え、ライブモードへと変型させられたビートルフォンは飛行を開始し、窓ガラスを突き破りドーパント探しへと向かってしまった。

「・・・テルテル、怒ってる？」

「俺に質問をするな・・・」

「凄いねテルテルのケータイ、飛んでっちゃったよ。あたしのは普通に折り畳むだけだからテルテルのは最新式かな？」

布仏の苦し紛れの質問と照井のイライラの沈黙を破ったのは、部屋のノック音だった。

『竜、飯食いに行こうぜぇ～』

「大変だテルテル。呼んでるよ、行かなきゃ！！」

そう言い照井の背中を押して部屋から出された照井は織斑とも、その隣の女性とも一言も口を利かなかった・・・

Sとのタイマン／クラスに男は2人だけ！？（後書き）

タイトルの『Sとのタイマン』ですが、Sはセシリアの事ですね。
タイマンはフォーゼの「タイマンはらせてもらうぜ」からですね

MOVIE大戦の前に新フォームが早くも登場？
そしてまた映画でWが活躍する模様。
また舞台は風都なのか！？
財団Xとゾディアーツのコラボなのか！？
あっ、アンコォオオオ復活！？

Sとのタイマン／終り良ければ全て良し

翌日早朝

結局前日9時過ぎにドーパントを感知したビートルフォンは照井の下へ舞い戻り、照井を現場へ誘導し戦闘へと突入させた。さらにはピンチになると遠くへちょこまかと逃げ回るカメレオン・ドーパントとの追いかけっこで日付変更線を跨れてしまい・・・詳細まで語るなら『今日』の深夜3時過ぎまで仮面ライダーとして職務を全うしていたのである。最終的には逃げられてしまったが・・・

そして今は同日早暁6時、一般的学生なら起きていても可笑しくは無い時間帯である。特に“寮生活などの学生は”である。そして１０２６室の前では隣人：織斑一夏とそのルームメイトの篠ノ之箒の二名が一緒に朝食を食べに行こうと誘いに来ていたのである。ノックの音ですぐに目が覚めた照井は早々と制服に着替え、部屋を出る。

「おはよう竜。早かったな、呼んで2分くらいか？」
「いや、待たせてすまない織斑、篠ノ之・・・おはよう」
「あぁ、おはよう。」
「それにしても隈が凄いぞ、寝不足か？」
「あぁ・・・昨日ちょっと立て込んでて・・・ハァ～っ・・・すまない。」

欠伸を漏らし、謝罪を入れるとすぐに食堂まで歩き出した。すぐに食堂まで行き着くと、大行列の最後尾へと並ぶ。ＩＳ学園は公立学園である、その寮内の食堂にあるメニューは豊富で和洋中を注文したとしても奥が深く、各国の伝統料理なども完備してあるという。

つまり、卒業までに全オーダーを制覇するのは困難といっても過言ではないのかろう。

「凄い行列だな」

「あぁ、最初のうちは不慣れな生徒に順番が回る度に何を食うかメニューを選んでいるのだろう。並んでる内に選んでおくのが無難だな。」

「そうだな・・・それにしても朝飯でそんなに悩むか？」

「馬鹿者、一夏！良いか、女子と言うのは朝に何を食したかで一日が変わるのだ！！朝だけでは無いぞ、昼ならまだ良いが夜に高カロリーを摂取すれば次の日どうなるか！！単にご飯を食べるのではなく、良く考えた健康管理が必要なんだ。」

そこまで熱弁すると、並んだ女子の視線は自然と照井達の方へ向けられ歓声などの声が上がり、朝から食堂の熱気は凄い事になっている。もはや収拾不可能な域まで行こうとした時、食堂の入り口で織斑千冬の声が響く。

「五月蝿いぞ馬鹿者ども！！さっさと選んで食べてしまえ、残り時間が一時間切るぞ！」

「織斑君は何を食べるの？」

「えっ、俺？和食にしようかなぁ～って、箒もそうするだろ？」

「あぁ、ああ・・・そうだな、そうしよう。」

「じゃぁ、あたしも和食にする！」

「あっ、あたしも！」

「おばちゃん、和食お願いします！！」

と、織斑から聞いたメニューが次々と注文されていく。

「凄い人気だな、和食。」
「いや、凄いのは織斑だ。」
「え？」
「知らぬが仏か」

そうこうしている内に順番は照井達へと回ってきていた

「俺は洋食。トーストと目玉焼き、それからサラダにコーヒーを頼む。」
「あいよ、代表候補生とクラス代表決定戦するんだって？頑張りな、おばちゃん応援しとくから、デザートはおまけね！」
「あぁ、助かる！」

と、食堂の女性と軽い会話を交わし適当に席を取る。

「あぁ～テルテル、オリムゥ～こっちこっち」

と、不意に布仏がこちらへ手を振る。織斑は軽く手を振っているが、照井はほぼ無反応でコーヒーを啜る。

「どうしたんだよ竜、ルームメイトだろ？」
「見られている。」
「え？でもそれって俺たちが男だからだろ？」
「・・・そうか。そうだったな・・・」
「どうしたんだよ？」

そこまで会話をすると、一人の女性とが席へと歩いてきて照井の隣へ立つ。

「ねぇ、キミ達って噂のコでしょ？」
「はぁ・・・たぶん。」
「ちょっと失礼。」

そう言い、空いている照井の隣へ腰をかける。

「代表候補生のコと勝負するって聞いたけどホント？」
「はい、そうですけど」
「君たちさ・・・ＩＳの稼働時間どれくらい？」
「――・・・２０分くらい？」
「０分だ。」
「えっ！？入試は・・・？って言うか、ＩＳ動かせるの！？」
「俺に質問をするな」
「あぁ、そう・・・そのね、稼働時間に比例して上達するのは言うまでも無いから、今のままじゃ厳しいよね・・・」
「そうだな。」
「私が教えてあげよっか、ＩＳのコト」
「俺は竜と一緒ならどっちでも良いですけど・・・竜は？」
「そうだな・・・俺は・・・」
「それなら私が教えますので結構です。」
「あなたも一年でしょ？私のほうが・・・」
「私は・・・篠ノ之束の妹ですから！」
「篠ノ之って・・・えぇっ！？」
「・・・」
「そ・・・そう、それなら仕方ないわね。」
「あ、なんかスイマセン」
「篠ノ之束って・・・誰だ？」
「え？竜、ＩＳを最初に開発した人だろ？箒の姉さんだよ。」
「・・・なるほど」
「それにしても竜の勘は凄いな。」

「そうだな、野生児並みだったぞ」
「悪かったな・・・」
「それで箒、教えてくれるのかＩＳのコト？」
「そう言っている。今日の放課後、剣道場へ来い。一度腕がなまってないか見てやる」

同日放課後、剣道場にて・・・

スパンッ！と竹刀が相手の面を捉える鋭い音が響き渡る。それから面を外す篠ノ之、そして床へ倒れこむ織斑。

「おい、どうしてここまで弱くなっている？」
「中学三年間ずっと帰宅部だったからな、竹刀を握ったのも久しぶりだ。・・・で、コレＩＳと何の関係があるんだ？」
「――なおす・・・」
「ん？」
「鍛えなおす！これから毎日放課後三時間、私が稽古をつけてやる！！」
「は？いや、俺はＩＳの事を教えてほしいって頼んだんだが・・・」
「それ以前の問題だっ！！だいたい悔しくないのか、ＩＳならまだしも剣道で男が女に負けるなど」
「そりゃまあ、カッコ悪いとは思うが・・・」
「なら明日から特訓だ！！いいな！！」

そのまま剣道場えお出て行ってしまう篠ノ之・・・

「あっ、おい！！竜の稽古は・・・」
「お前が基礎を教えてやりながらお前自身もう一度基礎からやり直

せ！！」
「はぁ・・・やるか、竜？」
「ああ、そうだな。基礎は要らん、本気で打ち込んで来い！！」
「何だよ、竜も剣道出来るのか？」
「多少、だがな・・・」

面を付け、スッと立ち上がり互いに中段で構え一足一刀の間まで歩み寄る。先に仕掛けたのは織斑一夏の方だった。瞬時に照井の喉下まで剣先を進め、一気に面を打ち取ろうとした一振り。照井は半歩ほど後退し、面を竹刀で軽く弾くと、素早い切り返し胴で織斑の真横を通過し振り返る。

「なっ・・・」
「どうした織斑？」
「竜、多少練習した強さじゃないだろ！？」
「いや、本当に剣道は久しぶりだ。ココ最近はやってないと思うが・・・なんだ、実戦経験のせいかな？」
「実戦経験！？・・・こっちは三年以上御無沙汰なんだ！！」
「そうだったな・・・打ち込み稽古に変えるか。」

そう言い、基礎の素振り、技の打ち込み、休憩など最初は軽いメニューと体力作りから始める。

「フゥ～今日はもう終わろうぜ竜、もう七時過ぎてるしさ・・・」
「そうだな・・・」

ゆっくりと面や胴を脱ぎ、片付け始める。タオルで汗を拭きながら元の位置まで防具を直しに行くと、ビートルフォンがライブモードで照井を呼んでいた。それに気が付いた照井は一息吐く間も無く飛び出していく・・・

「おい竜、どこ行くんだよ！！」
「悪いトイレだ！！先に寮内へ戻っていてくれ！！」

全力疾走で第一駐車場に停めてあるディアブロッサへ跨り、エンジンを吹かす。ヘルメットを被り制服のまま急速発進する。駐車場を通り抜ける途中で副担任の山田が通り掛かるのを間一髪で交わし、ビートルフォンを追いかける。

「えっ・・・あぁ！！君、照井君！？無免許運転はいけませんよ！！」

と、轢かれそうになったと言うのに既に跡形も無く走りさったバイクへ注意する。

翌日昼休み

昨日の無免許運転の事で山田に職員室へ呼び出された照井は、織斑千冬と三人で職員室の隅を貸切り状態で話す。呼び出すなり一言目が、「昨日はあんなに慌ててどこに行ってたの？」に始まり、織

斑教官に間違いを指摘された二言目に「あそこで当たってたら大変でしたよ？」と来て、照井は額に手を当て溜息を漏らしてしまう。

「照井君、聞いてるんですか？」
「えぇ・・・まあ・・・はい。」
「それで照井、倒せたのか？」
「はい、前日に何度か追い掛けていたのですが姿を消されて逃げられ、昨日ようやくメモリブレイクしました。」
「そうか・・・」
「あの・・・織斑先生、何の話ですか？」
「いや、山田先生はただ照井が無免許運転ではないとだけ思って頂ければ結構です。それから、この後照井がＩＳを起動出来るか確認してきてください。私は政府に申請していた彼らの専用機のチェックに行ってきます。」
「あのぉ～・・・照井君てＩＳ起動できるか分かんないんですか？」
「あぁ・・・言って無かったですね、私にもわかりません。」
「どうして織斑先生はいつもそんな無茶苦茶するんですか！？」
「まぁ、大丈夫でしょう。例えＩＳが使えなかったとしてもコイツにはそれなりの価値があります。私のお墨付きですよ。」
「織斑先生がそこまで買っているのならもう何も言いません。私は教師として生徒は皆平等に接しますが、どうなっても知りませんからね？」
「あぁ、ありがとう。」
「じゃ、照井君付いて来て下さい。」

そう言い、職員室を出るとＩＳ格納庫まで移動し真っ暗な倉庫の電気を点ける。量産型と思えるＩＳが大量に、色に別れ綺麗に並べられている。正確には綺麗に整備し搬入されている、と言うべきかも知れない。

「それでは照井君、どれでも良いから触って起動させてみてください。別に出来なくても良いですから」
「ああ、了解しました。」

ペタッと二種類ある内の、どちらかと言えば黄色い様なイメージの方を触ると、勝手に脳内へ膨大な量の情報が流れ込んでくる。

「これが・・・ＩＳなのか？分かる、脳内へイメージが流れ込んでくる・・・」
「・・・凄い・・・おめでとうございます照井君！君が男性で史上二人目のＩＳ起動者です！！」
「そうか・・・」
「あんまり驚いてないですね・・・？」
「まぁ、成る様になったってだけだから・・・」
「照井君はラファール・リヴァイヴを選んだんですね。」
「名前があるんですか？」
「それは、まあ当然ありますよ。ラファール・リヴァイヴと打鉄です。ちなみに二人には政府から専用ＩＳが来る手筈に成ってますが。あっ、織斑先生に電話しないと！！」

無事にＩＳの起動に成功した照井は絶対にクラス代表決定戦から逃げられなくなってしまった。

約一週間後、クラス代表決定戦当日。

第三アリーナは既に見物客で溢れ返り、三人の試合は学園内でも中継される事が決まり学園内全体がお祭り騒ぎである。照井や織斑

が通る度に女子生徒は歓喜の声や声援で大変な事に成っている。

「竜・・・なんかさ、ギャラリーいっぱい居るし、緊張してきたんだけど・・・」
「そうだな・・・少なくともお前は負けられないな。」
「なんで俺だけなんだよ！？」
「俺は未だにＩＳを使ったことが無い、起動させただけだ。だけどお前は入試で教官を倒したんだ、言わばヒーローの様なものだろ？」
「えぇ～・・・」

「あっ、いました！！」

「山田先生」

慌てたように急いで走ってくる山田と、その後ろからゆっくりと歩いてくる織斑千冬。

「どうしたんですか、そんなに慌てて」
「あのですねっ、来ましたっ・・・二人の専用ＩＳ」
「へ？」
「なんだ、織斑は聞いてなかったのか？」
「ピットに搬入してあります、時間がありません急いで！！」
「アリーナを使用できる時間は限られている、ぶっつけ本番でものにしろ！」

ピットへ入ると、剥き出しの真っ白なＩＳが待機状態のままで二機置いてある。二人がそれに触れようとすると「待てっ！」と呼び

止められる。

「先にくじを引け。試合は平等に成る様にくじで戦う順番を決める。」

「じゃぁ、俺から・・・青だ。」

「・・・赤だ。」

「なら、残る黄色がオルコットか・・・では、戦う順番だが・・・第一試合が、照井ＶＳオルコット、第二試合：照井ＶＳ織斑、第三試合：オルコットＶＳ織斑だ。待機の者はピットから絶対に動くな。」

「オルコットには伝えてあるのか？」

「当たり前だ。それじゃ、名前が有るだろう？『紅蓮』を照井が、『白式』を織斑が使え。」

「「はい（ああ）！！」」

ゆっくりと紅蓮に触れ起動させる。だが、紅蓮とは名ばかりで真っ白で白式との相違点を見つけるのは困難な様にも思える。

「背中を預けるようにしろ・・・ああ、そうだ。あとはシステムが最適化してくれる。ハイパーセンサーは問題なく動いているな。照井、気分は悪くないか？」

「あぁ、問題ない・・・よし、行ける」

「竜・・・負けるなよ？」

「俺に質問を・・・」

「するな、か・・・？」

「ああ、そうだ！」

“重い足”をゆっくり一歩づつ踏み出し1分ほど掛けてピットから飛び出し、落ちて地面へ衝突する。観客席からは笑いが溢れてし

まっている・・・

『何をしている、照井！！』
「無線？・・・足が重くて思う様に動けないんだ！」
『スラスターを使え、馬鹿者！』
「スラスター・・・付いてないぞ！？」
『何！？仕方ない一先ず試合を延期に・・・』
「いや大丈夫だ、続ける。」
『空を飛べないのに空中に居る奴とどうやって戦うつもりだ！？』
「何とかする、だから問題ない。」
『・・・よし、やるだけの事はやってみろ』
『話は纏りましたか、照井さん？よくもまぁ、飛べないＩＳでわたくしの前に立てましたわね。その度胸だけは誉めて差し上げますわ。ですが、手加減は・・・』
「前フリは良い、さっさと来い。」
『お望み通りに、撃抜いて差し上げますわ！！』

軽い手招けで挑発すると、うまく食いついてくるオルコット。ジャキッと手にした大型武装のスナイパーライフルを照井へ向けると、紅蓮からロックオン警告と敵ＩＳの情報がミモニターへ表示される。なんとか避けようと走りだした瞬間に照井の胸部が狙撃される。煙が立ち込める中、照井はモニターに表示されたシールドエネルギーの残量を見る。

〈残り残量：３５０〉

『なっ、スターライトＭｋ？の砲撃を直撃して５０しか削れてませんの！？なんて常識知らずな装甲・・・まぁそれでも、元のシール

ドエネルギーは４００ですいし、わたくしに自立機動兵器（ブルー・ティアーズ）の前ではそんな桁外れの防御力も無力ですわ』

「紅蓮の武装を表示。」

瞬時にモニターへ武器一覧が表示される。

〈・刀：一本
・ワイヤーブレード：二本
・単一仕様能力：無し
・後付武装：無し
〉

仕方が無いので刀を呼び出し、スッと構える。

『遠距離装備のわたくし相手に飛べない貴方が刀なんて笑止ですわ！！行きなさい、わたくしに自立機動兵器（ブルー・ティアーズ）！！』

四機の小さなビットが現れ、照井の周囲を飛行し一斉掃射開始する。出された刀で何とか弾道をそらし、被弾数を極力減らすもジワジワと毒の様にエネルギーを蝕んでいく・・・

〈Ｗａｒｎｉｎｇ　Ｗａｒｎｉｎｇ！！シールドエネルギー減少中・・・〉

「くぅっ！！」

確実にエネルギー残量を削り取られ、残りも乏しくなっていく。

『さて、この辺でフィナーレですわ！！』

スターライトＭｋ？の二度目の砲撃が紅蓮の装甲を焦がし、再び煙が上がり観客席が騒がしくなってくる・・・煙の中でポォッと赤

く発光するナニカに視線が集まり、セシリア・オルコットもそれに気を取られる。なんとも暖かそうな、そして熱そうな色は煙が風に流されると共に鮮明にその正体を明かしていく・・・

〈初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）が終了しました。フォトンブラッド、装甲及び装備に正常動作中・・・確認ボタンを押してください。〉

照井が確認ボタンを押し終わると続けて別の情報がモニターへと表示され、紅蓮の白かった装甲は徐々に深紅に染まっていく・・・

〈はじめまして、照井竜（マスター）。一部装備武装の変更及び新規能力の情報が追加されました。〉

「エンジンブレードだと・・・？それと、ホイールスピナー？」

『たかが初期化が終わった程度で騒ぎすぎですわ！！』

そう言い、３度目の砲撃が来る瞬間に紅蓮の足底の新規武装：ホイールスピナーが急速稼働し一瞬にして超加速する。何度か教室に残り織斑と勉強したＩＳの知識が役に立つ時が来たのである。

『瞬時・・・加速（イグニッション・・・ブースト）！？そんな馬鹿げたスピードが素人に出せますの！？』

高速で前方へ駆け抜け、ハイパーセンサーがギリギリ追い付く程のスピードで走り出す。

『ですが、囲んでしまえばこちらの物ですわ！！』

自立機動兵器（ブルー・ティアーズ）で紅蓮の周囲を囲んでしまい、一斉掃射しようとした瞬間に仮面ライダーアクセルとしての経験を活かした連続クイッ

クターンと、紅蓮のホイールスピナーを駆使したコンボで斬り付け様にすり抜けていく。普通のＩＳには少々難しい、より立体的な動き。瞬時加速（イグニッション・ブースタ）と急速方向転換（クイックターン）の流れる様な動きで相手を翻弄する。

最初は暇そうに見ていた観客も今では照井の動きを追うので精一杯であり、全員が照井を心のどこかで応援していた。

ビット四機全てを撃墜し、手の甲からワイヤーブレードを射出した照井はセシリアの脚部へ絡めて引張り、その反動で跳躍する。

『あら照井さん、レディー相手に失礼過ぎませんこと？』

「ん？」

『自立機動兵器（ブルー・ティアーズ）は六機でしてよ！！』

セシリアの腰に付いていた残りの二つからミサイルが発射させられる。誰もが命中したと思った瞬間、ミサイルさえも踏み台に変えて更に跳躍する。エンジンブレードを直し、アクセルグランツァーの構えへと入り、単一使用能力が開化する。

〈ＭＡＸＩＭＵＮ　ＤＲＩＶＥ：ＢＲＡＫＥ　ＭＯＤＥ！！〉

『っ！？』

全員が照井の最初の一撃が入ることを確信した時、ピット中に試合終了の鐘が響いた。

『どう言う事ですの？』

＜照井竜の試合放棄と見なし、勝者：セシリア・オルコット！！＞

「「「「えぇ～～～っ！！！！！」」」」

観客席からは驚きの声が溢れ返り、教師陣も事態の収拾に慌てていた。その最中、プライベートチャンネルで照井竜は織斑千冬と会話をしていた。

『ドーパントか？』

「ああ、今すぐ行って来る！！」

『ＩＳを待機状態にしろ、アクセサリー状に成って常にお前の体に密着しているはずだ。まあ、詳しい話は帰ってきてからだな』

「了解。」

ＩＳを待機状態へ変え、青いジャケットを羽織りながら急いで駐車場へと向かう・・・

結局、ドーパントには逃げられてしまい、渋々ＩＳ学園へ戻ったのが夕方過ぎの事。晩御飯を食べようと食堂へ向かった照井は今日のクラス代表決定戦の話題で持ち切りの中、一人で飯を食べていると不意に声が掛けられる。

「ん？」

「ちょっと宜しくて？照井竜、良くもわたくしに恥をかかせてくれましたわね！？」

声の主はセシリア・オルコットだった。今日の試合の結果を納得出来ないと言った表情である。

「お前が勝ったんだ、別に問題ないだろう？」

味噌汁を啜り、箸を置く照井。そこへバンッと机を叩き、猛反論するセシリア。

「なんであそこで棄権したんですの！？あなたＩＳの単一使用能力（ワンオフ・アビリティー）に付いて先生に聞きましたわ。」

「俺は聞いていない。」

「なら教えて差し上げますわ！あなたの紅蓮は異常なまでに装甲が多くて厚い、理由はエネルギーが無くなると被弾ポイントが一番低い部分を消費してシールドエネルギーへ変換するから。そしてもう一つ、単一仕様能力：マキシマムドライブと言うバイアー無効化攻撃への足掛かりですわ！！」

「バリアー無効化・・・？」

「自分のシールドエネルギーを消費して相手に直接ダメージを与える諸刃の剣とか言う能力ですわ！あの一撃が入っていれば、わたくしが負けてても可笑しくなかったはずですわ！！」

「仕方ないだろう、腹痛だったんだ。」

「この期に及んでまだそんな言い訳を！？」

「仕方ないだろ？」

「再戦を要求しますわ！！」

「その内な・・・」

再度箸を持ち、残されたご飯を食べ始める。

「結局勝敗はどうなったんだ？」
「あなたの全敗に決まっているでしょう！！そして織斑さんが一勝で、わたくしが二勝です！！」
「良かったじゃないか、クラス代表おめでとう。」
「絶対バカにしてますわね・・・」
「ご馳走様でした。」
「あなた最低ですわ！人をココまで馬鹿にするなんて・・・わたくしをそんなに侮辱したいんですの！？」

食べ終わったお盆を持ち、食器を返しに行く照井を睨み付けながらセシリアはどこかへ走り去ってしまう。照井としては迷惑な話であるが、誤解を解くのも面倒臭かったので放置という結末に成ってしまった。

それから数時間後、自室へ戻りシャワーを浴びて今日に一戦を思い出す照井。初めてＩＳを動かして戦った緊張感をジワジワと思い出す・・・

「ねぇ～テルテル、ケータイがブルブル震えてるよ？」

布仏の一言でケータイへ視線をずらし、ライブモードへと切り替えると窓の隙間から飛び出していく・・・それを追う様にジャケットを乱暴に取り走り出す。

「テルテルどこ行くの！？」
「俺に質問をするな！！」

そう言い残し、寮の廊下を走りながら窓へと視線をずらすとビー

トルフォンが飛行している。それに並走するように階段を駆け下りて学園を飛び出す。第一駐車場でディアブロッサに跨り、エンジンを吹かすとすぐに走り出す・・・

「ＩＳ学園の敷地内から出ないのか？まさか、学園内にドーパント！？」

その疑問を肯定する様にビートルフォンは飛び回る。そのまま走り続けると、まったく人気の無い薄暗い第三駐車場へと行き着く。そして、ディアブロッサが照らす光の先に夕方逃がしてしまったドーパントがいた。そのドーパントの近くにはＩＳを展開した少女が倒れている・・・

間髪入れずにディアブロッサをドーパントへ向けて突進させ、その隙に少女の下へと駆け寄る照井。

「大丈夫か！？」
「照井・・・さん？」
「オルコット！？」
「なんで、ココに・・・？」
「今は質問するな、すぐに終らせる。」
「終らせるだと！？お前が俺に勝つつもりか、アァッ！？」
「黙れ」
≪ＡＣＣＥＬ！！≫
「ガイアメモリィ！？」
「何で・・・貴方が・・・」
「変・・・身っ！！」
≪ＡＣＣＥＬ！！≫
「お前はさっきの・・・！！」

エンジン音が猛々しく駐車場中に響き渡り、アクセルのフェイスフラッシャーが青く発光する。ベルトを中心に溢れんばかりのエネルギーがアクセルの体中を駆け巡り、セシリアを傷付けた怒りが仮面ライダーアクセルの力の原動力になる。

「お前をあの時倒しておけば、加減してメモリを砕かなかったのが失敗だったな・・・」

「なにっ！？」

「良い所なんだから邪魔するんじゃ・・・ねぇ～よっ！！！」

ドーパントの腕が鉛色に変わり、手の甲から鉤爪が現れる。エンジンブレードを持った照井は怯む事無くドーパントへと斬りかかるも致命傷は与えられず、微妙な所で放った大振りが外れたアクセルは厚い胸部の装甲を切り裂かれてしまう。火花が散り、怯んだアクセルの腹部を蹴り飛ばしたドーパントはアクセルの首を掴み、置かれていた車へ放り投げる。車へ激しく衝突しボンネットに埋まったアクセルは変身を強制解除され、照井は生身の人間へ戻ってしまった・・・

「セシリア、お前のナイト様はだらしないな。お前は本当に疫病神だよ。お前の家族も友人も、お前に関わった人間は全て死んでいくのだから。」

「えっ・・・？」

「両親が死んだ、次はあの男、そしてセシリアお前自身だ。」

「なにを・・・言ってますの？」

「姉さんが死ねば莫大な遺産が手に入ると思って、義兄と一緒に彼の世へ送ったの言うのに面倒なガキ一人残しやがって・・・」

「あなた・・・まさか！？」

「はい、ご名答、良く出来ましたぁ～セシリア、君の唯一の叔父さんですよ。」

「なんで叔父様が、こんな・・・」
「酷い事を？遺産の為だってんだろバカか、オメェは！？越境横転事故も俺がやったよ、１００人くらい死んだか？まぁ、お前の両親が巻き込んだ犠牲だわな」
「そんな・・・」
「続きまして君のナイト様ぁ～。最後がお前で、オルコット家の姉貴が残した遺産は全て俺のもんだぁ～～～っ！！！！」
「そんな・・・せっかく、ココまで頑張ったのに・・・」
「うんうん、セシリア頑張ったもんな。叔父さんも話はある程度聞いたよ、だから助けに成るとまで言ったのにお前は私の行為を無にした！！だからずぅ～と、この時を待っていたんだ。」
「・・・・・・」
「さぁ、セシリア家族に会いに行けるよ？」
「・・・・・・待てよ・・・」

ボンネットから必死に這い出た照井はボロボロの体で立ち上がり、フラフラの状態でも構わずにエンジンブレードを握り締めていた・・・

「人の命を・・・なんだと思ってんだ・・・？」
「まだ生きていたのか・・・ハァ～・・・」
「人の命を何だと思ってんだ！！」
「金で買えない命はない、金が全てだろう？」
「黙れクソ野郎。その子から・・・セシリアから離れろっ！！！」

全力で円を書く様に一回転し、遠心力を使いエンジンブレードをドーパントへと投げつけた。肩をかすめたエンジンブレードは地面にドスッと突き刺さり止る。せっかくドーパントは照井の存在を忘れ掛けていたのに、自分から敵の目の前に立ち塞がった照井に共感できないセシリアはこれ以上の犠牲を出させない為にドーパントの

足へ必死にしがみ付き、照井へ呼びかけた。

「照井さん、なんで・・・どうして、わたくしなんかの為にそこまで傷付くんですか！？もう良いんです・・・わたくしなんかの為に、そんなにボロボロに成ってまで戦わないでください！わたくしが死ねば、それで全て終るんですから」

涙で頬が濡れて、それでも必死に作り笑いをするセシリア。それを見た照井は少し冷静に自分の今までの行動を思い出し、それから最大限の見栄を張る様にカラカラの喉から必死で明るい声を搾り出した。

「なぁ～オルコット、俺がこんな下衆な奴に負けると思うか？」
「何だとっ！？」
「俺が・・・こんな最低な野郎に殺されると思っているのか？」
「えっ・・・？」
「なぁ、答えろよオルコット。お前はどうしたい・・・？お前はどうなりたいんだ・・・？」
「黙れ死に底無い、貴様から先に殺すぞ！！」
「テメェ～は黙ってろ、俺はセシリア・オルコットと喋っているんだ！！」
「なに・・・貴様あぁ～っ！？」

照井の態度に我慢の限界を迎えたドーパントは、足にシガミツいたセシリアの腕を振り払い、鉤爪を照井に向けたまま猛突進する。

「・・・けて・・・助けてください、照井さん！！」
「ああ、任せろ。」
「何っ！？」

突進してきたドーパントの腕を瞬時に掴んだ照井。鉤爪はギリギリ照井の喉元で止まっている。微かに腕が震えているだけで鉤爪がそれより先へ動く気配が無い。

「なんだ、大した事無いなお前。」

「動かない・・・だと！？なぜだ、なぜ生身のお前にココまでの力がっ！？」

≪ＡＣＣＥＬ！！≫

「簡単なことだ、俺とお前じゃガイアメモリを持つ覚悟が違う。」

≪ＡＣＣＥＬ！！≫

もう一度変身しドーパントを蹴り飛ばすアクセル。今度はドーパントが車へと激突し、ゆっくりと立ち上がる。それを見て、ゆっくりとアクセルメモリを引き抜きセシリアへと預ける。

「悪いが終るまで少しの合間だけで良い、持っててくれ。すぐに終るから・・・」

「えっ？」

≪ＴＲＩＡＬ！！≫

「全て、振り切るぜ。」

マキシマムモードだったトライアルメモリをスッと取り出し、片手で一振りする。瞬時にメモリモードへ変形したトライアルメモリへとメモリチェンジし、スリーカウントが流れると赤から黄、そして青へアクセル・トライアルへと進化する。赤く分厚い装甲は吹き飛ばされ、同時に熱風と烈風、そして疾風が吹き荒れ、その状況で立っていられるのはアクセルだけであった。それから高速でドーパントへ接近し連続蹴りで鉤爪を削ぎ落とす。

「ぐぁあああっ、爪が・・・俺の爪がっ！！！！」

≪ＴＲＩＡＬ！！≫
「こいつで一気に決める！！」

メモリを引き抜くと、マキシマムモードへと変えマキシマムスイッチを押すと、トライカウンターが０，１秒から刻み始める。それを素早く放り投げ、敵へ初弾の回し蹴りを打ち込んだ。その後は高速蹴脚術を連続多段ヒットさせ続け、遂には音速の壁を突破する・・・

「フン、ハァッ、タァッ！！」

音速を超え、既に風を切る音も異常な物に変わり『ギュルッ』と不思議な音が響く。そして連続して蹴り続けたドーパントの体一杯には青白い痣がユラユラと、ジリジリと現れ、大きなＴと言う文字が刻み込まれていく・・・最後の一撃を叩き込み、クイックターンで落ちてくるトライアルメモリを受け止めてマキシマムスイッチを再度押す。

≪ＴＲＩＡＬ　ＭＡＸＩＭＵＭ　ＧＲＩＶＥ！！≫
「９，８秒それが、お前の絶望までのタイムだ！！」

背後では小爆発が起き、男が倒れ伏せるバタッという音に体からガイアメモリが排出され、地面へ転がる音がカツーンと響く。それでも往生際が悪くメモリスイッチを押し、ガイアウィスパーを鳴らす男・・・

≪ＧＲＥＥＤ！！≫
「まだだ、まだ終わりじゃない！！」
「嫌、終わりだ。貴様のメモリは既にメモリブレイク済みだ、大人しく監獄にでも行くんだな！」

≪ＧＲＥＥＤ！！・・・Ｇｒｅｅｄ！・・・ｇｒｅｅｄ・・・≫

段々と音は小さくなり、最終的にガイアメモリはパリッと砕けてしまう・・・

「グリード、【強欲】か・・・まさに・・・その通りだな。」

「照井さん！？」

「大丈夫だ、問題ない・・・」

ガクッと片膝を地面に着けながらも気丈に振舞う照井。だが、それから間も無くして地面へ倒れてしまった・・・

翌日放課後

保健室で目を覚ました照井はベッドの上で昨日と同じ格好のまま眠っていた。医師の診断によると、怪我は全治１週間程度の軽い打撲だけだという。それよりも倒れた原因は過度のストレスと睡眠不足による心身の疲労から来たものだという。それから医師が保健室から出て行くと、入れ替わりでセシリア・オルコットが入ってきた。

「“竜さん”その・・・まだお体は痛みますか？」

「嫌、今のところは大丈夫だ。」

「そうですか、それならクラス代表就任パーティーに行きませんこと？」

「パーティー？」

「やはり、わたくしとでは不服でしょうか？」

「いや、そんなことは無い。おめでとう」

「あら、何か勘違いされてますわよ？」
「えっ？」
「クラス代表は一夏さんですわ。」
「織斑が・・・クラス代表？」
「はい、わたくしとの戦闘を棄権なさったのはドーパントを倒しに行ったからだと織斑先生に聞きまして」
「そう言えば、あいつは！？」
「無事、我が祖国へ連行されて今頃終身刑ですわっ。」
「そうか・・・それにしても被害が凄そうだな、駐車場・・・」
「駐車場自体は大した破損ではありませんわ。大破した車の修理はわたくしが受け持ちましたし」
「良かったのか・・・？」
「両親が死んで3年、残された財産を守るために様々な勉強を学びＩＳ学園へ入学して・・・竜さんに出会えて本当に良かったですわ。」
「いや、その良かったじゃなくてだな・・・」

「まぁ、良いか」と心で納得しスッと手を伸ばして、セシリアの頭を撫でると少し恥かしそうに頬を膨らませる。

「れ、レディーの頭を撫でるなんてマナーが成ってないです・・・わ・・・」
「あぁ、すまない」

ホロッと涙が溢れ出すセシリアを見ていると、どんなに大人びて見えても年相応の女の子なのだと確信し、心の隅でフッと笑う照井。そして、ゆっくりと涙を拭いながらセシリアは喋りだした。

「その、まだまだ迷惑を掛けるかも知れませんが・・・竜さんさえ

良ければですが、お友達に成って差し上げても宜しくてよ！」
「あぁ、そうだな・・・よろしくな、オルコット」
「それから、親しい友人は『セシリア』と呼びますわ、竜さん。」
「そうか、だがオルコットはオルコットだ。」
「そんな意地悪ですわ。」

頬を膨らませるセシリアを軽くツツき、ゆっくりと立ち上がる。そして、ようやく気が付いた。保健室のドアが小さく開かれ布仏が覗いていた。

「セシリーが抜け駆けしてる・・・」
「の、布仏さん！？何を言ってますの、病人を気遣うのは最低限のマナーですわ。それより貴女こそ何時から・・・」
「ルームメイトを心配して来たんだよぉ～テルテル大丈夫？」
「あぁ、大丈夫だ。」
「何があったの？」
「・・・階段から転んで気絶した」
「わぁ～ダイナミックテルテルだ！！」

なんじゃそりゃ？と内心で突っ込みを入れた照井は二人に手を引っ張られながら、織斑一夏のクラス代表就任パーティーの会場へと強制連行されて行った・・・

Sとのタイマン／終り良ければ全て良し（後書き）

一万二千字です

今回は読むほうがダルイはず！

書くほうも疲れましたｗｗ

セシリア可愛いわぁ～

就任パーティーは一話完結の短編にします。

次は鈴が登場・・・するのか？

以上、一度書いたのにフリーズして０からやり直した『Ｓとのタイマン』後編でしたぁ～

コメント、総合評価、お気に入り登録お願いします。

そんなこんなでＩＳ学園にも慣れはじめ・・・？

午後7時を過ぎた頃。既に日は沈み1年1組の生徒は寮内にある一年用の娯楽室を貸し切り、織斑一夏のクラス代表就任パーティーを始めていた。その中に少々遅れて照井が入っていくと、皆口々に「大丈夫なの照井君？」と言う。適当に相づちを打ち、織斑の隣へ腰を下ろす。

「体は大丈夫なのか、竜？」

「ああ問題ない。」

「気付いてやれなくてゴメンな、過労やストレスで大変だったんだろ？」

「そうらしい、だが無駄な気遣いは不要だ」

「そんな事言うなよ、俺も力になれるよう頑張るから」

「・・・そうだな、今度からはもう少し気をつける。」

「もっと頼ってくれよ、折角の男同士なんだから」

「あっ、いたいた織斑く～ん」

「ん？」

見慣れない女生徒が二人の腰掛けたソファーへ向かって走ってくる。そして、織斑の前で立ち止まり名刺を差し出す。

「話題の新入生のインタビューに来ました！新聞部副部長、二年の黛薫子（まゆずみかおるこ）です。はい、これ名刺！よろしくね～」

「人気者だな、織斑」

「そう見えるか？」

「ああ、そう見える。」

照井が大きく頷き肯定すると、織斑はウナダレて溜息を一つこぼした。それから、織斑が手を引っ張られ隅へ連れて行かれ、織斑はとっさに照井の手を掴む。「おっ、気が利くね織斑君」と言った黛はそのままメモ帳を取り出し始める。

「そう嫌そうにするな、お前は少々誤解しているぞ。」
「えっ？」
「クラス一丸になってお前を応援してくれてるんだから、その想いに答えて見せろ。誰にも知られずに影で戦ってる奴だって居るんだから・・・」
「お話中ゴメンねぇ～、ずばりクラス代表になった感想とか聞かせてくれるかな？」
「まぁ・・・なんというか頑張ります。」
「え～それだけ～？もっといいコメント頂戴よ～俺に触るとヤケドするぜ！とか！」
「自分・・・不器用ですから・・・」
「うわ！前時代的～！」
「織斑・・・読者はもっとこう、お前に格好良い決めセリフを期待してると思うぞ？」
「ダメかな？」
「ダメだろ。ココは「ただしその頃には、アンタは八つ裂きに成ってるぜ！？」位の見栄は張っておくのが得策だろ。」
「そうだね、まぁ～そこは適当に捏造するからいいとして・・・照井君も一言いただけるかな？」

捏造するのかよ！！と内心で突っ込んだ二人、そして照井へ好奇の目が向けられる。

「俺に質問をするな。」

「えぇ～竜はそれかよ」
「あらあら竜さん、折角ですからアレになさったらどうかしら？」
「ん？・・・アレ？」
「ドーパントを倒した時の決めセリフですわ！！」

周りがシーンと静まり返り、ドーパントを倒したと言うワードにヒソヒソ話が始まり黛もメモ帳へ書き込み始める。

「・・・オルコット、何を言ってるんだ？」
「はい？」
「俺がいつドーパントを倒したんだ・・・！？」

ソっと語尾を強めて作り笑いを見せると、セシリアは「あっ・・・」とようやく気が付く。仮面ライダーは必要最低限で他言無用。最近ようやく新聞メディアなどの各種ニュースで都市伝説の様に噂で語られ始めた程度であり、ＩＳ学園などと言う話は一切出てきていない。それは照井竜の名前と素顔も同様である。

「なぁ～んて、冗談ですわ。」
「だろぉ～オルコット。変な冗談で周りを驚かせるなよ？」

そこまで誤魔化すと「だよねぇ～」と笑いが起き、一瞬で周りの空気は緩くなる。

「チッ、嘘かよ。」

ビリビリとページを破り、ゴミ箱へ投げ捨てる。

「そうだな、改めて決めセリフを『振り切るぜ！』で良いか？」
「うん、オッケー折角だし、セシリアちゃんもコメント頂戴～！」

「わ・・・私ですか？こういうことはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね・・・まず、どうして私がクラス代表を辞退したかというと・・・」
「ああ、長くなりそうだからやっぱいいや。「織斑君に惚れたから」とかそんな理由にしとくよ」
「なっ、なっ、何を・・・！」
「オルコットは織斑が好みなのか、覚えておこう。」
「何を馬鹿なことを・・・」
「え～そうかな～？」
「そうですわ、別に一夏さんなんて・・・！」
「あれ、なんでセシリアは怒ってるんだ？」
「そうだな、俺には分からない。」

結局セシリアがクラス代表を辞退した理由。『照井竜の勝利は譲られた。戦わずして負けを認めるなど考えられない、野心のカケラも感じられない。勝利を放棄した男、照井竜。それは勘違いで、実際は己の生死を賭けてまで他人を助けに言っていたのだ。知らなかったとは言え、疲れ果てていた彼の休息の時間を裂き、本人の目の前で悪態を吐いてしまった。それからすぐに命の危機にさらされた私を・・・言い過ぎて、嫌われてもおかしくなかった私を、ボロボロに傷付きながらも守り戦ってくれた彼に惚れてしまった。自分の行動を恥じてクラス代表を照井へと譲ろうとしたが、ドクターストップがかかりＩＳ戦で”全敗の照井”から”一勝している”織斑へ権利が回った。』と、言うのが数日前の結末であり、セシリアの結論。恥ずかしさと秘密厳守のため誰にも告げることが出来ない想いがセシリアの中でグルグルと回っていた・・・

「じゃあ、質問はそんな感じで・・・最後に三人の写真撮らせてよ、注目の専用機持ち同士でさ！握手は難しいから・・・肩なんか組んでるといいかも！」

「えっ！？」

乱暴に照井の腕をセシリアの肩へ回す。それから織斑の腕を回させて、写真を構える。

「オルコット、寄りすぎてないか・・・？」
「そうですか、良いじゃないですか。」
「はぁ～い、それじゃ3、2、1・・・」
「「「イェェ～イ！！！」」」

シャッターと共に娯楽室に居た生徒全員が割り込み、結局クラス写真に成ってしまった。

「え？」
「ん？」
「ちょ・・・ちょっと！あなたたちねえ！」
「まーまーまー、セシリアだけ抜け駆けで両手に花なんて無しでしょ～」
「クラスの想い出になっていいじゃん♪」
「う・・・ぐ・・・」
「まあ、これはこれで良い絵が撮れたよ。ありがと、織斑君、照井君！」
「先輩、これって焼き増しして貰えるんですか？」
「もちろんだよ～」
「えーそれならもっと可愛い服着ておけば良かった！」
「あたしなんか目つぶっちゃった～」
「はは・・・」
「みんな楽しそうだったな。」

生徒が娯楽室から出て行くのを見て、照井と織斑も娯楽室を抜け

て自室へ戻り出す。不意にビートルフォンに着信が入り、織斑と分かれて確認する。電話帳の中には無い着信番号が表示される。正確には存在するかも分からない着信番号なので一瞬出るのに戸惑いつつも、ゆっくし通話ボタンを押して、電話をとる。

『初めまして、照井竜。いや、仮面ライダーと呼ぶべきかしら？』
「この声、シュラウドなのか！？何が初めましてだ、フザケるな。」
『シュラウド、何を言っている？私はただのガイアメモリ研究者だ。』
「ガイアメモリ研究者だと！？この街にドーパントを増やしてどうするつもりだ！！」
『お前の今まで壊したメモリは私の作ったものではない。アイスエイジにカメレオン。ＩＳ学園内のグリードどのメモリも私の作ったメモリに比べれば出力が格段に下。』
「なぜ俺の事を知っている、それにメモリのことも・・・！」
『常にお前を監視していたからだ。ＩＳ学園の寮を一歩出ればお前は私の監視下にある、今も・・・』
「どこだ！！どこにいる、姿を現せ！！」
『そう怒るな、近々会える機会はある。織斑千冬を介してな・・・』
「お前は敵か、それとも味方なのか！？」
『そう焦らなくても心配ないわ、お前には必ず私の力が必要になる時が来る。そして私の作った作品も・・・』
「お前が作った作品？」
『一つだけ聞きたいことがある、お前のメモリとベルトはどこで入手した？』
「俺に質問をするな！」
『そう、そうだったわね・・・』
「お前の名前は！？」
『鳴海文音。』
「鳴海・・・？織斑千冬が言っていた鳴海博士と言うのはお前か・・

・！？」
『・・・・・・』
「おい、答えろシュラッ・・・鳴海文音！！」
『ツーツー』

一方的に切られ、着信履歴から逆に電話するも『お客様のお掛けになった番号はただいま使用されておりません。』と番号廃棄されたとだけ告げている。

「ちょっとアンタ、職員室まで案内しなさいよ。」
「あぁっ！？」

後ろを振り返ると見慣れない小柄な女子が立っていた。

「お前は？」
「人に名前を聞くときは自分から名乗るのが常識じゃないの？」
「俺に質問をするな！」
「なにアンタ、かなり無礼ね。第一なんで男がココに居るのよ、先生呼ぶわよ！？」
「俺は今ＩＳ学園の生徒をさせられているんだ、別に問題はない。それよりお前は誰だ、答えろ！？」

謎の電話でイライラしていた照井は女生徒の腕をグッと掴み捻り上げ、壁へと押しつける。

「痛っ・・・アンタ女子に何してんのよ！！」

捻り上げた手にＩＳが展開され、一気に振り払われる。瞬時に受け身をとり構える照井へ堂々と名乗る少女。

「良いわ、あたしの名前は鳳鈴音（ファン リンイン）。中国代表候補生よ！！」
「ハァ～また代表候補生か・・・」
「自分の態度の悪さを謝るなら見逃して、職員室へ案内する権利をあげるわよ？」
「そうだな、謝る気は無いが職員室へ案内してやるからＩＳを仕舞え。」
「ハァ？アンタなんで上からなわけ！？」
「ココで戦闘を始めても良いが、すぐに織斑千冬が来るぞ？」
「えっ・・・あの人が居るの？」
「当然だろ、ＩＳ学園だからな。」
「そっかぁ・・・今はココで教師してるんだ・・・」
「織斑千冬を知ってるのか？」
「知ってるのなにも、ココに織斑一夏って居るでしょ？」
「ああ、居るな。」
「あたしはアイツの幼なじみで、あの人とも何度か会ってるわけ。まさか転校してすぐに会いに行く羽目になるなんて・・・」
「転校、そうだったのか・・・ついて来い、案内してやる。」

そう言い、先導して職員室へ鳳を案内し終えて自室へ戻り出す照井。既に九時を回り、消灯までの残り時間は一時間となっていた・・・

「わぁ！！・・・お、お帰りテルテルゥ～」

バスタオルを体に巻いた風呂上がりの布仏が恥ずかしそうに振り返っていた。日頃から見慣れているはずのルームメイトの顔が風呂上がりで少し赤くなっていて色っぽく、普段サイズの合っていない制服や着ぐるみの様な寝間着を着ているためにまったく分からなかった胸囲に初めて対面する。バスタオルを巻いた体で、初めて直視する布仏の胸・・・デカい。恥ずかしそうに睨まれた照井はようや

く思考が回転を始める。

「わ、悪い・・・」

ドアをバタンと閉めて、すぐに床へしゃがみ込んだ照井は自分の簡単なミスに嫌気がさし、それでも網膜に焼き付いた・・・正確には焦げ付いた光景が瞼を閉じる度にフラッシュバックする。今すぐにでも窓から飛び降りたい自己嫌悪へと追いやられてしまう。それから五分後、扉が開けられ布仏に部屋へ引きずり込まれていった・・・

そんなこんなでＩＳ学園にも慣れはじめ・・・？（後書き）

５月１９日日別最高ＰＶ数２，３７３を記録して以来、約５ヶ月ぶりに最高記録を１００ほどオーバーして新記録を更新しました！

第三、四位も１０月に更新したものばかりです。

みなさんに改めて感謝します、ありがとうございます！！

Mの磁界／やがて引き合う新たなる出会い

織斑一夏のクラス代表就任パーティーから一夜があけた朝、照井は寝苦しさを感じていた。何かが体に纏わり憑く様な、寝返りさえもろくに打てない状況。心の奥底では夢じゃないのかと理解しているのに、脳内では必死に一体のドーパントと戦っているアクセル（照井）は、どこからともなく香ってくる甘い芳香で寝苦しい悪夢から目を覚ました・・・

「ん？・・・・・・っ！？」

目を開け、額にビッショリと付いた汗を拭いながら視点の合わない目を必死に凝らすと真横には見慣れた顔があった。セシリア・オルコットが幸せそうにうっとりとした表情で眠っている、照井の首に両腕を回してだいしゅきホールド状態である・・・

「・・・ヤバい、マジでヤバいっ。昨日の今日でコレか、コレなのか？」

「んん・・・んっ？えっ！？キャァ～～～～～ッ！！！」

「っ！！」

悲鳴と共に飛び上がったセシリア・オルコットの平手打ちが照井の右頬を完璧に捉え、クリーンヒット。照井の右頬は手形が残り、真っ赤に染まっている。

「何しているんですか竜さん！！女性の寝込みを襲うなんて最低で

すわ！！」
「ん～騒がしいよテルテル・・・」
「落ち着けセシリア、ココは俺の部屋だ。で、なんでお前がココにいるんだっ！？」

落ち着けと言った照井竜本人が既にテンパっている。

「アレ・・・？あ、そうでした。昨日はお酒を飲んで、酔ってたのでした。」
「さ、酒？」
「それで、酔ったまま返し損ねたガイアメモリを返そうと竜さんの部屋に来たのですが・・・」
「酔い潰れて俺の布団で寝てしまった、と？」
「言い訳の余地もありませんわね」
「全くだ・・・勘違いで俺が頬を叩かれたと！？」
「嫌、それは・・・申し訳ないですわ・・・」
「テルテル、年頃なのは分かるけどルームメイトが居るんだから次から部屋に無断で女の子を連れ込むのは控えて欲しいな。」
「布仏、本気で怒るぞ？」
「わぁ～もう怒ってる・・・」

眉間に寄った皺がヒクヒクと動くのを見てヒキツった笑顔で返す布仏を無視してセシリアへ視線を戻す。

「ガイアメモリは？」
「はい、確かココに入れてたはずですわ。」

そう言い胸元へ手を入れて探り出す。

「もう良い、出ていけ。放課後に貰う。」
「・・・竜さん、そんなに怒らないでください。」
「黙れ、出ていけ。」
「あぅ～・・・・」

ウナダレた感じで１０２６室の扉を開け、寝間着のまま部屋を後にするセシリア。時計へ目を向けると５：３０を指していたので、たまには早めに着替えて朝支度をするのも悪くないと考えて、ゆっくりと制服へ袖を通し始める照井。そして着替え終えた照井は洗面場へ向かい歩き出す・・・

早く起きた照井はいつもより五分早く寮を出て、周囲をキョロキョロと見渡しハァ～っと溜息をもらした。それから隣の部屋の扉をノックし、朝食へと誘った。

教室、８時頃

クラス中が騒がしく、誰一人として席に着いていない。それは隣のクラスに転入生が来たという情報から１組全体が興奮している為であった。

「なぁ～竜、転校生がどんな奴か知ってるか？」
「あぁ、中国代表候補生だったか・・・？」
「代表候補生か・・・どんな奴なんだろうな」
「気になるのか・・・？」
「え・・・ああ・・・まあ少し」
「今のお前に女子を気にする暇はないぞ！来月にはクラス対抗戦があるんだからな！」

「そうですわ一夏さん！対抗戦に向けてより実践的な訓練をしましょう！相手は専用機持ちの私達がいつでも務めさせて頂きますわ、ね竜さん！」
「なぜ俺に言うんだ？」
「確かに実戦経験が必要だよな・・・竜も一緒に頑張ろうぜ！」
「気が向いたらな。」

「勝ってね織斑くん！」
「そうそう！織斑くんには是非勝って貰わないと！」
「優勝商品は学食デザートの半年フリーパス券だからね！」
「それもクラス全員分の！」
「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよ～ね、照井くん！」

「えっ、ああ・・・そうなのか、俺は別にそこまで好きじゃないが・・・」
「じゃ、じゃ～竜さんはどんな食べ物が好物なんですの？」
「甘くないもの・・・かな。甘味も嫌いじゃないんだがな。」
「そうですか・・・」
「取り合えず、目指すは優勝のみだよ！」
「お・・・おう・・・」
「まあうちには専用機持ちが3人もいるし楽勝だよ！ね、織斑くん！」
「えっ・・・ああ・・・」

困り顔で返事をする織斑。不意に教室のドアが開き明るい声が教室中に響きわたる。

「その情報・・・古いよ」
「えっ・・・」
「やはりお前か・・・」

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの、そう簡単には勝てないから」
「お前・・・鈴・・・お前、鈴か？」
「そうよ、中国代表候補生：鳳鈴音。久しぶりね一夏」

そこまで会話を交わすとSHRのチャイムが鳴り、織斑千冬が教室の入り口で立ち止まり鳳を撃退し2組へと追い返してしまった・・・

放課後、第三アリーナ

織斑一夏のIS技術向上のため量産機の打鉄を装備した篠ノ之と、専用機ブルー・ティアーズを展開するセシリア。照井はただその場に居合わせてるだけで全く練習に付き合う素振りを見せない。その後にタブーを口にした織斑が篠ノ之とセシリアに同時に襲われたのは言うまでもない事実で、それを止めたのが照井である・・・

それから、男対女の模擬戦の様な戦いに突入する。

照井の紅蓮が疾走し織斑の白式が飛翔する。それを追う様に飛ぶ打鉄と照井を止めようとする自立機動兵器（ブルー・ティアーズ）。四機とも思う様に連携がとれず誤射や誤斬を何度も繰り返してしまう・・・

ようやく一時間と言う頃合いで模擬戦を止めてアリーナ内のロッカールームへ戻り、更衣室で汗を拭き取り制服へ着替えている途中に全校放送で照井が呼び出された・・・

職員室内応接室。

「照井、こちらが対ガイアメモリ研究者の鳴海文音博士だ。」

「初めまして、と言うべきかしら照井竜？」

「お前が、鳴海文音・・・っ！！」

目の前には妙齢の女性がソファーに座り照井を鋭い目つきで見つめていた。

「本当はまだ会うべきではないと思っていたのだが織斑千冬に呼び出されてな。」

「そう言うな鳴海博士。コイツには街からガイアメモリを消す力がある。なら早い内に力を合わせて貰った方が良いだろう。」

「そうか・・・だが、俺はまだコイツを信用出来ない。」

「それは私も同じ事。なぜコイツが私の設計したアクセルドライバーを所持しているか教えて貰うまでは信用できないわ！」

「お前が設計した？」

「そう、なぜ設計図までしか作っていないアクセルドライバーをお前が持っている！？完成させたのは誰だ！？」

「俺に質問をするな。」

「それにアクセルメモリとエンジンブレードまでも手にしている。それはつまりエンジンメモリも持っていると言うことなのか？」

「嫌、エンジンメモリは故障中だ。」

そう言い、懐から使用不可能になりガイアディスプレイの焦げたエンジンメモリを見せる。

「ほう、ＥＭＰにでも壊された傷跡だな・・・織斑千冬、悪いが席を外してくれないか・・・」

「・・・分かった。」

スッと立ち上がり出ていく千冬。完全に聞こえない位置まで移動したことを確認し本題へと移る。

「お前の持っている物を全て出してみろ。」

「・・・分かった、良いだろう。」

そう言い、アクセルドライバー・トライアルメモリを目の前に置く。

「アクセルメモリはどうした？」

「ある人物に預けたままだ。」

「コレは、トライアルメモリ？最近ようやく考えついたメモリなのに・・・そろそろ理由を聞かせてくれ」

「俺は・・・俺はこの世界の人間じゃない。」

「ほお、興味深いことを言うのね。続けなさい」

「俺は一度死んで、別の世界へ飛ばされた。別の世界でさらに変な光に突入したら、この世界へ飛ばされていた。」

「それで？」

「俺が生前、たぶん説の世界のお前自身に貰ったのがコレだ。」

「ほぅ、実に面白い話だが信憑性に欠けるな。」

「その辺にしておけ文音。」

急に、入り口には白いソフト帽をかぶった男性が立っていた。

「荘吉、なぜお前がココにいる？」

「俺は探偵だ、依頼が有ればドコへだって現れる。」

「お前は・・・？」

「あんまり自分の秘密は喋るもんじゃないぞ坊主。その分だけお前の価値が下がる。」
「俺の価値？」
「男には危険な秘密が付き物と言う事だ。」
「興が削がれてしまったわ、また会いましょう照井竜。このメモリは私が何とかしてあげるわ。」

そう言いエンジンメモリをスッとポケットへ入れて応接室を出て行く。

「何だったんだ・・・？まぁ良いか、セシリアにアクセルメモリを返して貰わないとな・・・」

取り出した物を全て直し、照井も応接室を出ていった・・・

それから早くも一ヶ月が経とうとしていた・・・

織斑一夏のＩＳ技術も向上し始め、照井は空が飛べないというハンデからセシリアのスターライトＭｋ？と同じ大型長距離用の装備を新たに後付武装（イコライザ）として採用していた。

「へぇ～竜も狙撃銃を付けたのか。」
「あぁ、コレで飛べなくても対等に戦える。」
「折角ですから私が撃ち方を丁寧に教えてあげますわ。」
「いや、大丈夫だ。銃の腕には少々自身があるんだ、それより軽い模擬戦を頼みたいんだが良いか？」
「むぅ～・・・分かりましたわ。」

そう言い、ゆっくりと空へ上がっていくセシリアを眺めて紅蓮と

狙撃銃を展開する。

〈後付武装を確認。フォトンブラッド適合確認を開始します・・・〉

「オルコット、ちょっと待っててくれ・・・」

『どうしました？』

「適合確認だと言っている。」

『適合確認？聞いたこと有りませんわ』

「そうだな、俺も初耳だ。フォトンブラッドってなんだ？」

『フォトンブラッドとは何でしょう？』

「オルコットと初めて戦った時に装甲が紅く成った時もフォトンブラッドが正常作動中とか表示されていたな・・・」

『紅蓮の特殊スキルと考えるのが賢明かと思いますわ。』

「そうか、ありがとう。」

〈フォトンブラッド正常適合。問題有りません、通常通り使えます。確認ボタンを押してください。〉

白かった銃身が真っ赤に変わり、発光を始める・・・

「良し終わったな。オルコット準備完了だ！」

『それじゃ、行きますわよ！』

１０分後、照井へ一発も弾を当てることなく撃墜されてしまったオルコット。そして、何が起きたか分からないままの照井へオルコットが説明を始める。

「ＩＳにはオートＡＩＭと言う自動で相手を補足する能力がありまして、それによりスナイパーライフルのスコープを覗かなくても弾は相手へ向かって飛びますの。でも自動でロックオンすると相手の

ＩＳが関知して操縦者に教えてくれるんですの。」
「そうなのか・・・だから俺のＩＳも警告してるんだな」
「でも竜さんは瞬時に相手の姿を自分で補足しているから、撃たれる方も交わすのに一苦労なんですわ。どこかで訓練でもしていたんですか？」
「さぁ～な・・・」
「それに、通常弾より威力が高めの銃撃だったような気がしますわ。」
「それもＩＳの特殊能力なのか？」
「それは分かりませんが、その能力がＩＳに寄る物なら・・・例え私が第三世代のＩＳを使っていると言っても到底及ばない次元でしょう。」
「・・・そうか・・・」

「なあ竜、模擬戦終わったんなら俺の相手も頼むよ！」
「あぁ、構わんが・・・」
「本気で頼む、このままじゃ鈴に負けちまう。」
「そうなのか？」
「ああ、俺は強くなりたいんだ。鈴に勝って、証明しなくちゃいけないことが出来たんだよ。」
「分かった、全力で相手をしてやる」

織斑の相手も終え、ボロボロのまま一緒にロッカールームへ向かう二人。結局2対1・・・最後には3対1で照井をボコボコにして終わってしまった織斑、オルコット、篠ノ之は”終わった頃”に自分たちの訓練の意味を思い出しハッと成っていた。

クラス代表戦まで残り期限、一週間。

Mの磁界／ＩＳ　ｏｎ　ｔｈｅ　ＡＣＣＥＬ！！　Ｐａｒｔ　１

クラス対抗戦一週間前、ようやく対戦表が大々的に張り出された掲示板には人溜まりが出来ている。その中を潜り抜けて何とか対戦表を確認した織斑は直後に大人数から一斉に声をかけられる羽目となってしまった・・・

（酷い目にあったぜ。なんでこうも有名人扱いなんだ、俺？それに初戦で鈴に当たっちまうし・・・）

更衣室でＩＳ用のボディースーツへと着替えながら溜息を漏らし続ける。

（あれからずっと鈴には避けられるし、こっちは怒ってる理由すらわからないのに・・・どうしろって言うんだよ）

「こら！聞いているのか、一夏！」

「えっ？」

「明日からアリーナは対抗戦の調整で使えないんだぞ。時間は限られているんだ、ボーッとするな！」

「ああ・・・わかってる！」

「まあでも・・・操縦もようやく様になってきたな。これならきっと・・・」

「あら、出来ない方が不自然ですわ。何せ”わたくしが”教えているのですから」

セシリアの一言で箒の視線が鋭くなる。

「距離を置いた射撃型の戦闘法が役に立つものか。第一・・・白式

には射撃装備はない。」
「それなら篠ノ之さんの剣術訓練も同じでしょうに、ＩＳを使用しない訓練など実に時間の無駄ですわ」
「何を言う、剣の道は”見”！見とは全ての基本において」
「一夏さん！昨日の無反動旋回（ゼロリアクト・ターン）のおさらいをしましょう」
「でもアレって難しくて・・・」
「あら、竜さんも出来たんですからきっと出来ますわよ」
「嫌、竜とＩＳと俺の白式じゃ性能が随分違うんじゃ・・・」
「だから無視をするな！聞け、一夏！」

「一夏っ！！」

更衣室の扉が不意に開き鈴の声が響きわたる。

「鈴・・・！？っと、竜！？」
「ああ」
「鈴・・・お前俺の事避けてたんじゃ・・・」
「貴様どうしてココに！！」
「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」
「関係？はんっ、照井（コイツ）は一夏の関係者よ、あたしは付き添いだから問題ナシね」
「な・・・何ですって、竜さん！？」
「なっ・・・お、俺に質問をすりゅな」
「竜が噛んだっ！！」
「うっ、うるさいっ・・・！」
「ほ、ほほう・・・どういう関係か”詳しく”聞きたいですわね、盗人猛々しいとはまさにこの事ですわ・・・！」
「落ち着けオルコット。で、俺はお前をココに連れてくる条件として『面倒事に巻き込まない』だったはずだぞ鳳？」
「まぁ、良いじゃない細かいことは・・・それより一夏、反省した

？」
「無視ですの！？」
「今はあたしが主役なの、脇役はすっ込んでてよ」
「脇役・・・」
「ですってぇ！？」
「で、一夏？」
「えっ？」
「だから！怒らせて申し訳なないとか、仲直りしようとか、色々あるでしょ！」
「いや・・・そう言われても、お前ずっと俺を避けてただろ。こっちは何が何やらサッパリ」
「は？じゃあ何？女の子が放っておいてって言ったら何もせずに放っておくわけ？」
「そりゃ普通そっとしとくだろ、それが何か変か？」
「変ってあんたねぇ・・・いいからとにかく謝りなさいよ！」
「なんでだよ！ちゃんと約束覚えてたじゃねぇか！」
「まだそんな事言ってんの？約束の意味が違うの、意味が！！」
「意味って何だよ！俺が悪いなら理由を説明してくれよ！」
「説明したくないからこうして来てんのよ！気づきなさいよ！！」

だんだん言い争いが激しくなってくる二人。

「あったまきた・・・どうあっても謝る気は無いのね？」
「当然だ！自分が納得できないまま謝るつもりは無い！！」
「はぁ～織斑、鳳の顔を良く見ろ。涙目じゃないか」
「え・・・鈴、泣きそうなのか？」
「はぁ！？何言ってんの、馬鹿じゃない！？」
「ッ！馬鹿って何だよ！？」
「言葉通りの意味よ！！この馬鹿、アホ、朴念仁！！」
「うるさい貧乳！！」

プルプルと震え拳を強く握る鈴。その震えは悲しみではない、無論怒り。予備動作もなくＩＳを部分展開させ織斑へと殴り掛かる鈴。

（あっ、マズ・・・ッ！）

ビキィっと硬物がぶつかり擦れる音がする。照井が紅蓮を腕のみ部分展開させ織斑の前で鈴の”重い”一撃を受け止めていた。

「竜・・・」

「いったわね・・・言ってはならない事を、言ったわね・・・？」

確実に禁句を踏んでしまった一夏にキレた鈴。

（しまった・・・！鈴に貧乳はＮＧワードだった！）

「ごめん！”今のは”俺が悪・・・」

「今の「は」！？いつもよ！！いつもアンタが悪いのよ！！」

「そろそろＩＳを解除しろ鳳、キツい・・・」

とっさの判断で割り込んだ照井の体勢は不自然な物で、紅蓮の装甲にはヒビが入っていた・・・

「手加減はしてあげるつもりだったけど、どうやら死にたいらしいわね・・・いいわよ。、全力で叩きのめしてあげるわ！！」

「鈴・・・」

（やっちまった・・・売り言葉に買い言葉とはいえ、鈴が一番気にしてる事を言うなんて・・・）

「装甲が厚い竜さんのＩＳにヒビが・・・」
「なんて馬鹿力な・・・」
「パワータイプですわね・・・それも一夏さんと同じ近接格闘型の・・・」

一週間後、クラス対抗戦当日。

「うわぁ・・・満員御礼だな」
「それだけ注目されているのですわ。ちなみに会場に入りきらなかった人達は校舎内のモニターで観戦するんだとか」
「うう・・・何気にプレッシャーかけるなよ・・・」
「情けないぞ一夏。何を怖気づいている！しっかりしろ！！胸を張って堂々と行け！！」
「そうですわ、特訓の成果を披露してくださいませ」
「勝て！！」
「頑張ってください！！」
「箒・・・セシリア・・・竜は何も言ってくれないのかよ？」
「俺に変な期待をするな、だがまあ・・・勝てると信じてやる。」
「・・・信じてやるって・・・」
「時間だ、行ってこい。」
「・・・おう。」

ピットの出口まで進み、深呼吸。全神経を集中させＩＳを高速展開させて振り向きざまに三人へ言い放つ。

「勝ってくる！！」

「・・・」
「どうしましたの、竜さん？」
「最近この街は平和だと思ってな・・・」
「あら、良いことじゃないんですの？」
「だと、良いんだがな・・・」

lＩＳ　ｓｉｄｅ

『一組：織斑一夏、二組：鳳鈴音』

「逃げないで来たのね。今謝れば少しは痛めつけるレベルを下げてあげるわ」
「手加減なんていらねえよ、真剣勝負だ・・・全力で来い！」
「どうあっても気は変わらないって事ね。なら微塵も容赦はしない・・・この甲龍（シェンロン）で叩きのめしてあげるわ」

互いに専用武器を構えて試合開始の合図を待つ・・・

『それでは両者・・・試合、開始！！』

始まりの合図と共に青龍刀：双天月牙で奇襲をかける鈴。なんとか雪片で初撃を防いだものの、重い一撃に反撃をする隙はなく鍔迫り合いから退くだけで必死の一夏。なんとか間合いを空けて雪片を正面へ構え直す。

「ふうん・・・初撃を防ぐなんてやるじゃない」
「・・・どうも」
「そうだ・・・アンタの試合ビデオで観たわよ。確かに雪片のバリアー無効化攻撃は強大だわ。でもね・・・」

不適にニィと笑う鈴。

「雪片じゃなくても、攻撃力の高いＩＳなら絶対防御を突破して本体へ直接ダメージを与えられるのよ。勿論この甲龍もね。」

「つまり・・・」

（（条件は互角！！））

間合いを詰めた鈴の双刀が高速で一夏を襲う。素早い一撃一撃に、重い斬撃。さらには受け辛い場所ばかりを狙った攻撃・・・

（くっ・・・さばきにくい！！このままじゃ防戦一方だ、距離を取って・・・）

「甘いっ！！」

一夏の腹部に衝撃が走り、何かによって一夏は吹き飛ばされてしまった・・・

ｌＲｙｕ'ｓ　ｓｉｄｅ

「一夏！！何だ今のは・・・何も見えなかったぞ！！」

「・・・『衝撃砲』ですわね・・・空間自体に圧力をかけ砲身を生成。余剰で生じた衝撃を砲弾にして撃ち出したのですわ・・・」

「あのＩＳ、甲龍の右上に付いたスラスターから撃ち出したのか。厄介だな・・・」

（一夏・・・！！）

ｌＩＳ　ｓｉｄｅ

「よく耐えたわね。『龍砲』は砲身も砲弾も見えないのに」

（厄介だな・・・空間の歪み、大気の流れの変化をハイパーセンサーが捉えたから衝撃を減らせたけど　・・・撃たれてから動いたようなもんだ。どこかで先手を打たなくちゃ・・・）

口の中が切れて口の中いっぱいに血の味が広がり、それをペッと吐き捨てながら思考を巡らせ続ける・・・

（バリアー無効化攻撃は諸刃の剣だ。”当たれば”大幅に敵のエネルギーを削れるが、外れた場合は”こちらが”防御力を損なう・・・いつ勝負に出るか・・・その見極めが物を言う。）

スッと全神経を研ぎ澄まし、雪片を正面に構える。一つ大きな深呼吸をし心を決める。一ヶ月で学んだ事を脳内から引き出して瞬時に確認する。

（セシリアにはＩＳの基本動作を、箒には刀の間合いと特性を徹底的に叩き込んでもらい、竜には心構えと実戦を・・・それでもやっぱり足りない経験の差は、気合いで上回ってやる！！）

「鈴、本気で行くからな！！」

「当たり前でしょ、格の違いを見せてあげるわ！！」

互いに高速で接近し武器を振るおうとした瞬間、アリーナの天井を突き破り何者かが二人の合間に割って入った。

（（！？））

「何だ・・・！？」

（今の衝撃は一体・・・コイツ等がやったのか？こんな・・・全身装甲のＩＳなんていままで見たこともない。それに、もう一体は最近のニュースで噂のドーパントって奴か！？）

「一夏！試合は中止よ！今すぐピットに戻って！」
「っ！」
「アイツ等、アリーナの遮断シールドを力ずくで破壊したのよ。とんでもなく強い力を持ってる・・・ドーパントなんかに攻撃されたらタダじゃすまないわ。あたしが時間を稼ぐから一夏は早く逃げて・・・！！」
「そんなことさせられる訳ないだろ！！お前が逃げろ、俺が守ってやる。」
「バカッ！！アンタのが弱いんだからあたしがやらなきゃしょうがないでしょうが！！」
「・・・・・・」
「別に最後までやりあう気はないわ。こんな異常事態・・・先生たちがすぐに収拾に来てくれるはず・・・」
「でもそれまで・・・誰かが時間を繋がなきゃ」
「だからアンタは・・・」
「鈴、あぶねぇっ！！」

一夏が敵の攻撃から鈴を守ろうと前に出る。

「一夏っ！！」
「っ！！」
≪ＡＣＣＥＬ！！≫
「変身！」

≪ＡＣＣＥＬ！！≫

ヤバいと目を瞑った瞬間、二人の少し上から何かが飛び降りてきた・・・そのまま漆黒のＩＳが放ったビーム兵器を全身で受け止めて、少し後ろに飛ばされながら無事に着地する。

「クッ・・・なんて威力だ・・・」

「「なっ（えっ）・・・？」」

二人に浮かんだのは同じタイプの動揺で、何が起きたのか理解できないままである。

「竜・・・なのか？」

「俺に質問をするな、来るぞっ！！」

「あっ、ああ！！」

二度目の砲撃を交わし、一カ所に固まり作戦を立てる。

「ドーパントは俺が倒す、あのＩＳはお前たちに任せて大丈夫か？」

「ああ、俺が何とかしてみせる。でも竜、なんだよその姿・・・」

「うるさい、無駄話をする暇はない。まだ客席には生徒が大勢残っているんだ、さっさと終わらせないと大惨事になるぞ！？」

「よし、あのＩＳは俺が倒す！！」

「はぁ！？何言ってんの？アンタの方が弱いんだからあたしの足手まといにならないでよね！？」

「うっ・・・」

「よしっ、決まりだ！！」

アリーナ内で危険な戦いが始まろうとしていた。

「貴様は俺が相手だ！！」

アクセルはバイク形態で無理矢理ドーパントを押し、アリーナの端へと追いやり漆黒のＩＳから距離を取る。

「さぁ振り切るぜ！！」

「よし鈴、俺たちもやるぞ！！」

Mの磁界／ＩＳ　ｏｎ　ｔｈｅ　ＡＣＣＥＬ！！　Ｐａｒｔ　１（後書き）

今回は３つに分けようと思います。

これが１

漆黒のＩＳが２

仮面ライダーが３

ちなみに、３では１で照井が出てくる前くらいから書き始めようかと・・・

Mの磁界／IS on the ACCEL!! Part 2

照井竜：仮面ライダーアクセルが二人と離れてから数分。未だに10分と満たない短時間の内に全身装甲を施した漆黒のISが撃ち出してきた砲撃は数え切れない程のものだった。
それを交わし、防ぎ、弾道をギリギリまで反らし、アリーナの観客席には絶対に届かせないように戦闘を続ける二人。それは、世界最強（ブリュンヒルデ）の期待以上だと言っても過言では無かった。だが、それと同じように世界最強の裏の顔が、実の弟の身の危険を心配する姉の顔が露わになっていた。

「お前・・・何者だよ！」
「・・・・・・」
「一夏、衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。武器・・・それしかないんでしょ？」
「ああ、じゃ行くか・・・！！」

ぜあっ！！

「・・・ちっ・・・！」
「馬鹿！これで四回目よ、ちゃんと狙いなさいよ！」
「狙ってるっつーの！アイツが早いんだよ」
（全身についてるスラスターのせいか、ゼロ距離から一瞬で離脱される。異様なスピードだ・・・！）

既に四回、様々なタイミングで奇襲をかけては見るものの全て攻撃が当たる直前で交わされてしまう。さらに距離を取り、体力の回復をはかると両手からビーム砲を両手から出しながらの回転攻撃・・・

「一夏！また来る！！」
（そして・・・回避後のこの回転ビーム攻撃。これが厄介で追いつめられない！）
「ああっ、もう！！めんどくさいわね！コイツ！！」

ビーム砲を交わした鈴が衝撃砲を放つも難なく防がれる・・・
「また防がれた・・・！！」
「見えない衝撃砲を7回も止めるなんて・・・アイツ一体何なの・・・？」

《残りエネルギー：５７％》
（参ったな・・・バリアー無効化攻撃を出せるのはあと一回・・・）
普通に攻めたところで奴に攻撃は当たらない・・・
何か・・・・・
何か突破口はないのか・・・？
そうだ、竜はまだ戦ってるのか・・・？
っ！ダメだ、最近の俺はすぐ竜に頼ろうとする癖がついてる・・・
ココは俺が何とかしなきゃな、考えろ。
俺の一撃は簡単に交わされる、アイツは7回も鈴の攻撃を防いだ。
何か手は・・・待てよ、7回・・・も？
まさかアイツ・・・

「鈴・・・エネルギー、あとどれくらい残ってる？」
「１８０ってところね。現在の火力でアイツのシールドを突破して・・・機能停止させられるのは、確率的に一桁ってところかしら・・・」
「ゼロじゃなぁ良いさ。」
「・・・何か閃いたの？」
「アイツの動きってさ・・・何つーか・・・機械じみてないか？」

攻撃回避の後・・・
アイツは必ずあの回転攻撃をする。
俺と鈴・・・どちらの攻撃の後でもだ。
それに対抗した鈴の衝撃砲をアイツが防いで・・・
そしてまた同じことの繰り返し。

「寸分違わない行動を、アイツは7回も繰り返してる。」
「え・・・？つまり、どういうこと？」

「生身の人間から感じる緩急や乱れ・・・そう言うのが、アイツにはないんだ。あれって・・・本当に人が乗ってるのか？」
「なっ・・・！ちょっと待ってよ、ＩＳは人が乗らないと動かないのよ？無人で動くＩＳなんて世界中のどこにも・・・」
「本当にそう言い切れるのか？どこかの国が開発に成功して利権のために黙っているかもしれない。」

「・・・・・・」

漆黒のＩＳはただ二人の動きを観察するように、ゆっくりと眺めている・・・

「それは・・・そういうこともありそうだけど・・・仮によ、アレが無人機なら・・・勝てるっていうの？」
「ああ・・・人が乗ってないなら”全力”で攻撃しても大丈夫だしな。」
「はあ！？全力も何も、その攻撃が当たってないじゃない！」
「次は当てる」

ニィっと勝ちを確信したかのように笑う一夏。

「言い切ったわね。じゃアレを仮に無人機だと仮定して攻めましょうか？どうしたらいい？」
「俺が合図したらアイツに向かって衝撃砲を撃ってくれ、最大出力でな！」
「？　良いけど当たらないわよ？」

「良いんだよ、当たらなくて！よし・・・じゃあ早速、突撃するぞ！！準備良いか！？」
「”アタシに質問しないで！！”」
『一夏っ！！』
「箒！？そんな所でなにしてるんだよ！！」

なんの仕切りもないアリーナのピットからマイクを持った箒の声がスピーカー越しに響く・・・
漆黒のＩＳも箒の方へ目が向く。

『男なら・・・男なら、それくらいの敵に勝てなくてなんとする！！』

（（マズい・・・！！ダメだ・・・間に合わない！！））
≪ＴＲＩＡＬ！！≫
「鈴！やれ！！」
「わ・・・わかったわ！！”龍砲”最大出力・・・いくわよ！！」

グッと構え敵へ向けた瞬間に一夏が龍砲の前に立ち塞がる。

「ちょ・・・ちょっと馬鹿なにしてんのよ！！どきなさいよ！！」
「いいから撃て！！」
「・・・！ああもう！！どうなっても知らないわよ！！」

ＩＳの瞬時加速は、後部スラスター翼からエネルギーを放出。
それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する事で莫大な速度を発揮する。
竜はそれをラムジェット理論に似てると言っていた。
だが、流用するエネルギーは外部のものでも構わない！！

一夏の背中にとんでもない程のＧがかかり、一瞬にして相手の眼前へ迫っていた。

「オォオオオオオオッ！！！！」

＊

「”零落白夜”？」
「そうだ。白式が雪片を媒体にして発動する、エネルギー質のものを全て無効化する攻撃・・・それが零落白夜。白式の単一仕様能力だ」
「零落白夜・・・」
「攻守に関わらず相手のエネルギーを消滅させる能力は確かに試合では心強い。だが・・・同じ生徒相手に使うには威力が高すぎるという弱点もある。白式ほど攻撃に特化した機体なら、万が一最悪の事態もありえるからな。一夏・・・白式がお前の機体・・・お前の力だ。それを何時、何の為に使うのか・・・見極められるようになれ！」

＊

俺は千冬姉を、箒を、鈴を、セシリアを、竜をっ！！
・・・関わる人全てを、守る！！

スパッと相手の右腕を切り落とし、そのまま横を素通りする。そ

のまま切り落とされた右腕は爆散する・・・
それか漆黒のＩＳが振り返り残った左手を構える。
《敵を戦めｔｕ、ｔきｗｏ戦ｍ・・・ｔｕ、ｔ・・・ｋｉ・・ｗ・・・ｔｕ》
「マズッた・・・！？」
「織斑・・・っ！！」
アクセル・トライアルが敵に向かい跳躍する。そのままガッチリとホールドし全身で砲撃を受け止め、敵の全身を上空へ向ける。
「・・・オルコットォオオ～～～っ！！」
『聞こえてますわ！』
「狙いは！？」
『バッチリですわ！！』
自立機動兵器とスターライトＭｋ？の全力砲撃で敵機ごと地面へ埋まるアクセル（照井）
「竜っ！！」
織斑がクレーターへと近付こうとすると砂埃の中からゆっくりとコバルトブルーの青い手が現れ、這い出てくる・・・
「竜、無事だったのか・・・？」
「ぐっ・・・うあぁ・・・っ・・・」

変身が強制解除され地面へと倒れてしまう。

「竜っ！？」
「竜さん！？」
「ちょっ、ねぇ！！竜！？」

照井の意識は完全に飛んでいた・・・

Mの磁界／IS on the ACCEL!! Part 2（後書き）

取り合えず、次で鈴編が終わって

オリジナルをドーパント編を経由してシャル編

で、ラウラ編に行こうかと・・・

気長に読んでいただけると幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2328s/

照井竜とアクセルの異世界巡り

2011年10月26日06時25分発行